

国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室

紀 要

2

2 0 1 6

国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室

紀 要

2

2 0 1 6

序 文

このたび、『紀要2』をお手元にお届けできる運びとなりました。本書の「第Ⅰ部」では、論文3本、研究ノート1本、合計4本の論考を収録することができました。2014・2015年度に実施した徳島市三谷遺跡の発掘調査報告、近年の考古学における水稻農耕開始前後の気候変動論の検討、常三島遺跡の近世火葬墓に関する論考、南庄遺跡出土の素文鏡に関する論考など、内容は多岐にわたり、いずれも考古学、あるいは歴史学の進展に貢献するものです。

「第Ⅱ部」は、2014年度の業務・活動報告となりますが、同年度は新たなチャレンジの目立つ充実した1年であったと思います。発掘調査については、常三島地区で1件と、石井地区で1件、合計2件の試掘調査が実施されました。常三島地区での地域創生・国際センター新営に伴う試掘調査では、近世徳島藩城下町「常三島」地区の盛土の南限が検出されました。また、石井地区での試掘は、新設される生物資源産業学部の豚舎新営に伴うものであり、同地区においての本調査室初の調査となりました。調査だけでなく、整理作業にも力を注ぎ、長年の懸念事項であった『新蔵遺跡ー地域・国際交流プラザ地点ー』の報告書を刊行することができました。また、本学構内遺跡の調査研究、調査室員による研究成果の迅速な発信、調査室全体の業務・活動報告を目的として、新たに『紀要』と『ニュースレター』を刊行しました。さらに、ミニ展示「江戸時代の常三島」を開催し、これまでの調査研究の成果の一部を学内外へ発信しました。今後、これらの成果が、考古学・歴史学などの学界、あるいは大学・地域社会において、幅広く活用されることを期待しています。

現在、本調査室では、構内の再開発も一段落し、従来の発掘調査中心の業務から、出土文化財の整理作業とその活用を中心とした業務へと大きく転換しつつあります。出土文化財の活用における最終的な目標は、社会構成員が一体となって、こうした文化財を、大学・地域を代表する「文化遺産」の高みへと押し上げることです。そのためには、学内外の学識経験者、市民の皆様からの積極的なご参加がいつそう必要となります。今後とも、どうかご支援・ご協力のほどお願い申し上げます。

平成28年3月31日

徳島大学埋蔵文化財調査室長

端 野 晋 平

例 言

1. 本書は、考古学および本学構内遺跡の調査研究に関する論考と、本調査室が2014年度に実施した業務・活動報告を掲載した紀要である。
2. 徳島大学の三つのキャンパスはすべてが周知の埋蔵文化財包蔵地である。本学では、蔵本地区所在の遺跡を庄・蔵本遺跡、常三島地区所在の遺跡を常三島遺跡、新蔵地区所在の遺跡を新蔵遺跡と独自に呼称している。本書ではこれに従う。
3. 執筆者は目次に記載するとともに、第Ⅰ部は文頭に、第Ⅱ部は文末に記した。
4. 付編は端野晋平室長の指導のもと、脇山佳奈が作成した。
5. 本書の編集は、端野の指導のもと、脇山が行った。
6. 本書で使用した座標の値は、世界測地系による平面直角座標系（第Ⅳ系）に依拠する。方位は座標北、レベルは海拔標高である。
7. 土層の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』に準拠した。ただし、立会調査についてはこの限りではない。
8. 本書に掲載した徳島大学構内遺跡の調査記録および出土遺物は、人骨を除いてすべて徳島大学埋蔵文化財調査室で保管している。今後、研究・教育の場で積極的に活用されることを期待する。

目 次

第 I 部 論 考

論 文

- 徳島市三谷遺跡の研究1－徳大1・2次発掘調査成果から－ …………… 中村 豊 … 3
考古学における気候変動論の検討
- －日本列島・朝鮮半島の水稻農耕開始前後を対象として－ …………… 端野晋平 … 25
常三島遺跡の近世火葬墓 …………… 端野晋平・米元史織 … 37

研究ノート

- 南庄遺跡出土素文鏡について …………… 脇山佳奈 … 53

第 II 部 2014年度の業務・活動報告

第 1 章 常三島遺跡地域創生・国際センター新営に伴う試掘調査

- …………… 三阪一徳 … 63
- 第 1 節 地理的・歴史的環境と既往の調査 …………… 63
- 第 2 節 調査の概要 …………… 63
- 第 3 節 調査成果 …………… 67

第 2 章 石井地区生物資源産業学部豚舎新営に伴う試掘調査

- …………… 端野晋平 … 73
- 第 1 節 調査の概要 …………… 73
- 第 2 節 調査の経緯 …………… 73
- 第 3 節 調査の記録 …………… 73
- 第 4 節 ま と め …………… 74

第 3 章 立会調査の概要 …………… 脇山佳奈 … 78

第4章 出土資料の整理・公開・活用	端野晋平	81
第5章 調査室員の研究教育実績	端野晋平	83
第6章 業務・活動報告のまとめ	脇山佳奈	86
付 編		
1. 沿 革		87
(1) 埋蔵文化財調査室設置以前		87
(2) 徳島大学埋蔵文化財調査委員会・同調査室設置以降		87
2. 2014年度徳島大学埋蔵文化財調査室組織		90
3. 徳島大学埋蔵文化財調査室規則		90

第Ⅱ部 挿図目次

第1図	常三島遺跡と周辺の遺跡	64
第2図	既往調査地点と本調査地点の位置	65
第3図	調査地点平面図と土層断面の位置	66
第4図	B区土層断面	68
第5図	本調査地点と『御山下島分絵図』との重ね合わせ	71
第6図	出土遺物	72
第7図	調査地点の位置	74
第8図	試掘坑の位置	75
第9図	土層断面図	76
第10図	明治29年における調査地点周辺の土地利用状況	76
第11図	2014年度蔵本地区立会調査地点	78
第12図	2014年度南常三島地区立会調査地点	79
第13図	ミニ展示のポスター	81
第14図	『新蔵遺跡―地域・国際交流プラザ地点―』正誤対応図1	103
第15図	『新蔵遺跡―地域・国際交流プラザ地点―』正誤対応図2	104

第Ⅱ部 表目次

第1表	2014年度立会調査地点	79
第2表	発掘調査（2014年度まで）	92
第3表	立会調査（2013～2014年度）	96
第4表	埋蔵文化財調査室収蔵遺物概要（2014年度現在）	98
第5表	埋蔵文化財調査室刊行物（2014年度まで）	102
第6表	埋蔵文化財調査室刊行物正誤表一覧	102

第Ⅱ部 写真目次

写真1	調査風景	67
写真2	B区西壁B-B' 土層断面	69
写真3	重機掘削風景	77
写真4	試掘坑東壁土層断面（西から）	77
写真5	1-1地点南壁（北から）	80
写真6	1-2地点北壁（南から）	80
写真7	1-3地点西壁（東から）	80
写真8	1-5地点東壁（西から）	80
写真9	2地点北壁（南から）	80
写真10	3-1地点南壁（北から）	80
写真11	3-2地点南壁（北から）	80
写真12	3-4地点南壁（北から）	80
写真13	ミニ展示の開催風景	82
写真14	整理作業の風景	82

第 I 部

論

考

徳島市三谷遺跡の研究 1

－徳大1・2次発掘調査成果から－

中村 豊*

*徳島大学大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部

はじめに －調査の意義と目的－

徳島市三谷遺跡(写真1)は、縄文時代晩期末から弥生時代前期への移行期を中心とする遺跡である。過去に2度ほど調査がおこなわれ、下記の4点など、重要な歴史的意義を提供してきた。

1つは貝塚など廃棄場が検出され、当該期の生業が復原できる点である。とくに、貝塚出土の動物骨・堅果類と栽培植物(イネ・アワ・キビ・アズキ)との共存から縄文/弥生移行期の生業、すなわち農耕の起源を考える上で、きわめて重要な遺跡といえる。

2つ目は凸帯文土器と遠賀川式土器が共存している点である。これらの土器が、互いに影響を与えあって展開していく様相を考える上で重要である。

3つ目は石棒祭祀が盛行していることである。石棒は縄文文化を代表する文物であり、三谷遺跡のみならず、農耕開始期の地域社会、列島西部の地域間交流を復原する上で重要である。

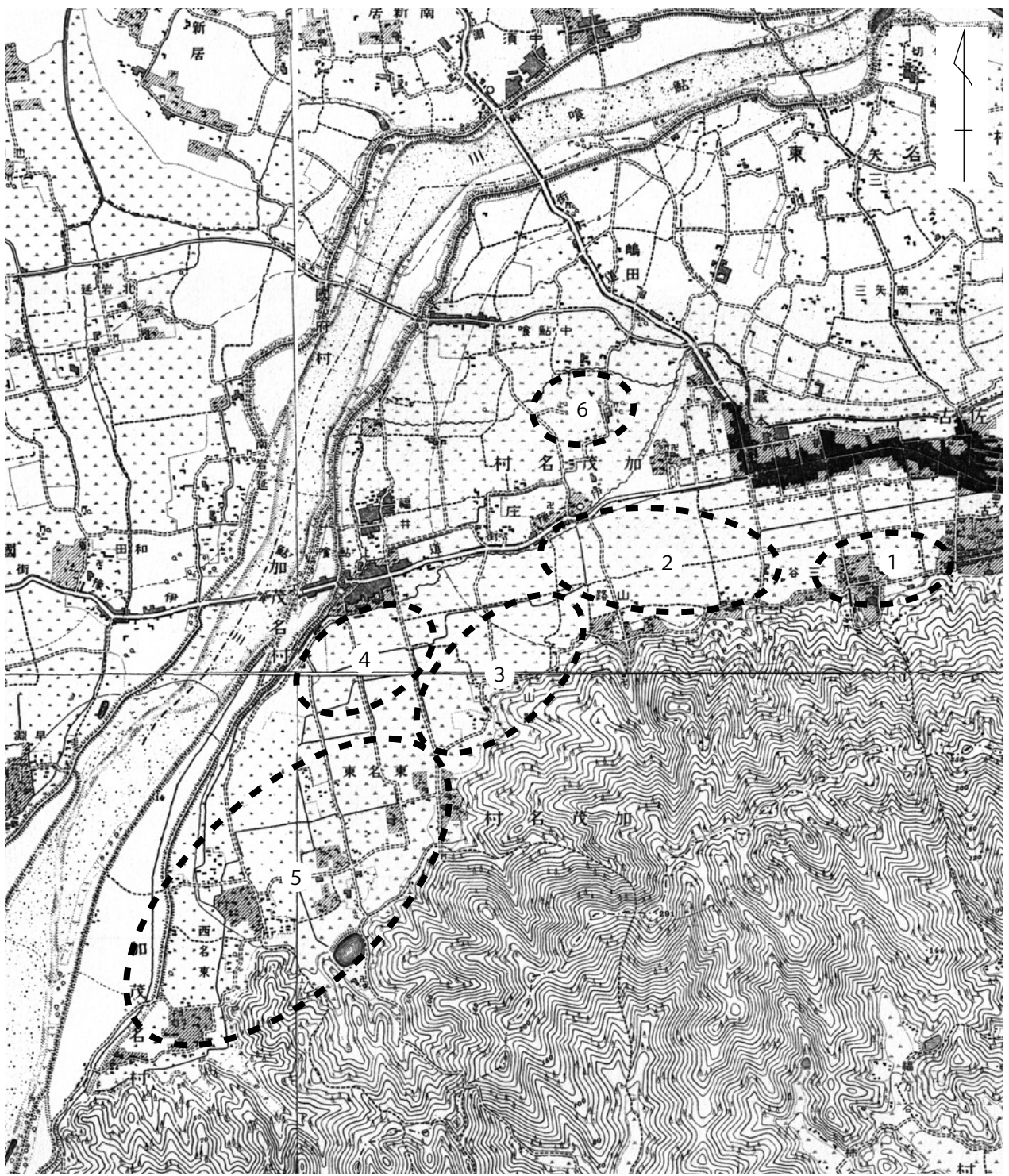
4つ目は代表的な初期弥生集落である徳島市庄・蔵本遺跡が、わずか西方約500mに位置することである。両遺跡の比較検討は、縄文/弥生両時代の移行史を考える上で、貴重な情報を提供するであろう。

これまでの三谷遺跡の調査では、集落縁辺部の廃棄空間や祭祀空間の調査に限られているので、今後の検討課題は、生活域や生産域が乗ると考えられる微高地の位置を探り、可能な限り上記4つのテーマにせまるところにあるといえる。

これらの諸課題に取り組む目的で、徳島大学総合科学部考古学研究室では、2014年～2016年度日本学術振興会科学研究費(基盤研究C26370897『縄文/弥生移行期における農耕の実態解明に関する研究』)を活用して徳島市三谷遺跡の発掘調査を継続している。ここでは、2015年2・3月におこなった第1次調査、同9月におこなった第2次調査(以上、三谷遺跡徳大1・2次調査)の成果を報告することとする。なお、第3次調査(三谷遺跡徳大3次調査)は2016年2・3月に予定している。

1. 遺跡の立地と環境

吉野川下流の海岸線は、縄文海進期において現JR高徳線からさらに西方にいたるまで侵入する三角江を形成したと考えられている(阿子島1972、古田1996・1999、中尾1997)。その後も徳島平野の三角州形成は遅れたと考えられ、海蝕痕の残る旧臨海部の丘陵付近を除いて、出土する遺物の多くは平安期以降である。旧砂堆と考えられる微高地からも、縄文時代から古墳時代にかけての遺物が出



1 三谷遺跡 2 庄・蔵本遺跡 (南蔵本遺跡・庄遺跡・蔵本遺跡)
3 南庄遺跡 4 鮎喰遺跡 5 名東遺跡 6 中島田遺跡
(※正式二万分一地形図集成中国・四国 | 徳島・小松島浦・高畑・石井より)

第 1 図 周辺の遺跡 1:25,000

土することは多くはない。これは、大阪平野や太田・黒田遺跡を擁する和歌山平野などと比較しても際立つ特徴であると考えられる。一方、縄文海進期の沿岸部に相当する鮎喰川下流の扇状地性の平野では、縄文時代中期末からいち早く居住可能な微高地を形成した。たとえば、鮎喰川左岸の徳島市矢野遺跡では、当該期の集落跡がみつまっている。

今回の研究対象となる三谷遺跡の位置する徳島市眉山北西麓、すなわち鮎喰川右岸の沖積平野では、縄文時代後期後葉以降の遺跡が多数確認されており、縄文時代晩期末・弥生時代前期初頭以降は、県内屈指の遺跡密集地となることがわかっている（第1図）。

かつて鮎喰川の有力な一分流は、眉山に沿って北東方面に流れていた。これは、1947年米軍撮影の空中写真判読や発掘調査から旧河道（開析谷）^{註1)}が復原されたものである（阿子島・黒田1978、瀧山1988、古田1996・1999）。この開析谷は、山麓に形成された崖錐状の微高地を避けるように蛇行するとともに、蛇行部の凹岸側にもポイントバー状ないし中洲状の微高地を持っておりこれら両岸微高地を中心に各遺跡は展開するのである。

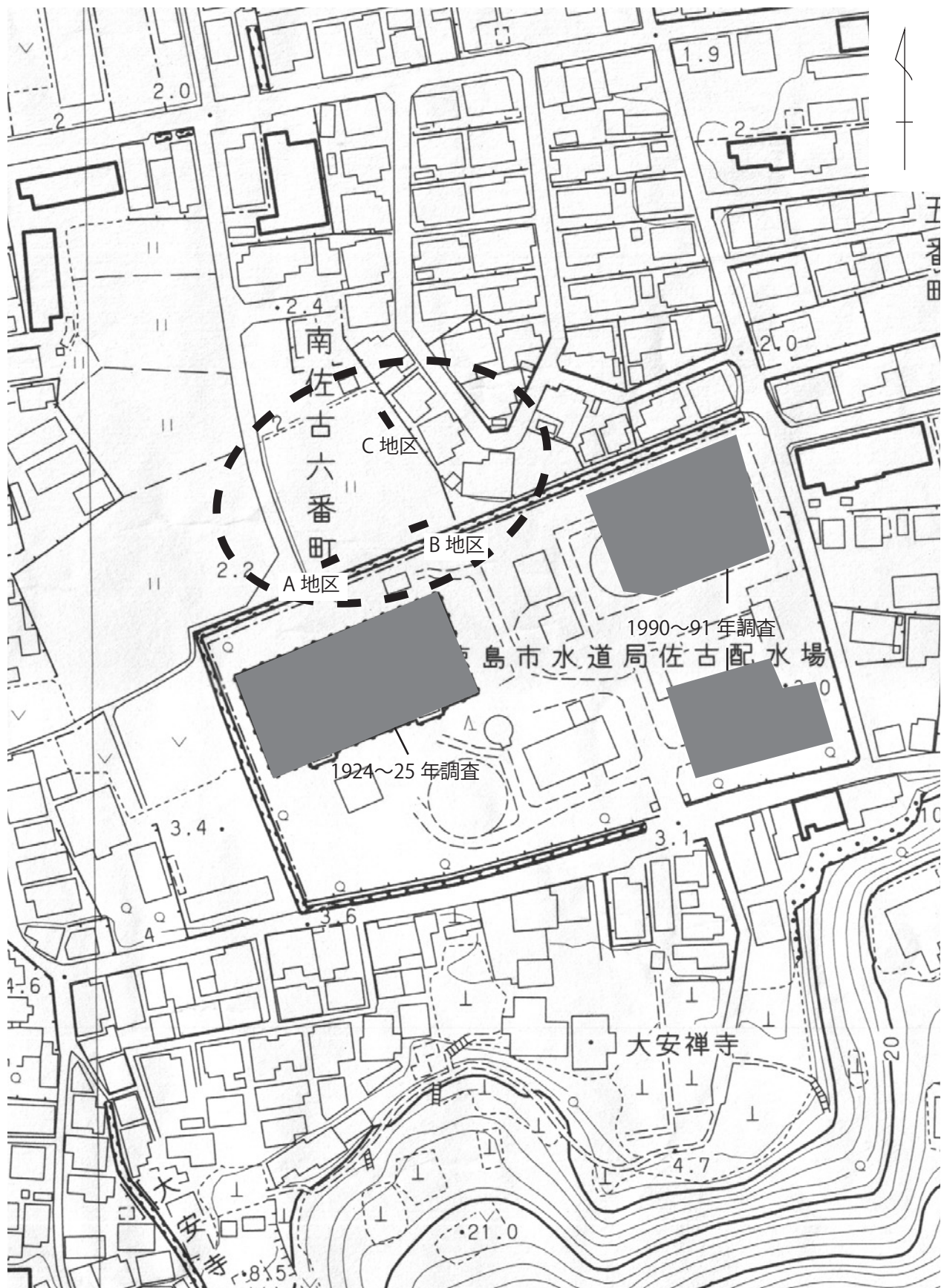
三谷遺跡（第1図1、写真1）は、縄文海進期の沿岸部付近に相当する眉山北麓の南佐古六番町に位置する。既に2次にわたる調査がおこなわれており、縄文時代晩期末・弥生時代前期初頭を中心とする遺跡であることが判明している（森1926a・b、勝浦編1997）。弥生時代前期中葉には廃絶され、弥生時代前期末・中期初頭におこった大規模な洪水砂の堆積以降は、拡大した微高地を積極的に利用していく。

三谷遺跡の西方500mほどのところには庄・蔵本遺跡（第1図2）^{註2)}が位置する。庄・蔵本遺跡では、遺跡西端部の旧大蔵省蔵本団地地点において、縄文時代後期後葉および晩期中葉の開析谷と、それに隣接する集落跡がみつまっている（森本・湯浅1996、前川1997、岡山1999）。続く縄文時代晩期末・弥生時代前期初頭の遺構・遺物は、大学構内南西端～山麓（北條編1998、勝浦1999）と南東端～山麓（中村2010、近藤編2014）の2か所に点在する。弥生時代前期中葉には集落が拡大し、開析谷を水源とする大規模な灌漑施設や水田遺構がみつまっている。この灌漑施設や水田遺構は弥生時代前期末・中期初頭には埋没し、廃絶されるが、拡大した微高地には有力な遺跡が営まれ続ける。

庄・蔵本遺跡の西南に隣接する南庄遺跡（第1図3）は、弥生時代前期末・中期初頭に形成された微高地上に、集落が断続的に営まれている（瀧山1989）。弥生時代中期後葉の集落跡からは、藍閃石片岩製の柱状片刃石斧未製品が多量にみつまっている。眉山は藍閃石片岩の有数の産地として知られており、原石を得て交易目的で製作されていたものと推察される。

南庄遺跡の西南方・眉山の西麓には、鮎喰遺跡（第1図4）・名東遺跡（第1図5）が立地する。鮎喰遺跡では、弥生時代前期初頭の集落が乗る古い微高地が存在する。弥生時代前期末・中期初頭以降は微高地が拡大したようで、弥生時代後期後半以降の遺物が多くみられる。名東遺跡では、天理教施設建設に伴う調査において、三谷遺跡に若干先行すると考えられる縄文時代晩期末の凸帯文土器がみつまっている（勝浦1990）。名東遺跡でも弥生時代前期末・中期初頭以降微高地の拡大がみられ、弥生時代中期以降大規模な遺跡が確認されている。ここでは埋納銅鐸（扁平鈕式六区袈裟襷文）がみつかり、また計30基を越えるような方形周溝墓群がみつまっている。

上記の遺跡群は、いずれも弥生時代終末期をひとつのピークに規模を縮小し、古墳時代を通じて大



第2図 調査地の位置 1:1,500

規模な集落跡は見出されていない。眉山北麓では古墳そのものも多くはない。一方西麓では積石塚の前方後円墳である八人塚古墳をはじめ、前期・後期を中心とする古墳群を形成する。

古代・中世以降の遺構・遺物は、比較的多くみつがっている。奈良・平安前期にかけて、弥生時代前期末以後も残った開析谷などの起伏を埋めるような整地痕も認められる。とくに庄・蔵本遺跡西半一帯^{註3)}では、巡方や墨書土器など、官衙的な性格の施設をうかがわせるような遺物が多く出土する(福家 1984、中村編 2005)。一方、三角州地帯においても荘園開発などはおこなわれつつあったと考えられるが、黒色土器などが断片的に出土するにとどまっている。鎌倉期にいたって、中島田遺跡(第1図6)にみられるように、三角州地帯においても、ようやく大型の集落が営まれるようになってくる。三角州地帯では、地域の中心となるような大型の遺跡は、中世を通して、中島田遺跡、板野郡藍住町守護町勝瑞周辺、徳島市川内町大松遺跡などを数えるくらいである。

近世以降は、城山を核とする三角州地帯に徳島城下町が整備され、沿岸部に新田開発が及ぶようになる。ここにいたってようやく三角州地帯の開発が本格化する。

鮎喰川も蓬庵堤が築かれるとともに、現在の位置に固定される。眉山北西麓には名東用水が開削され、再び水田化された様相がうかがえる。

2. 既往の調査

三谷遺跡(写真1)では、これまでに2次にわたる調査がおこなわれてきた(第2図)。1924・25年には、徳島市水道局三谷濾過池建設にともなって、すでに東京帝大人類学教室を去っていた鳥居龍藏・小松真一の指導のもと、森敬介担当の調査がおこなわれた(森 1925a・b、小川・森 1960)。貝塚、竪穴などとともに、縄文土器(アイヌ派)・弥生土器(固有日本人)、石器(「大石棒」2点など)、丸木舟(実際は流木)などが出土している。森は、砂層・粘土層の堆積状況と、貝塚や竪穴・石棒などが調査地南東から北西にかけて展開し、流木が調査地北東に分布する様相から、開析谷南西側の岸部が、北西から南東へ向かって展開する様相を復原している^{註4)}。すなわち、濾過池の南西側の微高地上に生活空間がのり、開析谷へ向かうような位置に貝塚などが営まれ、北東側の開析谷を埋める砂層に流木がみられるという様相である。出土遺物には、石棒2点のほか木葉文を持つ遠賀川式土器壺(森 1930)や「装飾把手を有する四国随一の薄手派アイヌ土器(森 1925a・b、小川・森 1960)」などがみられたが、今日所蔵先は知られていない。

1990・91年には、徳島市教育委員会によって徳島市水道局南佐古浄水場増築工事に伴う調査がおこなわれた(勝浦編 1997)。浄水所東半に2か所の調査区(南側:Ⅰ区、北側:Ⅱ区)が設定された。眉山麓に相当するⅠ区からは、旧河道(開析谷)が検出されるも、遺物の出土はほぼみられなかった。また、近世の溜池跡も検出されており、Ⅰ区付近が低湿であったことがわかる。Ⅱ区からは、北側調査区外に展開する微高地から南側の開析谷へ向かう移行部の自然凹地に貝塚が形成され、凸帯文土器と遠賀川式土器が共伴して出土するなど、多量の遺物が廃棄されていた。貝塚からは7体にもおよぶアイヌの埋葬がみられ、22点にもおよぶ石棒が出土していること、骨角製の玉類(川添 2012)や有文精製土器が多く出土していることなどからみて、単なる廃棄場ではなく、祭祀の場も兼ねていた可能

性が高いと考えられる。中部高地の土器（氷Ⅰ式土器）や在地産とは考えがたい胎土を有する凸帯文・遠賀川式土器、風化面の顕著なサヌカイトの大型剥片なども多くみられ、外部にも開かれた地域を代表する中心的集落であったと考えられよう。また植物質食糧は、イチイガシのほかアズキ、イネが出土し、レプリカ法からアワ・キビの存在が知られている（中沢ほか2012）。すなわち、すでに農耕を開始していたのである。貝塚はⅡ区南側のみならず、東端にもみられることや地形の判読などから、開析谷は調査区東側で大きく蛇行し、北東方向に向かっていた可能性が高い。

1924・25年、1990・91年の調査とも貴重な資料が出土しているものの、いずれも開析谷近辺の低湿地に面した廃棄空間や祭祀空間であり、微高地上に営まれた生活域や生産域の様相は明らかではない。とくに、石棒未製品が出土することから、石棒を製作した遺構や、イネ・アワ・キビ・アズキなどの生産域を探ることは極めて重要な課題である。そこで、徳島大学による調査では、微高地や開析谷の位置を確定することによって、三谷遺跡の景観復原へむけての情報をえて、可能であれば居住域や石棒製作跡、生産域などを探る手がかりをえたい。周辺は宅地化が進み、わずかに耕作地を残すのみとなっている。三谷遺跡の研究は今まきにおこなわなければその機会を半永久的に失う状況にあるといえるのである。

3. 徳大第1次調査

(1) 調査の経過

第1次調査は2015年2月16日から2015年3月16日までおこなった。調査体制は以下の通りである。

調査員 端野晋平（徳島大学埋蔵文化財調査室長・准教授）、三阪一徳（徳島大学埋蔵文化財調査室助教）、脇山佳奈（徳島大学埋蔵文化財調査室助教）

調査補助 入口成味、藤丸七海、松村幸奈、福田有賀、門出有芳葉、朝野友一、内田紗希、近藤 里、他徳島大学総合科学部学部生

調査協力 東 玉子（土地所有者）、城 明弘、三木治郎、米沢忠之

調査指導 勝浦康守（徳島市教育委員会）、近藤 玲（徳島県埋蔵文化財センター）、高島芳弘（徳島県立博物館・徳島県立鳥居龍蔵記念博物館）、早淵隆人・西本和哉（徳島県教育委員会）、湯浅利彦（徳島県立小松島高等学校）

調査担当 中村 豊（徳島大学大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部准教授）

(2) 調査地の位置

既往の調査地（第2図）は、すべて徳島市水道局佐古浄水場敷地内である。現時点で佐古浄水場敷地内での調査に向けた動きはとっていない。また、佐古浄水場の北側、東側、南側の東半分、西側南半分は宅地化によって調査できない状況である。一方、浄水場北側西半の耕作放棄地と、同西側北半の屋敷畑のうち作物を植えていない部分は、今回土地所有者のご好意によって調査許可を得ることができた。微高地の存在が想定できる屋敷畑の調査は、耕作もあり、宅地に近いこともあるので、十分な関係を築いてから後年おこなうこととし、まずは浄水場北側西半の耕作放棄地において調査を着手

することとした。既往の調査地が浄水場敷地内ということもあるので、極力敷地に近い部分にA・B計2か所のトレンチを設定した（第2図）。

既往の調査成果からみて、開析谷の西岸が1924・25年調査地の濾過池中心部を北西から南東へと向かい、東岸が1990・91年調査地をかすめて北西から南東へ向かっている。すなわち、埋没開析谷が浄水場の敷地を北西方面から南東方面へと向かい眉山の山裾で北東方向へ急転して蛇行している様相を想定できた。調査目的である微高地の位置は、浄水場西側の崖錐状の高まりと、北側のポイントバー状ないし中洲状の高まりに想定できたが、西側は先の理由によって後回しとし、北側の微高地と開析谷との位置関係把握を第一の目的とした。

(3) A地区の調査

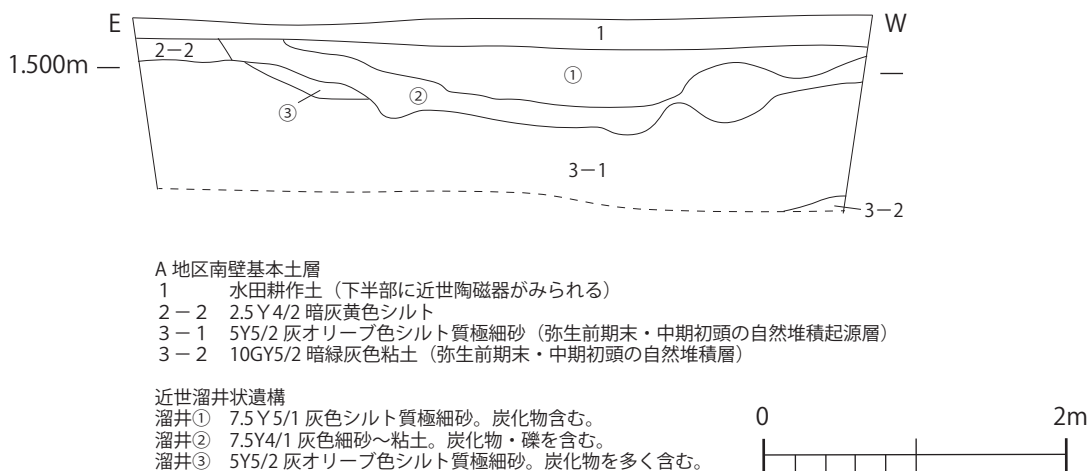
A地区は、浄水場北側の耕作放棄地南西部分に設定した（第2図、写真2奥、写真3）。現地表は標高1.8mほどである。調査面積は10㎡である。既往の調査や空中写真、西側隣接地に小規模な溜池が位置する^{註5)}ことから、低湿な開析谷に相当すると考えられた。この推定を確かめる意図をもって調査区を設定することとした。

基本層序

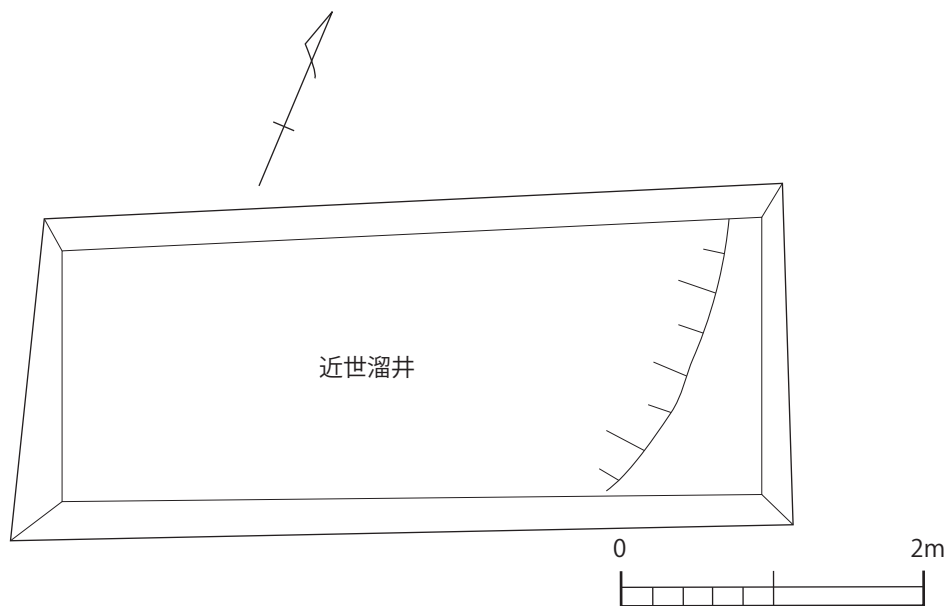
第1層は水田耕作土である。15cmほどの厚さを持つ。下半部分から近世の陶磁器が出土することがある。第2-2層は暗灰黄色シルト層で、弥生時代前期末～古代にかけての旧地表（土壌化層）であると考えられる。第3-1層は灰オリーブ色シルト質極細砂層である。第3-1・2層は、開析谷を埋め、周辺に洪水砂を提供する砂層であると考えられる。上端部には乱された痕跡が認められる。遺物の出土は確認できなかった。標高約0.5mまで同じ層が続くことを確認したが、湧水と崩落が激しいため掘削を断念した（第3図、写真3）。

遺構

調査地中央部に径2mほどの溜井状の遺構を検出した（第4図、写真3）。近世の陶磁器片が若干出土している。西方に隣接する溜池との関連性が考えられる。



第3図 A地区南壁土層断面図（1/50）



第 4 図 A地区平面図 (1/50)

遺物

A 地区からも遺物は出土しているが、いずれも小片である。

(4) B 地区の調査

B 地区は、浄水場北側の耕作放棄地南東部分に設定した (第 2 図、写真 2 手前、写真 4 ~ 6)。現地表は 1.8 m ほどである。調査面積は 10 m² である。本調査区南東の浄水場施設において、縄文時代晩期末から弥生時代前期初頭にかけての、微高地から開析谷への移行地が検出され、貝塚やイヌの埋葬地がみられた。B 地区においても微高地端部の検出が想定された。

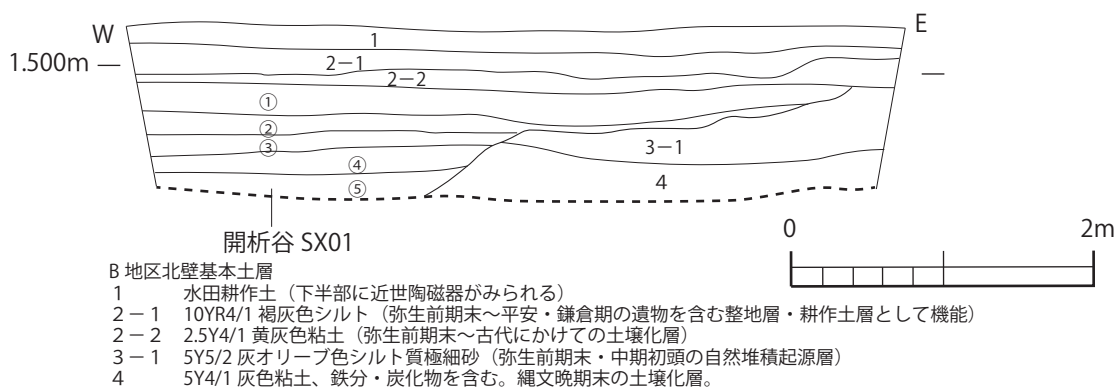
基本層序

第 1 層は水田耕作土である。15cm ほどの厚さを持つ。下半部分から近世の陶磁器が出土することがある。第 2-1 層は褐灰色シルト層で、弥生時代前期末から平安・鎌倉期におよぶ遺物を含んでいる。古代から中世にかけての整地層・耕作土層と考えられる。B 地区ではとくに厚く堆積し、開析谷に残された起伏を埋める整地層としての機能をうかがわせる。標高約 1.4 m にみられ、40cm ほど堆積する第 3-1 層は灰オリーブ色シルト質極細砂層である。弥生時代前期末・中期初頭に開析谷を埋めるとともに、周辺の低地部への洪水砂の供給源と考えられるが、後世に若干攪拌を受けている可能性がある。標高約 1 m に堆積する第 4 層は灰色粘土層で、縄文時代晩期末の旧地表 (土壌化層) と考えられる (第 5 図、写真 4)。

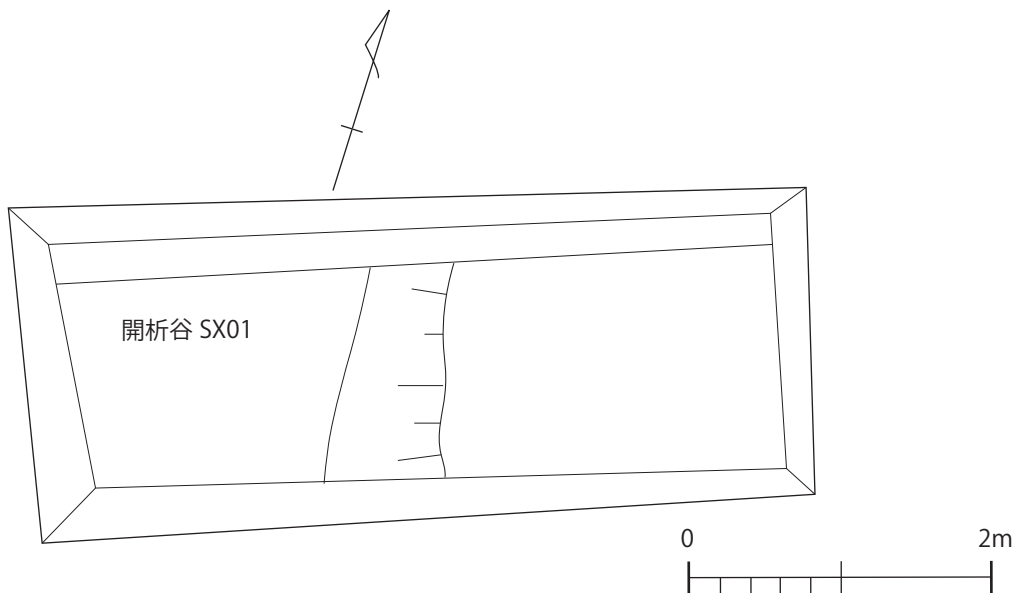
遺構

標高 1.4 m ほどのところで、調査地西方に位置する微高地から開析谷への落ち際、すなわち東岸の一部を検出したとみられる。この落ち込みを開析谷 SX01 とする (第 5・6 図、写真 4 ~ 6)。1924・25 年調査によって復原された西岸からその規模を復原すると、幅約 20 ~ 30 m ということになる。

SX01 の第①・②層は灰褐色シルト~粘土層で、弥生時代~古代の土器を出土する。第③層は黄灰



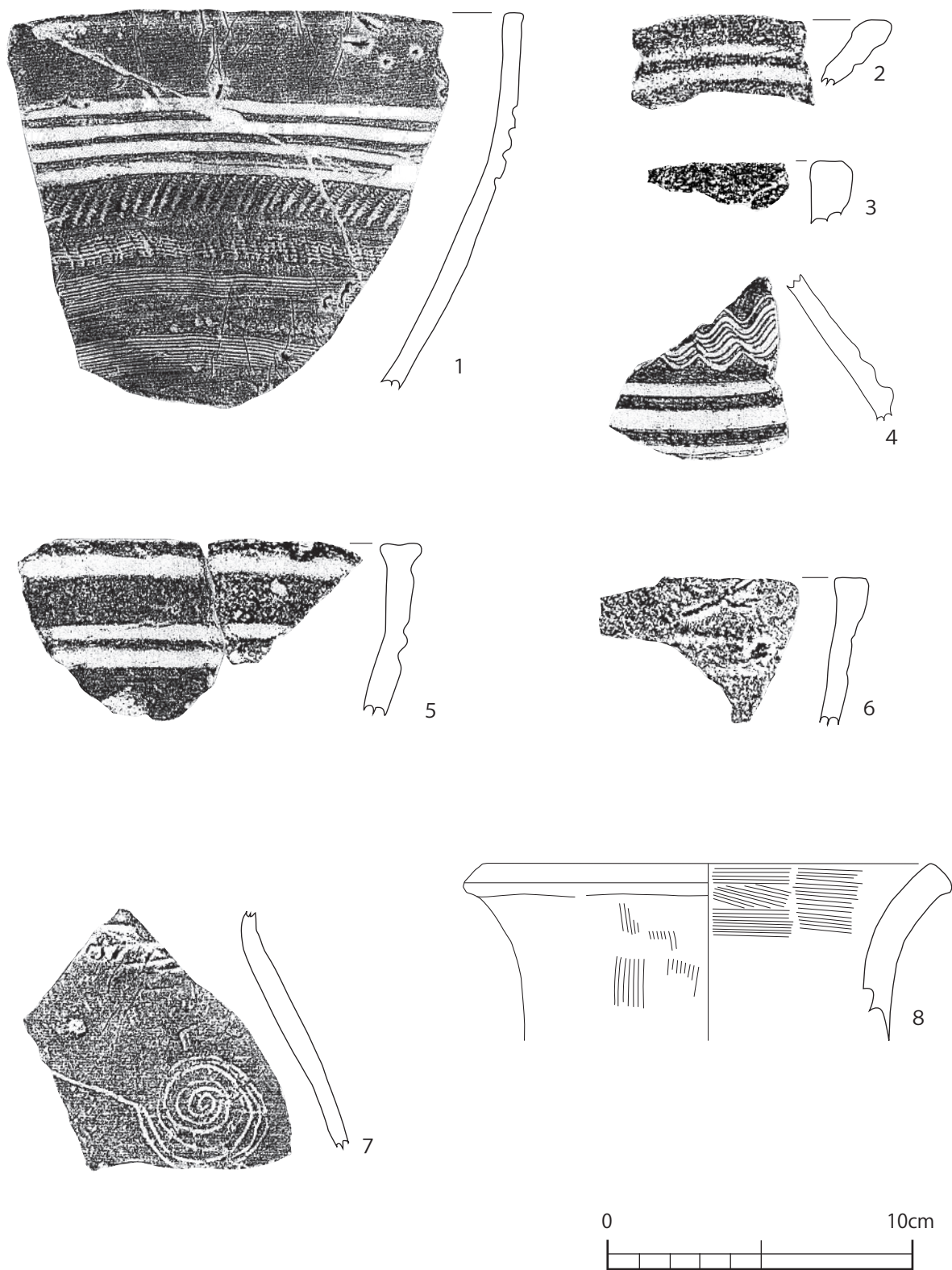
第5図 B地区北壁土層断面 (1/50)



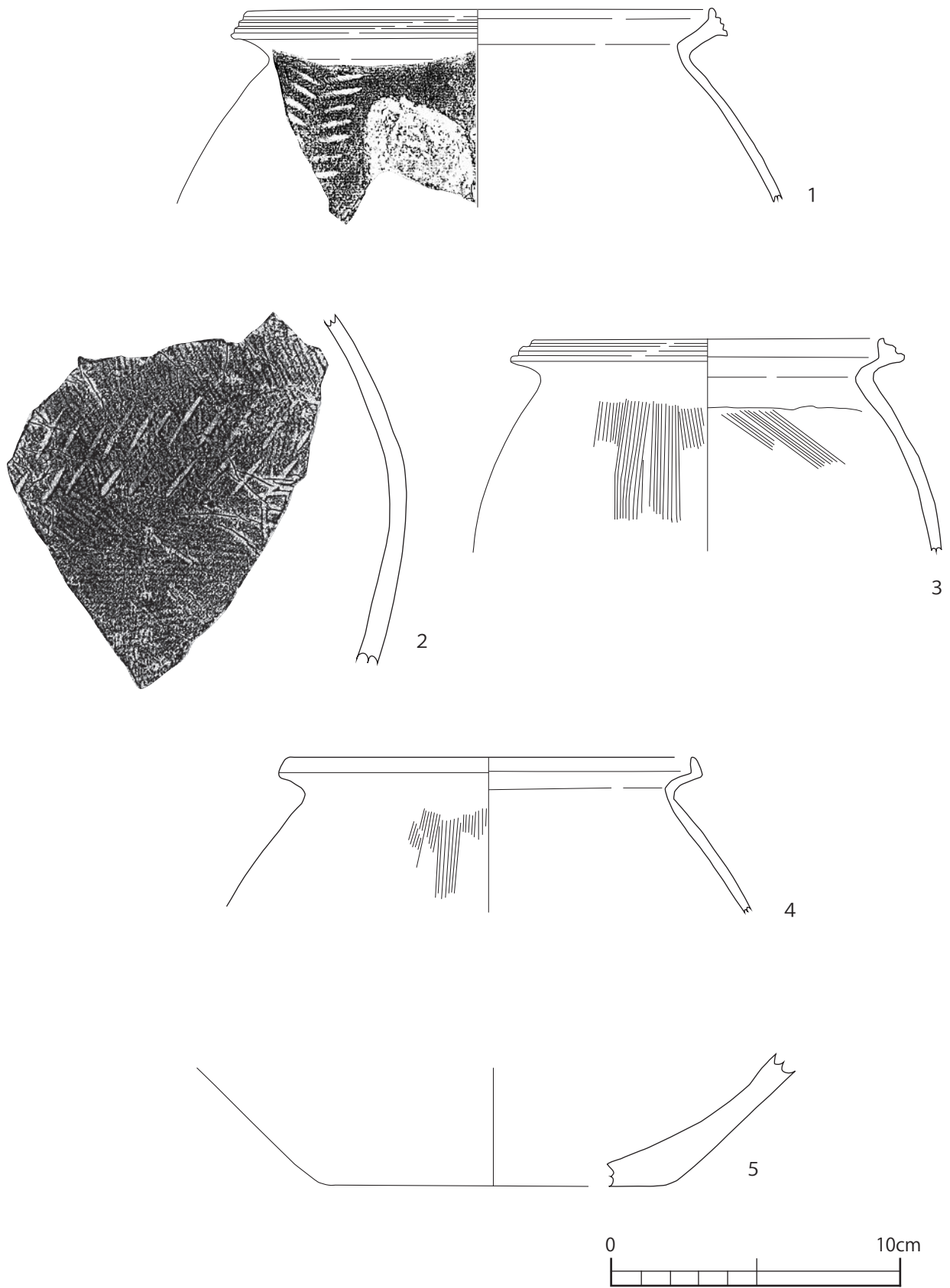
第6図 B地区平面図 (1/50)

色粘土、第④層は黒褐色粘土、第⑤層はオリーブ黒色粘土層で、いずれも炭化物・鉄分・木片を含んでいる。弥生時代中期後葉・後期後葉の土器を出土する。標高 0.4 m まで掘削したところで、湧水が顕著となり、調査区の崩落もみられたため、掘削を停止した（第5図・写真4）。

この調査区では縄文時代晩期末～弥生時代前期の土器は出土していない。しかし、既往の調査からみて開析谷が縄文時代晩期末以前から存在していたことは間違いない。弥生時代前期末・中期初頭に洪水砂の堆積がみられ、大部分は埋没し、地下水脈になったと考えられるが、凹地状の地形は健在で、弥生時代中期～後期に小規模な開析はみられた可能性がある。その後古代にかけて、上層部に残された凹地に遺物の廃棄がみられ、最終的には平安～鎌倉期ごろまでには、微地形を残し埋没は完了したものと考えられる。



第7図 B地区開析谷 SX01 出土土器 1



第8图 B地区開析谷 SX01 出土土器 2

開析谷 SX01 出土遺物

開析谷 SX01 第③～⑤層からは、弥生時代中・後期の土器・石器が出土した（第7～9図、写真5・6）。なお、第①・②層は、凹地として残された部分に後世堆積し、攪拌を受けたもので、古代までの土器が出土する。いずれも小片であり図示にはいたらない。

第7図1～6は弥生時代中期後葉の壺と考えられる。1は口縁部に4条の凹線を施す。以下、楡原体による押し引き、簾状文、楡描文2条を施す。2・5・6は口縁部に凹線を施す。口縁端部に面取りを施す。3は無文の土器である。4は壺の胴部で、楡描波状文下に凹線文を施す。7・8は弥生時代後期の壺である。7は頸部～胴部で、口縁部に凸帯、胴部に渦巻文を施す。8は無文の壺口縁部である。

第8図では弥生中後期の甕を図示した。1は口縁部に凹線を施し、胴部に綾杉状のタタキを施す。2は甕胴部で胴部最大径付近に斜方向の短沈線を連続する。3は口縁部に凹線を施し、胴部内外面ハケメ仕上げである。4は頸部で強く屈曲し、短く立ち上がる口縁を持つ無文の甕である。5は無文の甕底部である。底面に種子状の圧痕を持つ。1～3は中期後葉、4は後期、5は中後期であろう。

第9図1は結晶片岩製の台石である。上面に顕著な擦痕を認めることができる。

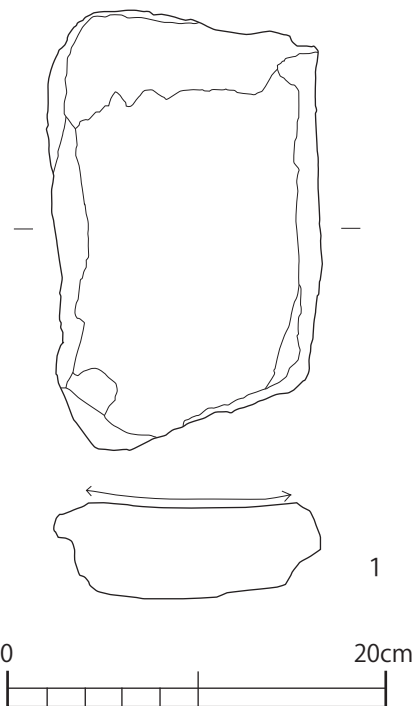
包含層出土遺物

第1層・第2-1層から多量の遺物が出土した（第10～12図）。第10図1は弥生時代後期の壺である。口縁部に凹線を施す。2は弥生時代中期後葉の高杯脚部である。裾部に凹線を施し、内面にヘラケズリが認められる。3は小型の土師器鉢である。4～7は須恵器杯身である。8は須恵器高杯、9は提瓶または壺の口縁部である。10～12は杯蓋である。いずれも6世紀代のものであろう。

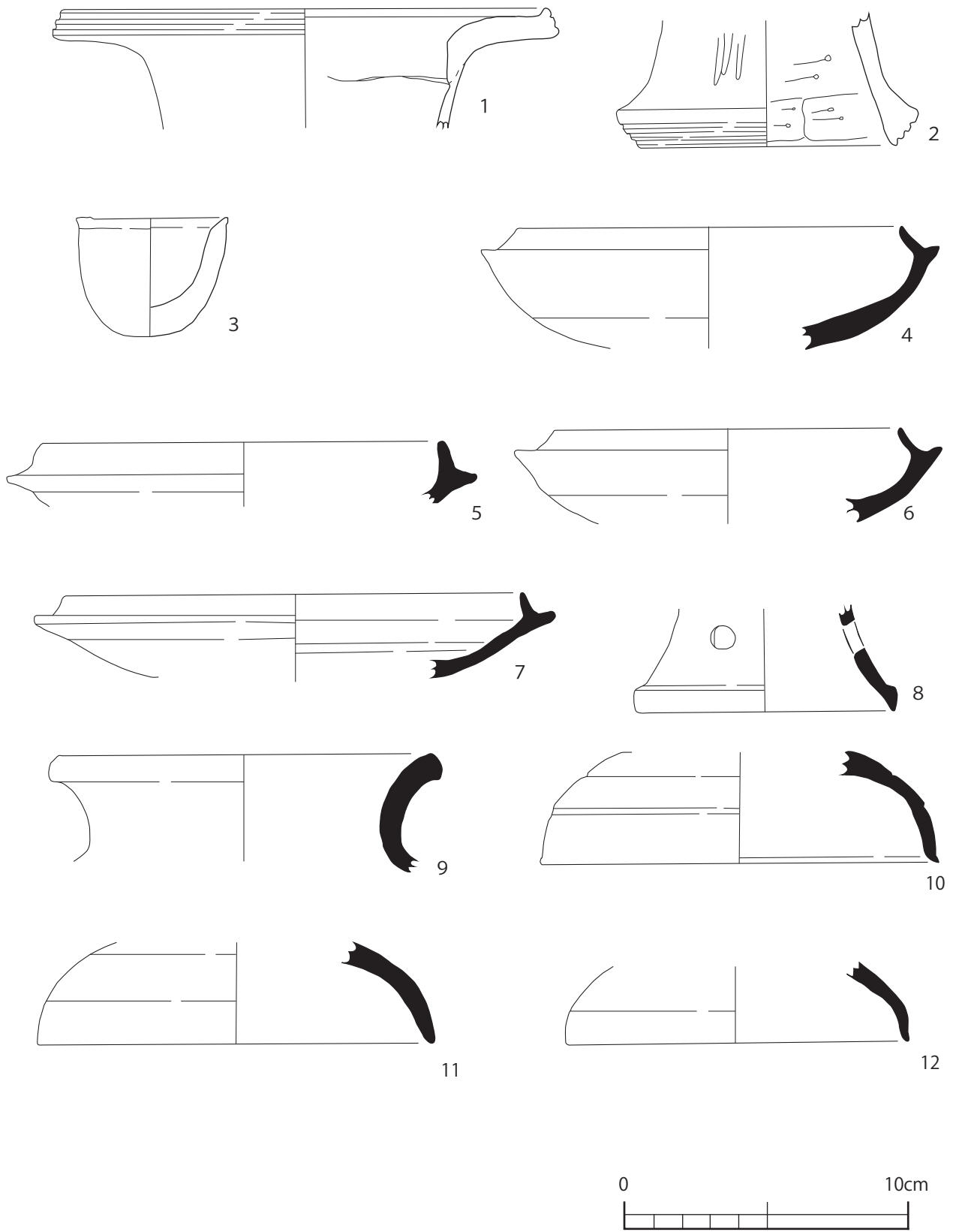
第11図1・2は土師器皿、3は土師器の高台部である。4は須恵器の高台部、5は黒色土器碗である。第2層からは瓦器の小片も出土しており、これが下限となる。6～9は土錘である。6・7は管状土錘、8・9は棒状土錘である。10は磨石で、上面に擦痕をとどめている。ひん岩である。11は敲石である。火を受けて風化が進んでいる。砂岩である。12は棒状の敲石であり側面に敲打痕を顕著に残している。線条痕もみられ、砥石としても用いられたと考えられる。緑色岩製である。

第12図1は棒状の敲石である。体部と上下端に敲打痕がみられる。硬質砂岩（変成作用を受けた砂岩）製である。2～4はいずれも石棒で、泥質片岩製である。2・3には点紋が認められる。3・4はいずれも未製品である。石棒は微高地上端（縄文時代晩期末・弥生時代前期初頭包含層）を削平し、凹地部を埋める際に混入したものと推察される。

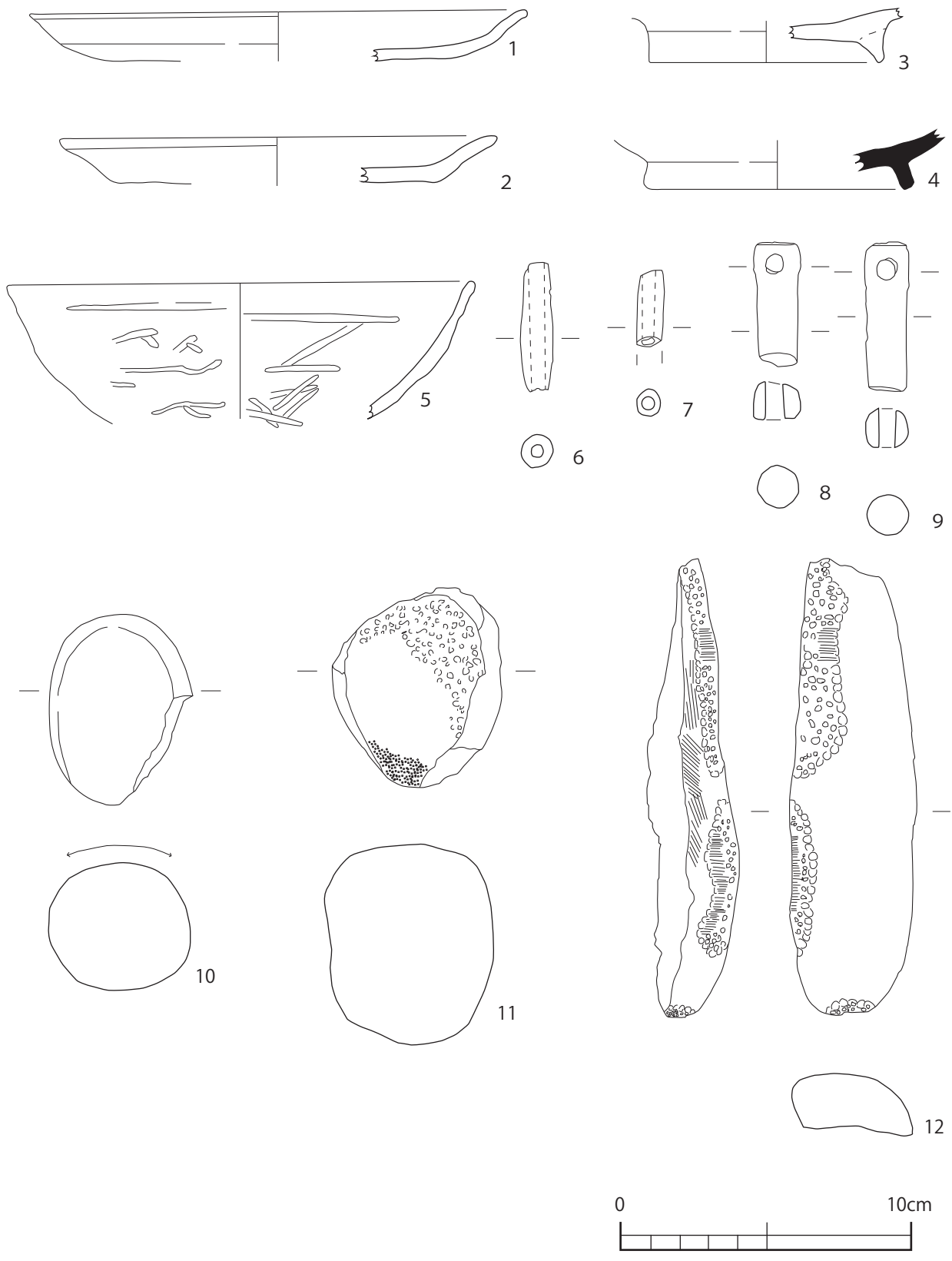
なお、第1層からは近世～現代にかけての遺物細片が出土する。



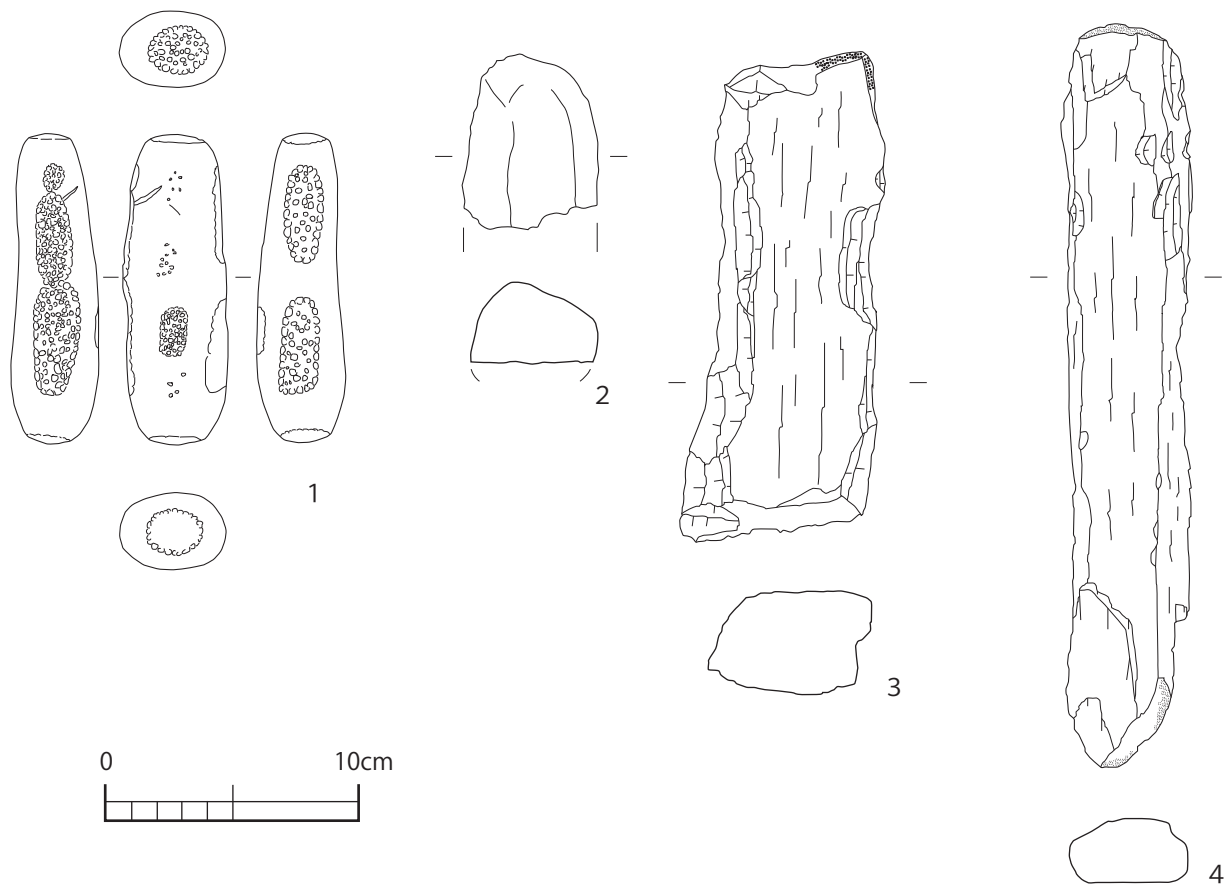
第9図 B地区開析谷 SX01 出土石器



第 10 图 B地区遺物包含層出土土器 1



第 11 図 B地区遺物包含層出土土器 2・土製品・石器 1



第12図 B地区遺物包含層出土石器2

4. 徳大第2次調査

(1) 調査の経過

第2次調査は2015年9月7日から9月25日までおこなった。調査体制は以下の通りである。

調査員 端野晋平（徳島大学埋蔵文化財調査室長・准教授）、三阪一徳（徳島大学埋蔵文化財調査室助教）、脇山佳奈（徳島大学埋蔵文化財調査室助教）

調査補助 河野菜月、内田紗希、友藤 祐（徳島大学総合科学部学部生）

調査協力 東 玉子（土地所有者）、城 明弘、米沢忠之、平野義正

調査指導 勝浦康守（徳島市教育委員会）、近藤 玲（徳島県埋蔵文化財センター）、高島芳弘（徳島県立博物館・徳島県立鳥居龍蔵記念博物館）、早淵隆人・西本和哉（徳島県教育委員会）、湯浅利彦（徳島県立小松島高等学校）

調査担当 中村 豊（徳島大学大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部准教授）

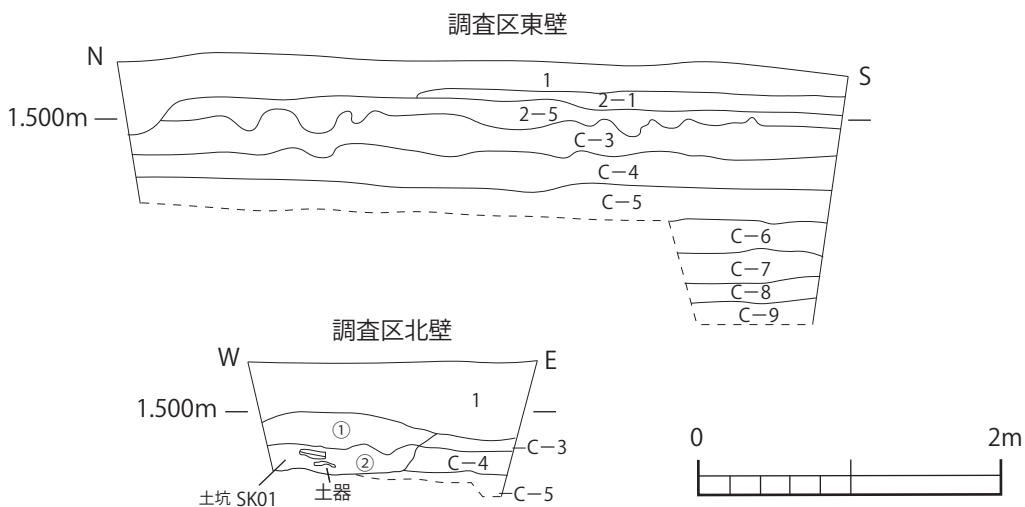
(2) C地区の調査

C地区は、浄水場北側の耕作放棄地北東部分に設定した（第2図、写真7～10）。現地表は同じく

1.8 mほどである。調査面積は 10 m²である。B 地区の調査において、開析谷の東岸付近を検出することができた。微高地はさらに東側の民家近くに位置する可能性が高くなった。耕作放棄地内の、東側民家から 2 mは国所有の里道に相当することから、境界塀から 2 m離れたところに調査区を設定することとした。付近を南東～北東にかけて踏査すると、北東部分から凸帯文土器や遠賀川式土器らしき小破片がみられたため、C 地区を設定した。

基本層序

第 1 層は水田耕作土である。20cm ほどの厚さを持つ。下半部分から近世の陶磁器が出土することがある。直下に第 2-1 層の堆積がみられる。約 1.6 mにみられる第 2-5 層は灰黄褐色シルト質極細砂層である。縄文時代晩期末から古代までの土器を含む。B 地区第 4 層相当を起源とし、縄文時代晩期末から古墳時代・古代にいたるまで旧地表として機能し続けた土壌化層と考えられる。B 地区第 4 層は標高約 1 mにみられることから、開析谷肩付近より約 60cm 高い微高地として縄文時代晩期末にはすでに生活域として機能していた可能が高い。この起伏を弥生時代前期末・中期初頭の洪水砂（第 3-1・2 層）が埋めたと考えられるのである。C-3 層は褐色シルト層である。標高約 1.5 ～ 1.3 mに



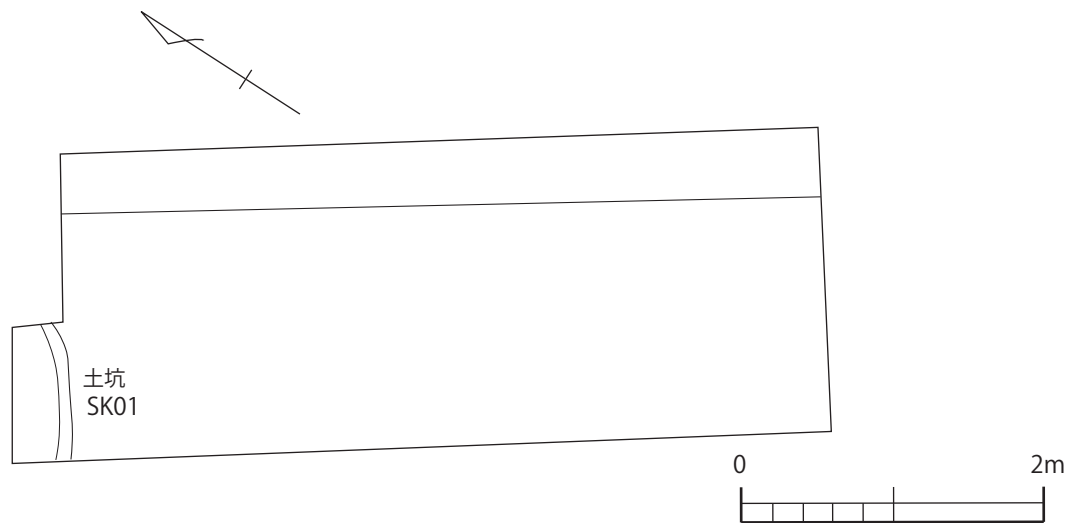
C 地区基本土層

- 1 水田耕作土（下半部に近世陶磁器がみられる）
- 2-1 2.5Y4/1 黄灰色粘土、炭化物を多く含む。（縄文晩期末～中世を含む攪拌層、平安・鎌倉期にかけて整地層・耕作土層として機能）
- 2-5 10YR4/2 灰黄褐色シルト質極細砂。（B 地区第 4 層相当を起源とし、縄文晩期末・弥生前期初頭～古墳時代・古代頃まで旧地表として機能した土壌化層）
- C-3 10YR4/4 褐色シルト。炭化物を含む。鉄分の沈着が極めて著しい。（縄文晩期末・弥生前期初頭の遺物を含む。この頃までの自然堆積層を起源とする）
- C-4 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト質極細砂。炭化物・鉄分を含む。（縄文晩期末・弥生前期初頭の遺物を含む。この頃までの自然堆積層を起源とする。C-3 層との相違は、鉄分の多少にすぎない可能性もある）
- C-5 5Y4/3 暗オリーブ色粘質シルト。鉄分を含む。無遺物。
- C-6 2.5Y4/1 茶褐色粘土炭化物・鉄分含む。有機物を多く含む。（縄文晩期末・弥生前期初頭よりも古い黒色土層）
- C-7 5Y5/2 灰オリーブ色粘土。自然堆積層。
- C-8 5Y5/3 灰オリーブ色細砂混じりシルト。鉄分沈着。自然堆積層。
- C-9 2.5Y3/1 黒褐色粘土。有機物を多く含む。（C-6 層以前の黒色土層）

土坑 SK01

- SK01① 7.5Y4/4 褐色シルト。炭化物・鉄分を多く含む。土器が多量に出土。
- SK01② 5Y4/1 灰色細砂。小礫、炭化物を含む。

第 13 図 C地区東壁・北壁土層断面図 (1/50)



第 14 図 C地区平面図 (1/50)

みられる。炭化物を含み、鉄分の沈着が極めて著しい。縄文時代晩期末以前に堆積した微高地形成層を起源とする。縄文時代晩期末・弥生時代前期初頭に利用され、当該期の土器・石器などの遺物を多量に含む。C-4層は暗灰黄色シルト質極細砂層で、炭化物・鉄分を含む。標高約1.3～1.1mである。縄文時代晩期末・弥生時代前期初頭の遺物を含む。縄文時代晩期末以前に堆積した微高地形成層を起源とする。縄文時代晩期末・弥生時代前期初頭に利用され、当該期の土器・石器などの遺物を多量に含む。なお、A・B地区にみられる同様な洪水砂起源層として、3-1・2層をあげることができる。C-3・4層はこれらと比較して、より硬く締まっており、土壌の粒子も若干粗いものを含んでいる。C-5層は暗オリーブ色粘質シルト層である。標高約1.1～0.8mである。この層以下無遺物層となる。C-6層は茶褐色粘土層であり、炭化物・鉄分・有機物を多く含んでいる。縄文時代晩期末より古い黒色土層である。標高約0.8～0.6mに堆積する。C-7層は灰オリーブ色粘土層である。標高約0.6～0.4mに堆積する。C-8層は灰オリーブ色細砂混じりシルト層。標高約0.4～0.3mに堆積する。C-9層は黒色粘土層。C-6層以前の古い黒色土層である。標高約0.3～0mに堆積する。なお、C-6・9層の土壌サンプルを採取している（第13図、写真8）。

遺構・遺物

C-3層上面より弥生時代前期初頭の土坑SK01を検出した（第14図、写真9・10）。C地区北端部に相当する。壺の胴部下半～底部にかけての大型破片がみられた。

C-3・4層からは、ほかにも縄文時代晩期末・弥生時代前期初頭の土器が出土している。また、石棒製作時に生じたとおぼしき結晶片岩の剥片や、風化面を顕著に残す中型のサヌカイト剥片など注目すべき遺物がみられるが、詳細は2016年2・3月に予定する第3次調査と合わせて報告したい。

ま と め

三谷遺跡は、1924・25年および1990・91年の調査によって、縄文／弥生移行期の貴重な成果がえられてきた。これらは、いずれも微高地縁辺部の開析谷に形成された廃棄空間や祭祀空間であった。今回の調査では、旧地形を復原して微高地の位置をあきらかにするとともに、微高地上に乗ると考えられる生活域や生産域の一部を調査し、当該期の歴史像復原に寄与することを目的としてきた。

1924・25年の調査では、開析谷が北西から南東へと向かうその西岸肩付近を調査した。一方の1990・91年の調査では、開析谷が北西から南東へ向かった後、大きく屈曲して北東方向へ向かう様相をみる事ができた。これらは、ともに貝塚がみられるとともに、多量の土器・石器などが廃棄されていることから、1924・25年調査区の西側と1990・91年調査区の北側とに微高地が存在し、当該期の生活域・生産域が残されていることが予想された。事情あって西側の調査は2016年2・3月に予定する徳大第3次調査に委ねることとし、北側の地形復原と微高地の位置確定、生活域の調査を第一の目的とした。

第1次調査のA地区は、開析谷の中心部に位置したと考えられる。調査区中央に近世の溜井状遺構を検出し、近世においても低湿であったことを示している。また、表土下均質な細砂層が厚く堆積し、湧水も顕著にみられた。

同B地区は、開析谷の東岸付近を検出したとみられる。大規模な谷状の落ち込み（開析谷SX01）の肩部分を検出した。落ち込み内には黒褐色の粘土層が堆積し、弥生時代中期後葉・後期の土器がみられた。開析谷の大半は弥生時代前期末には埋積したと考えられるが、一部小規模な流路や凹地として残され、周辺から遺物の廃棄を受けていたものと考えられる。弥生時代中期末・後期には、ほぼ埋没を終えたと考えられるが、低湿地として起伏は残されていたものと考えられる。すなわち、古代にかけての遺物を多量に含み、平安・鎌倉期の遺物を若干残した整地層・耕作層が開析谷上面に厚く堆積していることを確認できた。

第2次調査のC地区では、縄文時代晩期末・弥生時代前期初頭の微高地、すなわち集落域の一角を検出したと考えられる。当該期の遺構が、標高約1.5m（現地表下約30cm）の高所において確認できた。遺物を包含する土層の硬度は硬く、粒子も他所より粗粒のものを含んでいる。中洲状の微高地として生活域を提供していたものと推察される。生活域や生産域が付近に展開していることが考えられるため、周辺を拡張し調査を継続する予定である。なお、第3次調査では、開析谷西岸側の微高地調査も予定している。この両微高地の土地利用をあきらかにすることによって、三谷遺跡の集落像解明に近づきたいと考える。

三谷遺跡は、石棒の出土数がこれまでに24点を数え、今回の調査でも、すでに6点が出土している。結晶片岩の原産地である眉山の麓に位置し、未製品もみられ、同時代の島根県～滋賀県にいたるまで分布しているところからみても、三谷遺跡の生活域において石棒製作跡を確認できる可能性がある。また、イネ・アワ・キビ・アズキがみられる以上、集落近辺で生産されていた可能性が高いので、生産域の追求も大きな課題である^{註6)}。

石棒祭祀とイネ・アワ・キビ・アズキの生産が共存するあり方は、弥生時代への移行を考える上で、極めて興味深い事実であると考えられる。

今回の調査によって、三谷遺跡周辺の縄文時代晩期末～弥生時代前期初頭の地形環境と集落景観を推定復原することが可能となった。西日本における沖積平野の縄文時代晩期の集落景観は十分に解明されているとはいいがたいので、当該期の地域社会復原に十分寄与できたと考えられる。また、この直後に平野を大規模に開発し、灌漑水田稲作経営を軸とする集落景観へと移行する過程、その背景となる地形環境史をふくめ、縄文／弥生移行期の歴史像を復原するのに貢献していきたいと思う。

註

1. 以下、開析谷とする。
2. 以下、本来一体の遺跡であったと考えられる、庄遺跡、蔵本遺跡、南蔵本遺跡を「庄・蔵本遺跡」と呼称する。
3. 旧陸軍歩兵第43連隊練兵場、現徳島大学蔵本地区西端から徳島市立加茂名中学校にかけての一带。
4. 報告の内容は、「民族問題」と「丸木舟」が中心ではある。しかしながら、鳥居龍蔵・小松真一の指導には、的確な層位の説明すなわち、貝塚や「アイヌ派堅穴」(4層上面)の上層から「固有日本人の堅穴」(3層上面)が検出される点のほか、開析谷肩部の復原など重要な所見が含まれていることを看過すべきではない。
5. この溜池は、30～40年ほど前に埋められて、現在は駐車場になっている。1947年撮影の米軍空中写真ではこれを確認できる。小規模ではあるが、大正年間の徳島市水道局建設前にはもう少し大きかった可能性もある。
6. イネとアワ・キビ・アズキの生産域について、前者は低湿地での天水田や眉山の小溪流を利用した小規模灌漑水田などが想定でき、後者は微高地縁辺部での畠作が想定できよう。畦畔の構築や畝立ての痕跡がなければその特定は容易ではないが、生産域、とくに畠跡の調査技術確立は、弥生・古墳時代以降も含めて今後の重要な課題であるといえる。

文献

- 阿子島功 1972 「Honeycomb Structure と海水準」『徳島大学学芸紀要 (社会科学)』第21巻 9-21頁
- 阿子島功・黒田晃司 1978 「低地の微地形と海水準変動 (3) - 徳島平野南縁、鮎喰川下流沿岸低地の微地形面の編年資料」『徳島大学学芸紀要 (社会科学)』第27巻 1-23頁
- 岡山真知子 1999 『庄遺跡Ⅲ』徳島県埋蔵文化財センター調査報告書第24集
- 小川国太郎・森 敬介 1960 「第2章名東郡の歴史 1 先史時代」『名東郡史』名東郡自治協会 16-35頁
- 勝浦康守 1990 『名東遺跡発掘調査概要』名東遺跡発掘調査委員会
- 勝浦康守編 1997 『三谷遺跡』徳島市埋蔵文化財発掘調査委員会
- 勝浦康守 1999 「南蔵本遺跡 (住宅開発工事)」『徳島市埋蔵文化財発掘調査概要』9 徳島市教育委員

会 1-25 頁

川添和暁 2012 「三谷遺跡出土骨角器について」『青藍』第 9 号 考古フォーラム蔵本 10-24 頁

近藤 玲編 2014 『南蔵本遺跡』徳島県埋蔵文化財センター調査報告書第 84 集

瀧山雄一 1988 『南庄遺跡現地説明会資料Ⅱ』徳島市教育委員会

瀧山雄一 1989 『南庄遺跡』徳島市教育委員会

中尾賢一 1997 「縄文海進と徳島平野の発達」『吉野川の自然』徳島県立博物館 9 頁

中沢道彦・中村 豊・遠部 慎 2012 「レプリカ法による徳島県三谷遺跡出土土器の種実圧痕の研究」
『青藍』第 9 号 考古フォーラム蔵本 25-37 頁

中村 豊編 2005 『庄（庄・蔵本）遺跡-徳島大学蔵本団地体育館建設に伴う発掘調査報告書』徳島県
教育委員会・徳島大学埋蔵文化財調査室

中村 豊 2010 「庄・蔵本遺跡・西病棟新営その他電気設備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査」『年報』
2 徳島大学埋蔵文化財調査室 11-21 頁

福家清司 1984 「庄遺跡出土の墨書土器銘「賀専当」について」『高校地歴』20 徳島県高等学校教育
研究会地歴学会 16-28 頁

古田 昇 1996 「徳島県鮎喰川・吉野川下流域平野の沖積層の形成過程」『立命館地理学』第 8 号 61
-72 頁

古田 昇 1999 「徳島県鮎喰川下流域における扇状地の形成過程について」『徳島地理学会論文集』第
3 集 41-48 頁

北條芳隆編 1998 『庄・蔵本遺跡 1』徳島大学埋蔵文化財調査報告書第 1 巻

前川直江 1997 『庄遺跡Ⅱ』徳島県埋蔵文化財センター調査報告書第 21 集

森 敬介 1926a 「徳島市水道三谷瀘過池に於ける原始独木舟発見の顛末上」『歴史と地理』第 18 巻第
1 号 73-79 頁

森 敬介 1926b 「徳島市水道三谷瀘過池に於ける原始独木舟発見の顛末下」『歴史と地理』第 18 巻第
5 号 63-72 頁

森 敬介 1930 「阿波国発見弥生式土器紋様と銅鐸紋様との関係に就て」『考古学』第 1 巻第 5・6 号
33-36 頁

森本浩史・湯浅文則 1996 『庄遺跡Ⅰ』徳島県埋蔵文化財センター調査報告書第 16 集



写真1 三谷遺跡 北より



写真2 作業風景 東より



写真3 A地区 北東より

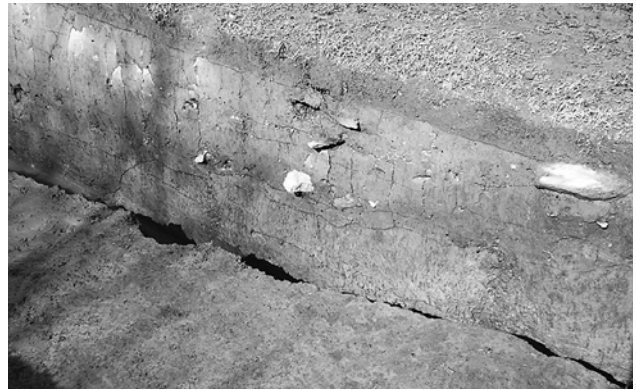


写真4 B地区層序 南東より



写真5 B地区SX01 掘削風景 南より



写真6 B地区SX01 遺物出土状況 西より



写真7 C地区作業風景 北東より



写真8 C地区層序 西より



写真9 C地区SK01 南東より



写真10 C地区SK01 遺物出土状況 北より

考古学における気候変動論の検討

－日本列島・朝鮮半島の水稲農耕開始前後を対象として－

端野 晋平*

*徳島大学埋蔵文化財調査室

はじめに

日本列島（以下、列島と略する）の縄文時代晩期後葉に導入される水稲農耕は、海を挟んで近接する朝鮮半島（以下、半島と略する）から伝わったものとみて間違いない。近年、日本考古学界では、こうした農耕伝播の要因やメカニズムを考えるための一要素として、気候変動が注目されている。筆者も、気候変動と考古学的事象との関係のみを、農耕伝播のメカニズムを明らかにしようとしている一人であり、これまで何度かにわたって、論じたことがある（端野 2008, 2009, 2010a, 2014a, 2014b ; Hashino 2010, 2011）。ところが、紙幅の都合などから他の研究者による見解との差異については十分に論じられず、またその後の検討によって、水稲農耕伝播のメカニズムに関する年代観および要因については、変更点も生じるようになった。そこで本稿では、炭素 14 年代の較正曲線から気候変動とその年代を検討し、その結果をふまえ、水稲農耕伝播のメカニズムに関して、改めて予察する。さらに近年、他の考古学研究者から提出された縄文・弥生移行期の気候変動論を検討する。

1. 較正曲線にみる水稲農耕開始前後の気候変動

現在のところ、炭素 14 年代の較正曲線が、過去の気候変動と暦年代の関係を明らかにするのに最適なものである。従来から地球科学では、較正曲線が表わす過去の大気中の ^{14}C の増減によって、地球規模での気候変動を推定できることが知られている。 ^{14}C は、地球外から降り注ぐ宇宙線によって生成される炭素同位体元素であり、 ^{14}C 量が多いほど宇宙線照射量が多かったことが明らかとなっている。そして、宇宙線が大気中に多く入ってくると雲が増えることもわかっている。すると、気候の寒冷化は、宇宙線量の増加→雲の増加→太陽熱量の低下→気温の低下という流れで、説明が可能である（丸山 2008）。こうしたことをふまえると、較正曲線において、急に上がったたり平坦になったりしている部分は ^{14}C が増加傾向にある時期＝寒冷期、いっぽう下がる部分は ^{14}C が減少傾向にある時期＝温暖期というように評価できる。

また考古学の立場からは、縄文晩期中葉（黒川式期）と晩期後葉（夜臼式期）の間において、列島西部の沿岸で、寒冷化に伴う海水準低下により風成砂丘が形成されたことが指摘されている（甲元 2008）。上記の較正曲線から推定される寒冷期と、風成砂丘の形成期（寒冷期）とを結びつけた田中良之は、縄文晩期後葉の開始年代は紀元前 700 年より古くはなりえず、夜臼Ⅱ式期～板付Ⅰ式期は紀元前 560 年よりも後、弥生前期末は紀元前 260 年以降と考えた。そして、これらの年代観が人骨の炭

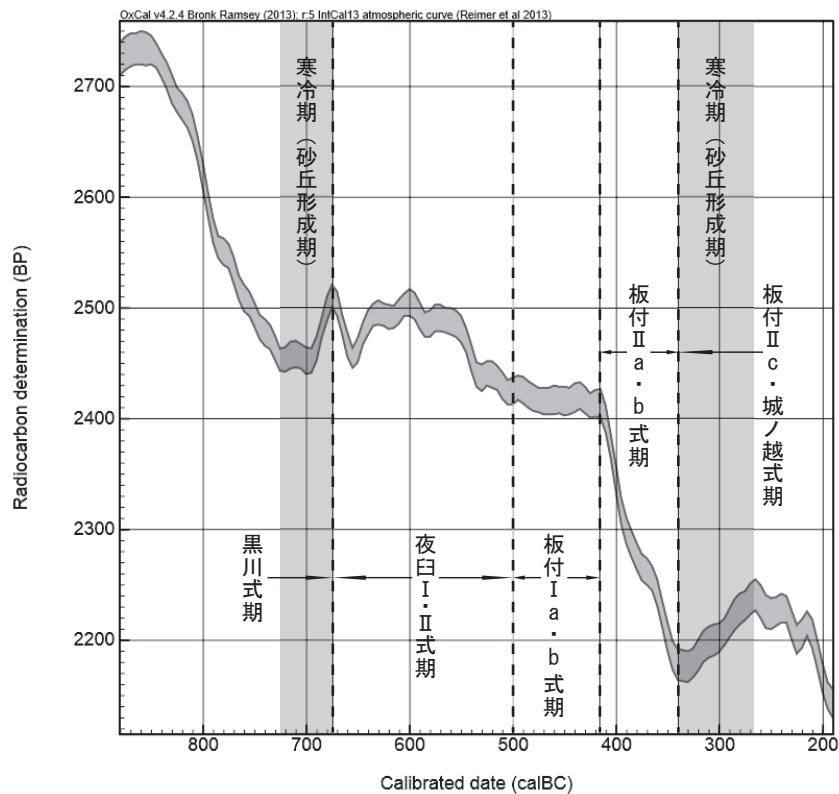


図1 較正曲線 IntCal13 からみた寒冷期とその時期

板付 I a・b 式期と板付 II c・城ノ越式期の較正年代上の位置づけは田中 (2011) の人骨年代を参照した。板付 I a・b 式期も較正曲線の形状からみて、寒冷期の可能性がある。グラフは OxCal4.2.4 より作成。

素 14 年代 (海洋リザーバー効果補正) とも整合するとした (田中 2011)。

さて、以前に筆者は、こうした田中の見解と東北アジアの青銅器からみた岩永省三 (2011) の年代観から示唆を得つつ、較正曲線から推定される寒冷期と砂丘形成期の関係を検討し、黒川式期と夜白 I 式期の実年代についても言及したことがある (端野 2014a, 2014b) ^{註1)}。ここで再び、較正曲線をもう少し細かくみて、考古学的時期と気候変動、較正年代の関係を検討しよう。図 1 は、炭素 14 年代 2500 年 BC を前後する時期の較正曲線 IntCal13 (Reimer et al. 2013) を拡大したグラフである。黒川式期と夜白 I 式期の間の砂丘形成期は、このグラフで示された較正曲線のどこに当たるのだろうか。

無文土器前期・中期炭素 14 年代の較正年代の境界は 800calBC にあることから (端野 2010b)、無文土器中期の始まりよりやや新しい夜白 I 式期の始まりは 800calBC 以降になる。そして、夜白式期のシカ年代および海洋リザーバー効果を補正した人骨年代もまた 800calBC 以降であり (田中ほか 2004 ; 田中 2011)、東北アジアの青銅器に対する検討によって、夜白 I 式期の始まりは紀元前 8 世紀より確実に下るという主張 (岩永 2011) もある。こうしたことをふまえ、800calBC 以降の較正曲線に砂丘形成期 (寒冷期) に相当する部分を探し求めると、730calBC ~ 670calBC の範囲に横ばいから急激に上昇する部分が、これに相当すると考えられる。

それでは、この寒冷期の考古学的時期は、より正確にはいつになるであろうか。730calBC ~ 670calBC に横ばいから急上昇した較正曲線は 670calBC 以降、急激に下降する。この較正曲線の下降

期は、気候が温暖化するとともに砂丘が安定したことを示す。この砂丘安定期に形成された遺跡のうちで最も古くさかのぼるものは、福岡県新町遺跡（志摩町教委 1987）である。この遺跡では、支石墓などからなる墓地が、夜臼 I 式期から砂丘上に形成され始めたとみなせる。したがって、夜臼 I 式期には砂丘安定期に入っていたと考えられる。

筆者は、半島・列島における花粉分析や海水準変動、湖沼年縞堆積物の分析といった気候変動データを比較することによって、その中から両地域を横断する確度の高い気候現象を検討した（端野 2014b）。その結果、確認できた確度の高い寒冷期のうち、紀元前 1000 年～紀元 200 年の寒冷期、さらにその中でも列島のデータで確認できた紀元前 1000 年～400 年ごろの寒冷期が、この黒川式期の寒冷期に対応するものと考えられる。

2. 渡来の二段階と「情報伝達網」の形成と機能

ここでは予め、当該地域の水稲農耕伝播に伴う段階性と、伝播のメカニズムを説明する上で鍵概念となる「情報伝達網」について明らかにしたい。

まず、水稲農耕伝播に伴う段階性を論じる。これまでの研究成果をふまえ、半島・列島間の時期区分の併行関係（武末 2004）をも加味しつつ、列島における半島系文化要素の出現率にもとづくと、以下の二つの段階を設定することができる。

渡来第 1 段階：水稲農耕は試行的で一般化しなかったものの、孔列土器（田中 1986；片岡 1999）、赤色塗彩浅鉢（田中 1986）、土器の色調（橋口 1988；松本 1996）、貫川遺跡の石庖丁（前田・武末 1994）などが半島南部との交流と渡来人の存在を暗示する無文土器前期／縄文晩期中葉（黒川式期）。

渡来第 2 段階：水田をはじめ、農耕具、各種の工具、磨製石鏃・石剣、壺形土器、松菊里型住居、支石墓などの様々な文化要素が体系的に出現し、水稲農耕が本格化する無文土器中期／縄文晩期後葉（夜臼式期）。

つづいて、「情報伝達網」という概念を定義づけ、それが当該期・地域において、いかにして存在し、機能していたのかを論じる。ここでの「情報伝達網」の定義づけに必要な概念として、コミュニケーションがある。コミュニケーションを、発信者がもつ概念（意味）が何らかの規則体系（コード）に従って感覚的に捉えられるメッセージとなり、それがなんらかの手段（回路）を通じて受信者に受け渡されてメッセージが解読され、さらにフィードバックされていくプロセス（伊藤 1994）とごく一般的な意味で理解すれば、「情報伝達網」は、次のように定義される。すなわち、「情報伝達網」とは、交易・婚姻・移住などの様々な手段を媒介とする一定のコミュニケーションが保証された人間関係を基盤とする情報の受け渡し回路の集合体と（端野 2014a）。

さて、以上の定義にしたがえば、当該期・地域においては、考古学的な諸事象からみて、位相の異なる二者の「情報伝達網」が存在するといえる。すなわち、半島・列島それぞれに形成された「密な情報伝達網」と、半島・列島間を横断する「粗な情報伝達網」の二者である。「密な情報伝達網」は、半島でいえば可楽洞式土器・駅三洞式土器・欣岩里式土器が表わす前期無文土器文化圏、松菊里型住居・

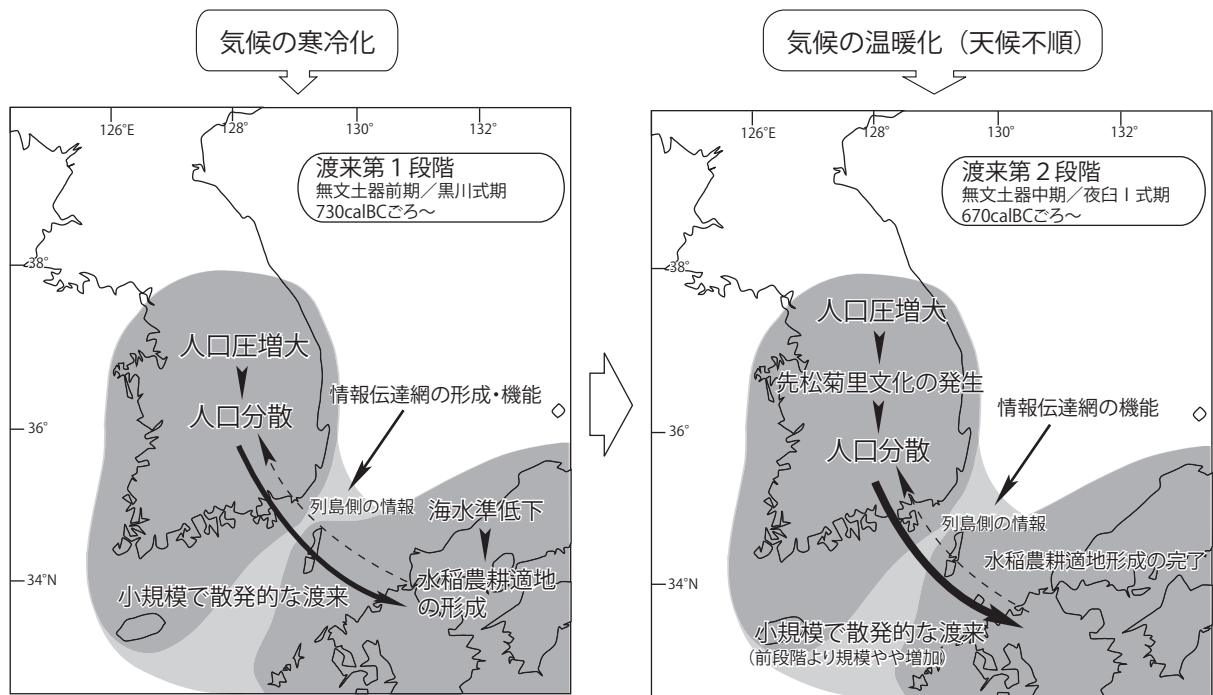


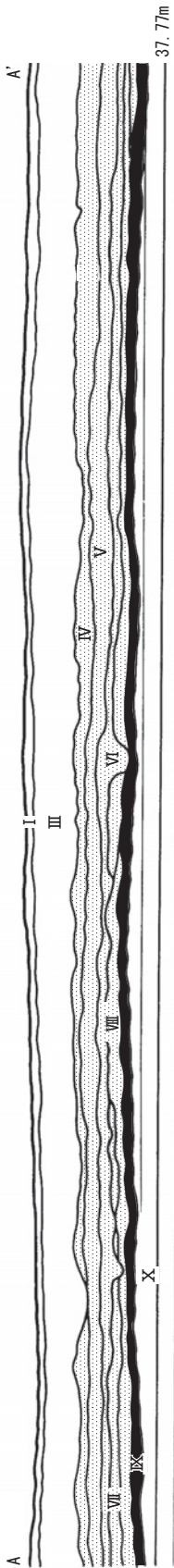
図2 渡来各段階におけるメカニズム

松菊里式土器・三角形石庖丁が表わす松菊里文化圏、列島でいえば黒川式土器、山ノ寺・夜臼式土器などが表わす土器分布圏の背後に横たわっているものである。いっぽう「粗な情報伝達網」は、土器に施された孔列、赤色塗彩などの部分的な要素の広がり、あるいは貫川遺跡の石庖丁、網谷里遺跡の突帯文系土器（慶南発展研究院歴史文化센터 2009）といった普遍的ではなく単発的な外来要素の存在が表わす、相異なる「密な情報伝達網」を横断する範囲に横たわっているものである。先述の渡来二段階の設定をふまえると、渡来第2段階での、半島南部の各地、さらに半島南部から九州北部への水稲農耕とそれに伴う物質文化の伝播は、渡来第1段階に形成・機能していた、位相の異なる二つの「情報伝達網」を介して行われたものと考えられるのである。次章では、こうした「情報伝達網」に着目しつつ、半島から列島への水稲農耕伝播のメカニズムを予察したい。

3. 水稲農耕伝播のメカニズム（予察）

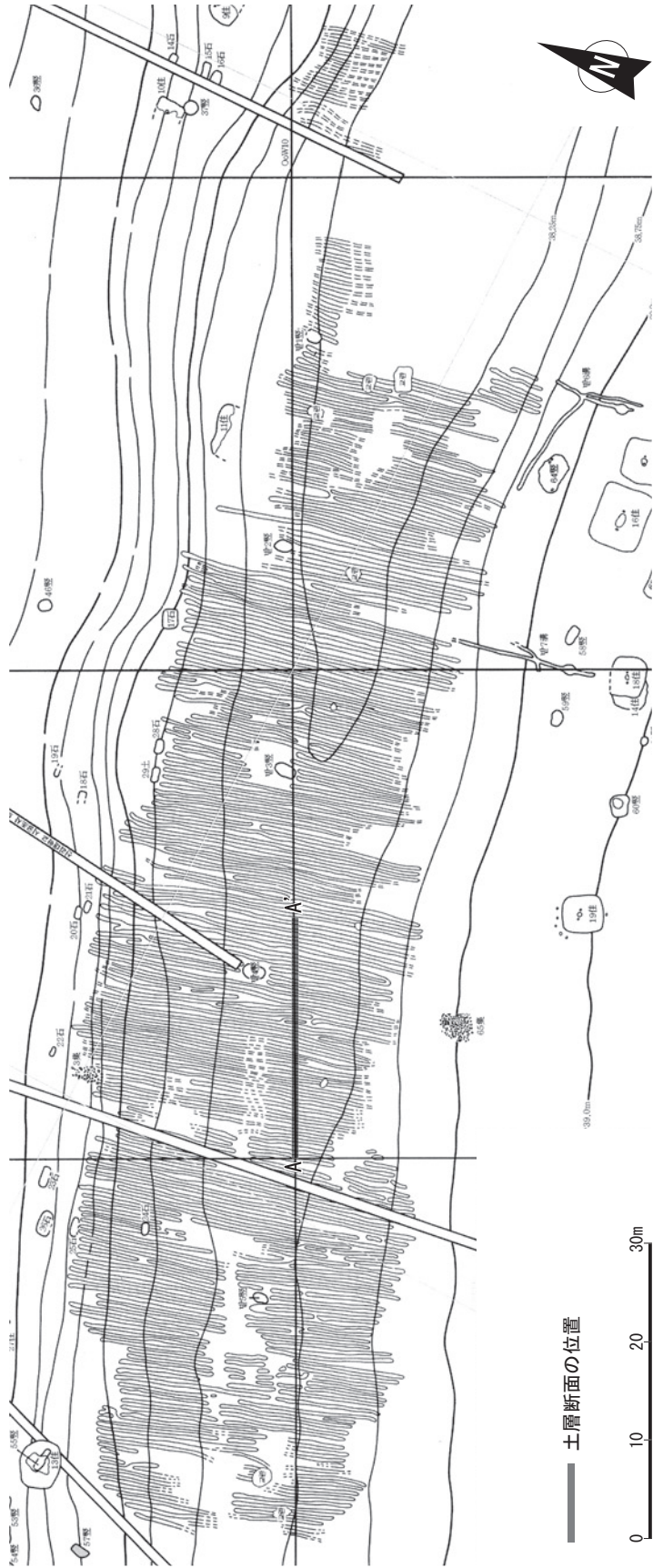
前章までの議論をふまえると、渡来第1段階の開始は730calBCから始まる寒冷化、渡来第2段階の開始は670calBC以降の温暖化のそれぞれと時を同じくすると考えられる。なお、ここでの較正曲線から導かれる年代をそのまま実年代とみるには慎重を要する。宇宙線量の増減と気候変化の間にはタイムラグがあることを考慮すると、実年代は較正年代より確実に新しくなるからである。ただ、筆者にはそれがどの程度新しくなるのか分からない。そのため、以下、年代については、較正年代そのものの意味で、○○calBCと表記する。

以上の年代観をふまえ、水稲農耕伝播のメカニズムについて、予察したい（図2）。渡来第1段階の始まりは、730calBCからの寒冷期の開始と時を同じくする。そして、この気候の悪化は、畑作を



- 洪水氾濫による堆積土
- 無文土器時代の畠の耕作土
- I 砂質性の強い粘質土 表土および最近の耕作土
- II 明黄褐色 (10YR6/6) 砂質土 他の層にくらべ粗い砂
- III 暗褐色 (10YR3/4) 砂質土 無文土器片極少量含む
- IV 黒褐色 (10YR2/3) 砂質粘土 無文土器片含む
- V 暗褐色 (10YR3/4) 砂質土 無文土器片極少量含む
- VI 褐色 (10YR4/6) 砂質粘土 無文土器片極少量含む
- VII 黄褐色 (10YR5/6) 砂質土 無文土器片極少量含む
- VIII 黒褐色 (10YR3/2) 砂質粘土
- IX 黒褐色 (10YR3/1) 砂質粘土 + 橙色 (7.5YR7/6) 砂質粘土
- X 無文土器時代の文化層

0 5m



土層断面の位置

0 10 20 30m

図3 大坪里遺跡玉房2地区の畑跡 (慶尚大学校博物館 1999 をもとに筆者作成)

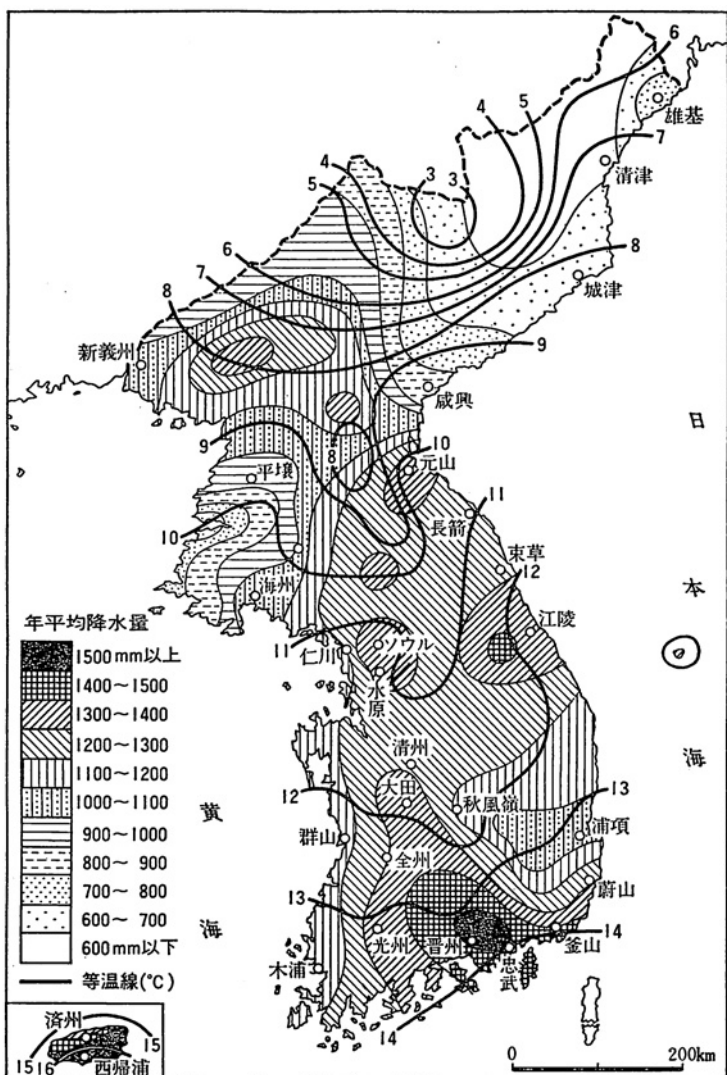


図4 朝鮮半島における年平均降水量の分布
南江流域・洛東江下流域付近に位置する晋州・忠武・釜山で、特に降水量が多いことに注意（朝鮮史研究会 1986 より引用）。

主たる生業としていた前期無文土器社会に農業生産力の低下をもたらす。気候の悪化にともない、一つの集落に居住する人口を支えるために十分な生産力を確保できなくなると、その解決策の一つとして、人口の分散が行われる。この人口の分散は、無文土器人が農耕にとってより好条件を求め、列島にまで及ぶことになる。その結果として、半島・列島間を横断する「粗な情報伝達網」が形成される。同時に列島各地では、海水準の低下により、後に水稲農耕適地となる沖積低地や後背湿地が形成される。

続いて、渡来第2段階は670calBCごろから始まるが、この段階には気候は温暖化し、これに伴い洪水リスクが高まる。洪水による農作物の被害や農地の喪失が渡来の要因となる。慶尚南道大坪里玉房2地区などでは、無文土器時代中期前半に属する畑地が洪水砂によって埋没している（慶尚大学校博物館 1999）（図3）。あくまで参考ではあるが、筆者（端野 2014a）が渡来人の故地と推定している南江流域・洛東

江下流域は現在、半島の中でも降水量がとくに多い地域であり、過去にも洪水リスクが高く、温暖化によってそれがより高まった可能性がある（図4）。こうした自然災害を要因とする生産力の低下は、集落内における人口圧の増大を招く。これに対して、無文土器社会は、より積極的に人口の拡散によって解決を図ろうとする。同時に、温暖化に伴う湿潤環境への変化が、半島南部においても水稲農耕に適した湿地を形成し、これを利用した農耕を軸とする生業システムへの転換を社会に招く。結果として、前期無文土器文化システムから中期無文土器文化システム（先松菊里文化システム）へと移行を導いたのではないか。（先）松菊里文化の指標とされる松菊里型住居は、居住規模の小ささや柱構造の脆弱性からみて、前段階の長方形住居とくらべ、人間集団がより遊動性を志向しはじめたことを暗示している。また、リバーシブルを可能にした三角形交差刃石庖丁は、人口圧の増大を解消するために、生産効率を高める道具として考案されたものととらえられる。こうした文化変化は、環境変化に対する適応の結果とみなせ、変化は生業システムにとどまらず、それを包括する文化システムにまで

及んだと理解される。半島の中西部地域でまず出現した先松菊里文化は、前段階から存在し機能していた「密な情報伝達網」によって、半島の各地へと広がる。その広がりには「密な情報伝達網」の範囲を越え、海を隔てた列島まで及ぶ。このとき機能したのが前段階に形成された「粗な情報伝達網」である。

この段階における半島→列島の渡来や交流は、前段階に比べて、やや活発化する。これは、「粗な情報伝達網」を通じて、列島側に存在する水稻農耕に好ましい自然条件や人・社会などに関する情報が、この段階以前の無文土器社会にすでに蓄積されていたことを背景にすると考えられる。そして、こうした情報伝達網の存在を可能にしたのは、前段階に列島に移住した渡来人やその子孫、あるいは彼らと近い関係にある列島在来人と無文土器人との間に確立していた人間関係のネットワークであっただろう。このネットワークを通じて、かねてから水稻農耕に適した風土があると知られ、かつ自らを受け入れてくれる人や社会が列島側に存在するという確信があったからこそ、渡来第2段階は第1段階にくらべ、半島→列島の渡来や交流が活発になったと考えられる。

4. 近年の縄文・弥生移行期気候変動論との対比

これまでも考古学研究者によって、縄文時代から弥生時代への移行を、気候変動と結びつけて説明する学説がいくつか提出されてきた。そうした中でも、宮本一夫は、特に寒冷期の実年代、それと考古学的時期の関係、農耕伝播のメカニズムまで具体的に踏み込んだ論を展開している（宮本 2005, 2009, 2011b, 2013）。ここでは、これらの見解の内容をまず確認し、筆者が示した見解との違いと問題を明らかにしたい。なお、宮本以外の学説については、別の機会にまとめて議論したい。

まず、これらの内容を確認しよう。宮本（2005）は、縄文晩期後葉（夜臼式期）における水稻農耕の導入の要因に、水月湖の年縞堆積物分析の結果（福澤 1995）で示された紀元前 800 年の寒冷期をあげた。そして、気候の寒冷化（悪化）による人口圧の高まりが農耕民の移住を促し、結果として農耕が半島から列島へ伝わったとみた。宮本（2009）でもほぼ同様の論を展開したが、寒冷期および縄文晩期後葉（弥生早期）の暦年代については、東北アジアの青銅器の相対関係から導いたとする紀元前 8 世紀という年代観（宮本 2008）に改めた。その後、宮本（2011b）は、今村・藤尾（2009）が炭素 14 生成率で示した三つの寒冷期のうち、紀元前 850 ～ 700 年ごろの寒冷期を、最も炭素 14 生成率が高く、その期間も比較的長いことから社会経済に最も影響を与えた段階として捉え、これを遺跡数の減少期、風成砂丘の形成時期（甲元 2005；田崎 2008）に対応させた。同時に、この寒冷期を「黒川式新段階や江辻遺跡第 4 地点 SX-1 段階に相当し、弥生時代開始期すなわち夜臼 I 式に先行する段階の寒冷期」と捉え、これは弥生開始期の実年代が紀元前 8 世紀という年代観（宮本 2008）とも合致するとした。さらに、紀元前 900 年ごろの寒冷期は黒川式段階に相当し、これに関連して貫川遺跡の石庖丁の存在からうかがえるような渡来人の流入が開始されるとした。筆者が炭素 14 年代の較正曲線を用いて気候変動と暦年代、考古学的時期の関係を論じたのに続いて（Hashino 2010；端野 2012）、宮本もこれを受けてか、較正曲線を用いて再論した（宮本 2013）。宮本は較正曲線の形状から、紀元前 850 ～ 720 年ごろ、紀元前 680 ～ 660 年ごろ、紀元前 420 ～ 340 年ごろの三つの寒冷期を読み

とり、今村・藤尾（2009）をふまえ、このうちの紀元前 850 ～ 720 年ごろが最も寒冷な時期であったとみなした。そして、この時期に水稲農耕の適地である後背湿地が形成されたと考えた。

さて、以上のような過程を経て形成された宮本説は、本稿で示したモデルとは、考古学的時期に付与した年代、寒冷期の年代、農耕伝播の原因の点で明らかに異なる。以下、宮本（2011a, 2011b, 2013）を現時点での最終的な見解として、その問題点を指摘しよう^{註2)}。第一に、考古学的時期に付与した暦年代に問題がある。先述の通り、較正曲線から知り得る寒冷期と砂丘形成期との関係、人骨の炭素 14 年代測定結果からみて、弥生時代の開始年代は紀元前 700 年より古くはなりえない（田中 2009, 2011）。また、東北アジア青銅器の実年代観からみて、夜臼 I 式期に併行する半島の無文土器中期前半（休岩里式期）の上限年代は、紀元前 8 世紀より確実に下る（岩永 2011）^{註3)}。したがって、縄文晩期後葉（弥生早期）の開始年代を紀元前 8 世紀とみなす宮本の年代観（宮本 2008）はやはり受け入れがたい。ちなみに、宮本（2011b）は、今村・藤尾（2009）の炭素 14 生成率による紀元前 850 ～ 700 年ごろの寒冷期を「黒川式新段階や江辻遺跡第 4 地点 SX-1 段階」に相当する時期と捉え、夜臼 I 式期の実年代が紀元前 8 世紀という年代観（宮本 2008）とも合致するとしたが、これは正しくない。紀元前 850 ～ 700 年ごろの寒冷期に、夜臼 I 式期より先行する考古学的時期を当てたのだから、夜臼 I 式期の年代は、それよりも新しい紀元前 7 世紀ということとなり、宮本（2008）の年代観とは合致しない。

第二に、寒冷期の把握の仕方に関する問題である。宮本（2011b）は今村・藤尾（2009）による寒冷期の推定、宮本（2013）では炭素 14 年代の較正曲線にもとづいて議論を展開したが、先に検討したように、較正曲線の 850 ～ 700calBC 部分に寒冷期は読み取れない。この部分に相当する時期は、較正曲線が右下がりの形状をなしていることから、大気中の炭素 14 の生成量が少ない時期、すなわち温暖期であったとみなせる。宮本は較正曲線からの気候変動の読み取り方を誤解している。寒冷期が読み取れるのは、較正曲線が平坦あるいは上昇する部分であり、本稿では 730 ～ 670calBC にそれを認めた。

第三に、寒冷期とみなした「黒川式新段階」や「江辻遺跡第 4 地点 SX-1 段階」に、遺跡数が前時期より減少したと捉えたこと（宮本 2011a）に関する疑問である。宮本は、黒川式古・中段階、黒川式新段階（長行段階を含む）、江辻 SX-1 段階、夜臼 I 式という四つの時期に分けて、福岡平野（糸島地域、糟屋地域の一部も含む）の遺跡分布を検討したが、この時期区分は果たして妥当であろうか。というのも、どのように時期を区分するかによって、一つの時期における遺跡数も変わってくるからである。現に、北部九州縄文後・晩期の遺跡分布を検討した宮地聡一郎（2012）は、古閑式新段階と黒川式古段階の間に、遺跡数の有意な減少を認めており、宮本の理解とは異なる結果を提示している。

宮本がここで用いた黒川式古・中・新段階という時期は、水ノ江和同の北部九州縄文晩期土器の編年（水ノ江 1997）に依拠したものである。宮本は、黒川式古段階と中段階とを一つの時期にまとめ、この時期の遺跡数（30）と、黒川式新段階の遺跡数（7）や江辻 SX-1 段階の遺跡数（6）とを比べ、黒川式新段階や江辻 SX-1 段階に遺跡数が減少したものとみなした。しかし、この資料操作に問題がある。宮本が依拠した水ノ江（1997）による黒川式の各時期の主な特徴をまとめると、以下の通りである。

黒川式古段階：浅鉢は A1 類、櫃原式文様が存在。深鉢には文様が存在。

黒川式中段階：浅鉢は A2 類。深鉢の文様が消失。深鉢の口頸部や頸部にリボン状突起が出現。無刻目突帯文深鉢、孔列文土器、組織痕文土器の出現。

黒川式新段階：浅鉢は A3 類。基本的なセット関係は中段階とほとんど変わらない。

以上の編年案は、浅鉢の型式を主軸としつつ、孔列や組織痕の有無、深鉢の文様・無刻目突帯の有無などとのセット関係を加味して、各時期が設定されている。この編年案で、より多くの要素の発生・消滅が同時に起きたとみなせるのは、古段階と中段階の間であり、ここに大きな画期を求めることが可能であろう。しかし宮本は、両者の間に明瞭な画期が認められる、この二つの時期を一つの時期にまとめた上で、遺跡数を検討した。それがいかなる理由によるものなのか、不明である。また宮本は、長行段階や江辻 SX-1 段階といった初期の刻目突帯文期は、福岡平野以西には存在せず、この時期には黒川式土器が依然として存続していたと想定している。そうであれば、黒川式新段階には長行段階の遺跡だけでなく、江辻 SX-1 段階の遺跡をも合わせて、遺跡数を検討すべきである。以上のことは、本来、二つの時期に分けて把握すべき遺跡の数を一つの時期にまとめることで、見かけ上の数字は多くなり、反対に本来、一つの時期で把握すべき遺跡の数を、複数の時期に分けて示すことで、見かけ上の数字が少なくなったのではないかという疑念を抱かせるものである。再検討を要請したい。

おわりに

以上、炭素 14 年代の較正曲線から気候変動とその年代を検討し、半島から列島への水稻農耕伝播のメカニズムについて議論を試みた。そして、その結果と近年、他の考古学研究者から提出された気候変動論とを対比しつつ、その問題点を指摘した。本稿で改めて提出したモデルは、これまで自身や他者が提出したモデルとは異なり、天候不順に伴う自然災害を農耕伝播の要因とみたものである。言うまでもなく、ここであげたモデルはあくまで仮説である。今後、列島に水稻農耕をもたらした渡来人の故地と推定される半島南部の集落を、生態学的観点から検討することによって、検証を重ねていく予定である。

謝辞

本稿は、2012 年 3 月、九州大学大学院比較社会文化学府に提出した博士論文の一部をもとに、その後の研究成果を加えて、まとめ直したものである。博士論文の審査にあたっては、田中良之先生をはじめ、岩永省三・溝口孝司・宮本一夫・武末純一の諸先生から、多くのご指導・ご教示を賜った。博士論文公開審査の席上では、辻田純一郎先生、舟橋京子氏、三阪一徳氏から有益なご教示を賜った。深く感謝申し上げる次第である。

なお、本稿は JSPS 科研費 09J04282、平成 26 年度高梨学術奨励基金若手研究助成による。

註

1. 端野 (2014a, 2014b) では、夜臼 I 式期の開始年代を紀元前 600 ~ 560 年の間にある一時期とみた。

これは田中（2011）と岩永（2011）に従ったことが大きいですが、本稿では以下の理由で、夜臼Ⅰ式期の開始年代を670calBC以降に変更している。

まず、旧稿で夜臼Ⅰ式期開始年代の上限を紀元前600年以降としたのは、岩永（2011）に従ったことによる。岩永は、この時期の実年代推定に深く関わる遼寧式銅剣Ⅰ式（宮本2004）が中国の春秋中期末の紀元前6世紀初頭を下限とするので、それ以降まで夜臼Ⅰ式期が下るとみた。この見解は、宮本がこの銅剣の上限年代である紀元前8世紀までさかのぼらせたことに対する批判としては意義の大きいものである。しかし理論上、最大限まで下らせば、そうなるということであって、実は真の年代がそこまで下がる必然性もまたなく、紀元前6世紀よりさかのぼる可能性は残っている。

また、旧稿で夜臼Ⅰ式期の開始年代の下限を紀元前560年とみたのは、田中（2011）をふまえたことによる。田中は砂丘安定化後の遺跡形成の始まりを夜臼Ⅱ式期とみた。そして、この時期を較正曲線が下降する部分（560calBC以降）にあてた。筆者は、田中とは異なり、砂丘上に墓地が形成される福岡県新町遺跡の開始時期を夜臼Ⅰ式期とみて、砂丘安定期の始まりを夜臼Ⅰ式期の一点と考えた。そして、岩永（2011）をふまえ、夜臼Ⅰ式期の開始年代は紀元前600年から紀元前560年のどこかにあり、夜臼Ⅰ式期の終了年代を紀元前560年以降とみた。しかし、較正曲線が下降する部分は、560calBC以降よりも前の670calBC以降にも存在しており、夜臼Ⅰ式期の開始を必ずしも紀元前6世紀以降とみる必要がないとすれば、670calBC以降の一定期間を砂丘安定期とみなし、かつそこに夜臼Ⅰ式期の一点を求めることは可能であろう。

2. 宮本（2011b）では、宮本（2005, 2009）で夜臼Ⅰ式期の直前期に対応させていた寒冷期の考古学的時期を、「黒川式新段階や江辻遺跡第4地点SX-1段階」という具体的な名称を用いて言い直した。また、それより前の時期にも別の寒冷期をあて、それと考古学的事象との間に関係を求めた。結果として、風成砂丘の形成から知り得る寒冷期と考古学的時期との対応関係、農耕伝播の遠因として単発ではない二度の気候の寒冷化をあげる考え方だけをみれば、筆者がそれまでに示していた見解（端野2010a; Hashino 2010）と変わらなくなった。
3. 宮本（2008）は、岩永（2005）の批判への反論を行ったが、岩永（2011）はそれに対して再反論しており、やはり問題は依然として解決していないことは明らかである。また、田中（2009, 2011）に対しては、今のところ何の意見も表明していない。

文献

（日本語文）五十音順

- 伊藤義之, 1994. コミュニケーション. 石川栄吉・大林太良・蒲生正男・佐々木高明・祖父江孝男（編）, 文化人類学事典. 弘文堂, 東京, pp. 286-287.
- 今村峯雄・藤尾慎一郎, 2009. 炭素14の記録から見た自然環境変動—弥生文化成立期—. 設楽博巳・藤尾慎一郎・松木武彦（編）, 弥生文化誕生. 同姓社, 東京, pp. 47-58.
- 岩永省三, 2005. 弥生時代開始年代再考—青銅器年代論から見る—. 九州大学総合研究博物館研究報告 3, 1-22.

- 岩永省三, 2011. 弥生時代開始年代再考－青銅器年代論から見た－. 高倉洋彰・田中良之 (編), AMS年代と考古学. 学生社, 東京, pp. 39-87.
- 片岡宏二, 1999. 弥生時代渡来人と土器・青銅器. 雄山閣出版, 東京.
- 甲元眞之, 2005. 砂丘の形成と考古学資料. 文学部論叢 86, 55-71.
- 甲元眞之, 2008. 気候変動と考古学. 熊本大学文学部 (編), 文学部論叢歴史学篇. 熊本大学文学部, 熊本, pp. 1-52.
- 志摩町教育委員会, 1987. 新町遺跡 I. 志摩町教育委員会, 志摩.
- 武末純一, 2004. 弥生時代前半期の暦年代. 小田富士雄先生退職記念事業会 (編), 福岡大学考古学論集 (小田富士雄先生退職記念). 小田富士雄先生退職記念事業会, 福岡, pp. 131-156.
- 田崎博之, 2008. 発掘調査データからみた土地環境とその利用－北部九州玄界灘沿岸における検討－. 愛媛大学法文学部考古学研究室 (編), 地域・文化の考古学 (下條信行先生退任記念論文集). 下條信行先生退任記念事業会, 松山, pp. 323-342.
- 田中良之, 1986. 縄文土器と弥生土器 1. 西日本. 金関恕・佐原眞 (編), 弥生文化の研究 3. 雄山閣出版, 東京, pp. 115-125.
- 田中良之, 2009. AMS年代測定法の考古学的利用の諸問題. 平成21年度九州史学会考古学部会
- 田中良之, 2011. AMS年代測定法の考古学への適用に関する諸問題. 高倉洋彰・田中良之 (編), AMS年代と考古学. 学生社, 東京, pp. 131-161.
- 田中良之・溝口孝司・岩永省三・Higham T.D., 2004. 弥生人骨を用いたAMS年代測定 (予察). 嶺南考古学会・九州考古学会 (編), 日・韓交流の考古学. 嶺南考古学会, 釜山, pp. 245-251.
- 朝鮮史研究会, 1986. 入門 朝鮮の歴史. 三省堂, 東京.
- 橋口達也, 1988. 九州における縄文と弥生の境. 季刊考古学 23, 17-22.
- 端野晋平, 2008. 玄界灘沿岸地域における渡来人とその文化－朝鮮半島との比較を通じて－. 考古学ジャーナル 568, 13-18.
- 端野晋平, 2009. 無文土器文化からの影響. 古代文化 61(2), 83-93.
- 端野晋平, 2010a. 近年の無文土器研究からみた弥生早期. 季刊考古学 113, 31-34.
- 端野晋平, 2010b. 朝鮮半島南部無文土器時代前・中期炭素14年代の検討－歴博弥生開始年代に対する検討もかねて－. 古文化談叢 65(2), 217-247.
- 端野晋平, 2012. 渡来文化の形成とその背景. (財)古代学協会共同研究還元事業 講演とシンポジウム「列島稲作開始期の担い手は誰か」. 公益財団法人古代学協会, 京都.
- 端野晋平, 2014a. 渡来文化の形成とその背景. 公益財団法人古代学協会 (編), 列島の初期稲作の担い手は誰か. すいれん舎, 東京, pp. 79-124.
- 端野晋平, 2014b. 朝鮮半島・日本列島における過去の気候変動データの検討. 高倉洋彰先生退職記念論集刊行会 (編), 東アジア古文化論攷 1. 中国書店, 福岡, pp. 318-335.
- 福澤仁之, 1995. 天然の「時計」・「環境変動検出計」としての湖沼の年縞堆積物. 第四紀研究 34(3), 135-149.
- 前田義人・武末純一, 1994. 北九州市貫川遺跡の縄文晩期の石庖丁. 九州文化史研究所紀要 39, 65-90.

- 松本直子, 1996. 認知考古学的視点からみた土器様式の空間的変異—縄文時代晩期黒色磨研土器様式を素材として—. 考古学研究 42(4), 61-84.
- 丸山茂徳, 2008. 「地球温暖化論」に騙されるな!. 講談社, 東京.
- 水ノ江和同, 1997. 九州北部の縄文後・晩期土器—三万田式から刻目突帯文土器の直前まで—. 縄文時代 8, 73-110.
- 宮地聡一郎, 2012. 縄文時代後・晩期の遺跡群動態. 古代文化 64(1), 22-41.
- 宮本一夫, 2004. 青銅器と弥生時代の実年代. 春成秀爾・今村峯雄 (編), 弥生時代の実年代. 学生社, 東京, pp. 198-218.
- 宮本一夫, 2005. 園耕と縄文農耕. 慶南文化財研究院 (編), 韓・日新石器時代農耕問題. 韓国新石器学会・慶南文化財研究院, 昌原, pp. 111-130.
- 宮本一夫, 2008. 遼東の遼寧式銅剣から弥生の年代を考える. 史淵 145, 155-190.
- 宮本一夫, 2009. 農耕の起源を探る 稲の来た道. 吉川弘文館, 東京.
- 宮本一夫, 2011a. 板付遺跡・有田遺跡からみた弥生の始まり. 福岡市史編集委員会 (編), 新修福岡市史 資料編考古3 遺物からみた福岡の歴史. 福岡市, 福岡, pp. 595-621.
- 宮本一夫, 2011b. 考古資料からみた縄文時代から中・近世の博多. 福岡市史編集委員会 (編), 新修福岡市史 資料編考古3 遺物からみた福岡の歴史. 福岡市, 福岡, pp. 702-720.
- 宮本一夫, 2013. 環境の変遷と遺跡からみた福岡の歴史. 福岡市史編集委員会 (編), 新修福岡市史 特別編 自然と遺跡からみた福岡の歴史. 福岡市, 福岡, pp. 405-436.
- (韓国語文) カナダ順
- 慶南発展研究院歴史文化센터, 2009. 마산 진북 망곡리유적 I.
- 慶尙大學校博物館, 1999. 晋州 大坪里 玉房 2 地區 先史遺蹟.
- (英語文) アルファベット順
- Hashino, S., 2010. Rice paddy agriculture diffusion mechanism: A case study of diffusion from southern Korea to Japan. In: ESF-JSPS (Ed.), ESF-JSPS Fronthier Science Conference Series for Young Researchers. ESF-JSPS, Fukuoka. pp. 148-149.
- Hashino, S., 2011. The diffusion process of red burnished jars and rice paddy field agriculture from the southern part of the Korean peninsula to the Japanese Archipelago. In: Matsumoto, N., Bessho, H., Tomii, M. (Ed.), Coexistence and Cultural Transmission in East Asia (One World Archeology). Left Coast Press, Walnut Creek, pp. 203-221.
- Reimer, P. J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J. W., Blackwell, P. G., Ramsey, C. B., Buck, C. E., Cheng, H., Edwards, R. L., Friedrich, M., Grootes, P. M., Guilderson, T. P., Hafliðason, H., Hogg, I., Hatte, C., Heaton, T. J., Hoffmann, D. L., Hogg, A. G., Hughen, K. A., Kaiser, K. F., Kromer, B., Manning, S. W., Niu, M., Reimer, R. W., Richards, D. A., Scott, E. M., Southon, J. R., Staff, R. A., Turney, C. S. M., Plicht, J. v. d., 2013. IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves 0-50,000 years cal BP. Radiocarbon 55, 1869-1887.

常三島遺跡の近世火葬墓

端野晋平*・米元史織**

*徳島大学埋蔵文化財調査室

**九州大学総合研究博物館

はじめに

徳島大学常三島キャンパスに所在する常三島遺跡は、近世徳島城下町跡のなかでも、武士が居住した屋敷地跡にあたることが知られている。ここではこれまで再開発に伴い、発掘調査が実施され、徳島藩の武家屋敷の一端が明らかにされてきた。そうしたなか、徳島大学埋蔵文化財調査室が1995・1996年度に実施した第3・5次調査（工学部光応用工学科棟地点）では、17世紀代の火葬墓が屋敷地内より検出された。最近になって、同調査室では、この火葬墓とそこから出土した遺物の整理作業を実施し、その結果、興味深い事実がいくつか明らかとなった。そこで本稿では、整理作業の結果をもとに、この火葬墓の被葬者像と造墓の背景について考察を行う。

1. 常三島遺跡の概要

A 歴史的環境

徳島大学では、常三島キャンパスおよび総合グラウンドの敷地内に所在する遺跡を、独自に常三島遺跡と呼んでいる。この遺跡は、四国の東半部を紀伊水道に向けて東流する吉野川河口付近のデルタ地帯に位置する（図1）。徳島城下町は、豊臣秀吉による四国平定後の天正11（1585）年、阿波国に入部した蜂須賀家政によって建設が進められた。城下町の中核となる城山の東側に位置する6島（徳島・寺島・福島・住吉島・常三島・出来島）には武家屋敷地が配置されたが、その中の一つ、常三島に形成されたのが、常三島遺跡である（図2）。常三島は、古文書と絵図によって、主として物頭以下の中・下級武士の屋敷地であったことが判明している。明治時代になると、この地一帯は、近世の街路区画が残されたまま、急速に水田化した後、徳島県尋常師範学校附属小学校や徳島大学工学部の前身である徳島高等工業学校が設置された。その後、太平洋戦争を経て、戦後まもなくしてから徳島大学常三島キャンパスが設定され、今日に至っている。

B 既往の調査

常三島キャンパスと総合グラウンドでは、再開発を原因として、2015年度までに計21次にわたる発掘調査が実施されている（図3）。その結果、近世にこの地に形成された徳島城下町常三島地区の様相が徐々に明らかにされつつある。本キャンパスは、南北に走る道路を境として、西側の総合科学部エリアと東側の工学部エリアに分けられる。発掘調査は工学部エリアで16次、総合科学部エリア

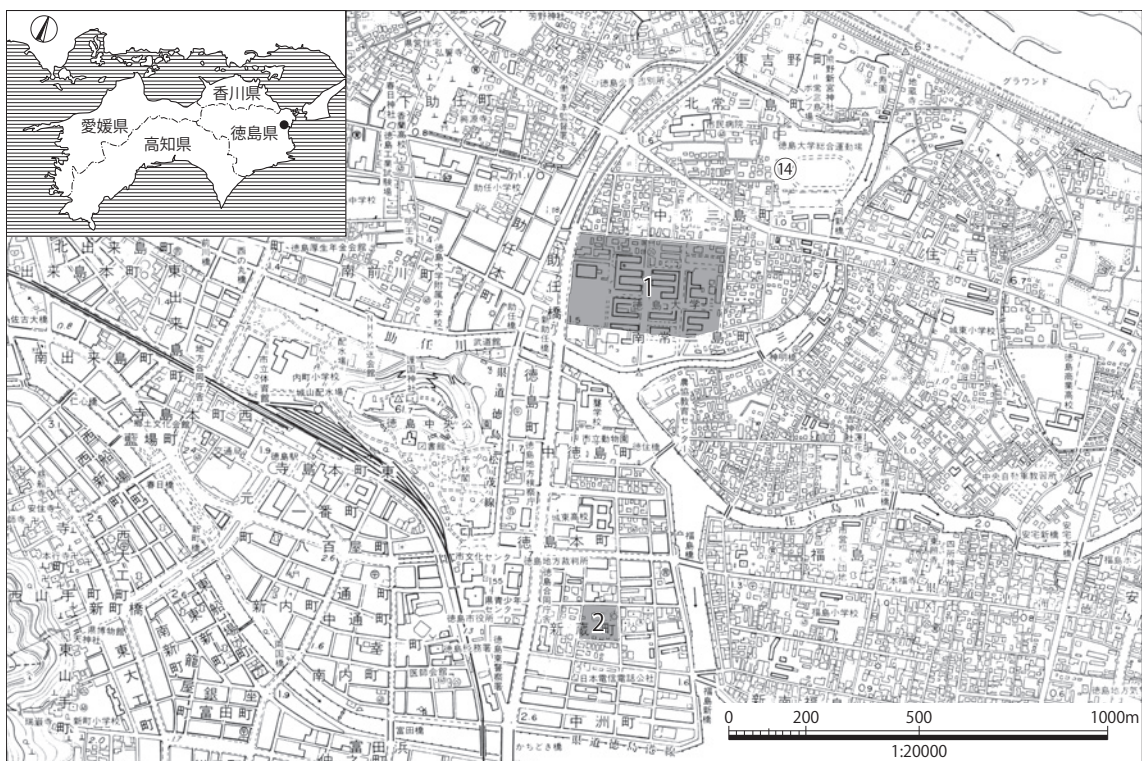


図1 常三島遺跡の位置

1. 常三島遺跡（常三島キャンパス） 2. 新蔵遺跡（新蔵キャンパス） ⑭は常三島遺跡第14次調査地点（国際航業株式会社調製『徳島市全図2』をもとに作成）

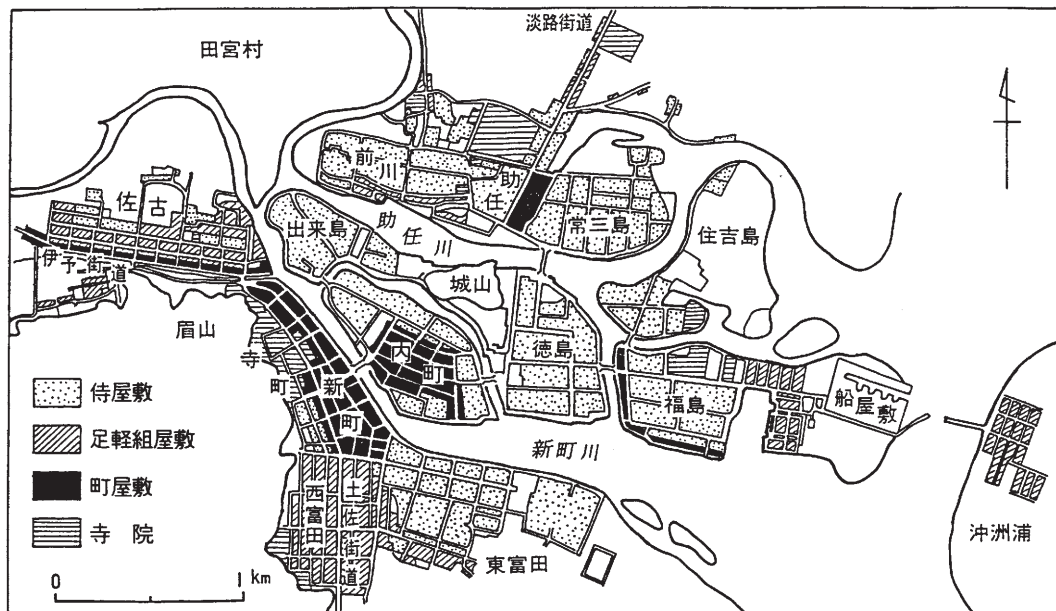
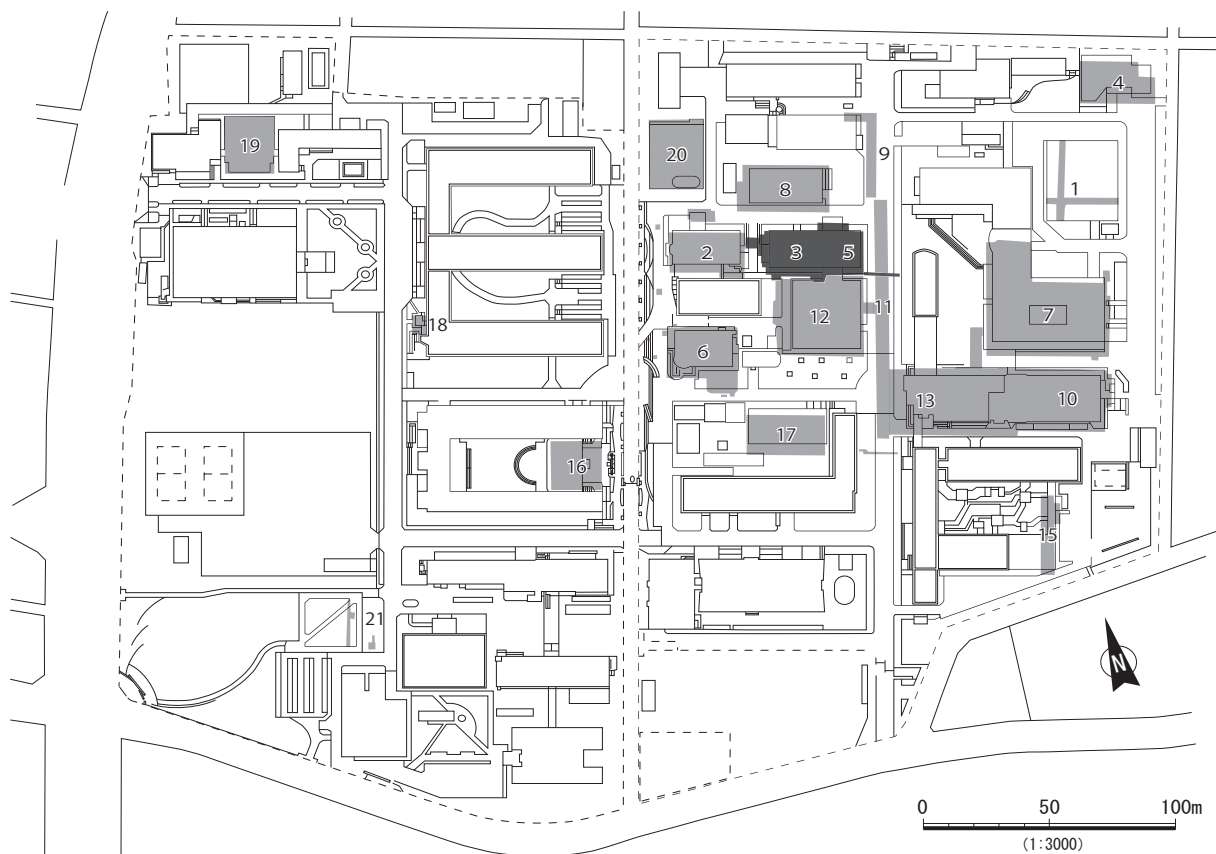


図2 寛文5（1665）年「阿波国渭津城之図」（徳島県立博物館所蔵）にみる徳島城下の町割（平井1995より引用）



- | | | |
|----------------------------|-------------------------|-------------------|
| 1. 工学部実習棟試掘 | 8. 総合情報処理センター | 16. 総合科学部3号館 |
| 2. 地域共同研究センター | 9. 共同溝 | 17. 工学部総合研究棟 |
| 3. 光応用工学科棟 | 10. 共通講義棟 I | 18. 総合科学部1号館エレベータ |
| 4. 工業会館 | 11. 共同溝 II | 19. 地域連携プラザ |
| 5. 光応用工学科棟-追加 | 12. 総合研究実験棟 | 20. フロンティア研究センター |
| 6. サテライト・ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー | 13. 総合教育研究棟 (共同講義棟 II期) | 21. 地域創生・国際交流会館試掘 |
| 7. 機械工学科棟 | 15. 工学部実験研究棟 | * 番号は調査回数も兼ねる。 |

図3 常三島遺跡の発掘調査地点

で4次にわたって実施されている。また、キャンパスの北東に位置する総合グラウンドでは1次の調査が実施されている。これまでの調査では、屋敷を区画する溝（1・3・4・6・7・9・11・16・17・19次）、素掘り舟入状遺構（15次）、石組み舟入状遺構（15次）、呪的な性格を有する青銅製品埋納遺構（2次）などが検出されており、注目されている。また今日、徳島城下町跡を代表する遺物に数えられるしめなわ文茶碗の発見の契機となったのも、本遺跡の第2次調査である。本稿で報告する火葬墓は、第3・5次調査で検出されたものである。

2. 常三島遺跡第3・5次調査と火葬墓

A 常三島遺跡第3・5次調査

徳島大学では、常三島キャンパス・工学部エリアの北西部に位置する地点に、工学部光応用工学科棟を1996年度に建設する計画が提出された。この計画以前に、同キャンパスの北東部で実施された

第1次調査、予定地のすぐ西側で実施された第2次調査では、近世武家屋敷跡を中心とする良好な遺構が検出されていた。建設予定地でも同様の遺構の存在が予測されたため、1995年8月22日～1996年3月25日、1996年4月17日～5月30日の期間において、発掘調査を実施した。現在、正式報告書は未刊行であるため、以下、概要報告（徳大埋文委・徳大埋文調1997）にもとづいて、記述する。

発掘調査の結果、3面の遺構面が確認された。各遺構面に形成された遺構の時期はそれぞれ、第1遺構面は江戸後期～末期（18世紀後半～19世紀中頃）、第2遺構面は江戸中期（18世紀前半）、第3遺構面は江戸前期（17世紀代）と考えられる。遺構は、本稿で報告する火葬墓のほか、土坑160基、柱穴40基、井戸2基、溝10条、方形苑地1基、貝塚状土坑2基が検出された。

第1遺構面で検出された溝は、三つの屋敷地の境界部を表し、その居住者は、絵図と徳島藩士譜によって、以下のように推定できる（図4）。

A 地区 少なくとも江戸中期の享保年間以降、幕末までは佐野家の屋敷地と確認できる。

佐野家（玄真）：明暦3（1657）年召出。7人扶持15石～7人扶持20石。代々医師を世襲。

B 地区 18世紀末の寛政年間から幕末までは牧家の屋敷地であるが、18世紀後半は島山家の屋敷地となる。18世紀前半の享保年間以前は藤川家の屋敷地である。これら屋敷主のいずれもが徳島藩士譜に名を残していないという特徴がある。絵図から知られる屋敷主と年号は以下の通りである。

藤川家：元禄（17世紀後半）、享保（18世紀前半）

島山家：天明（1782～1786）

牧家（梶五郎）：寛政8年（1796）、文化・文政頃（19世紀前半）、安政年間（幕末）

C 地区 18世紀末の寛政期以降は真鍋家、それ以前の江戸中期は山下家の屋敷地であったと考えられる。

山下（与蔵）家：興源院様召出。7人扶持10石。初代は琵琶法師、御広間御番、道御奉行など。
天保5（1834）年以降不明。

真鍋（芳太郎）家：宝暦4（1754）年罷越。150石。奥小姓役。西の丸御番、佐渡小文次組。

屋敷境の溝やその周辺を中心として、陶磁器、木器、漆器、瓦などの遺物が多量に出土した。そのうち、最も数量の多い遺物は陶磁器である。そのほとんどは18世紀後半～幕末のもので占められるが、17～18世紀前半の遺物もある。陶磁器は、肥前・瀬戸・京・信楽・備前などを生産地とする広域流通品と、大谷焼のような阿波で作られ、狭い範囲で流通した製品がある。そのほか、淡路の珉平焼、阿波の庸八焼といった19世紀の一時期に作られた製品、伊予の砥部焼とみられる磁器も注目される。

B 火葬墓

火葬墓(SK145)は、第3遺構面の調査区東側で検出された（図4）。溝から推定される屋敷割でいえば、B地区に位置し、ここは絵図から17世紀後半には藤川家の屋敷地であったと考えられる。墓壇の平面形は長楕円形で、推定長約110cm、幅61cmを測る（図5）。断面形は箱形で、深さは14～17cmを測る。土層断面（図6）をみると、墓壇が掘り込まれたVII-2層の上面には、本火葬墓に向かって不自然な落ちがみられる。また、本火葬墓の墓壇の深さは、本来のものともみるには浅すぎる。これらの

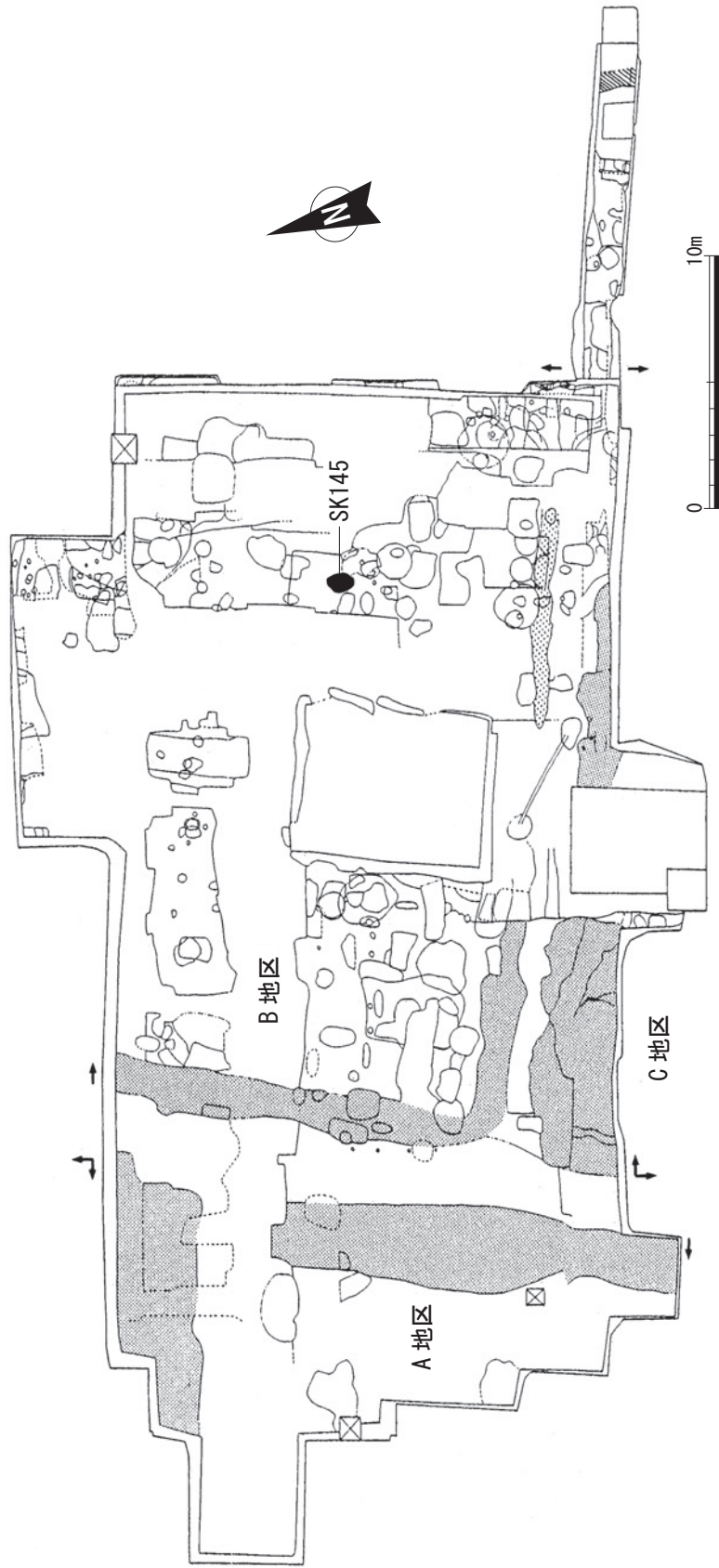


図4 常三島遺跡第3・5次調査地点遺構全体図
網掛けは屋敷境溝。(徳大埋文委・徳大埋文調 1997 より引用・改変)

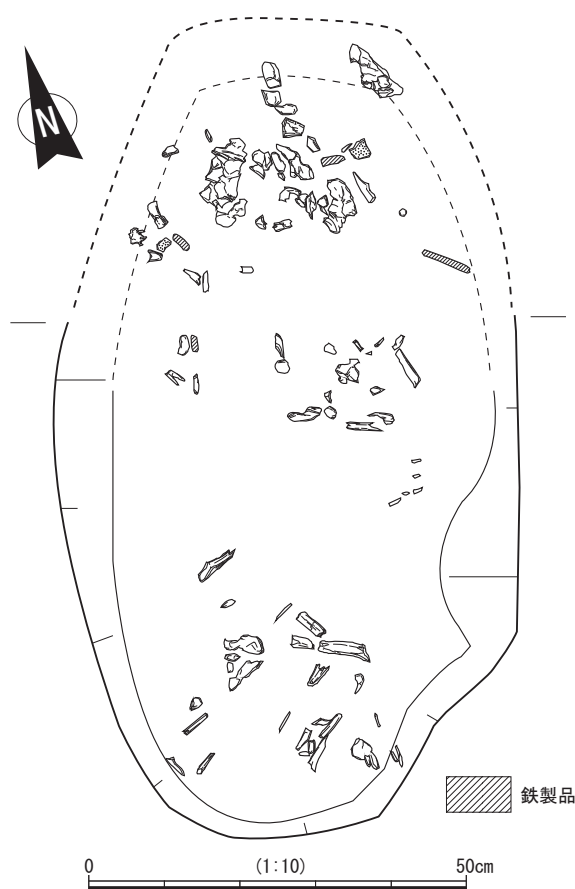


図5 火葬墓 (SK145) 平面図

事実から、墓壙の上面は後世の造成時に、削平を受けた可能性が高い。

墓壙の埋土である②層の中位で、人骨の上端が検出された。②層は焼けた人骨とともに、炭化物や焼土を多量に含んでいることから、この遺構が遺体を焼いたその場所であると考えられる。また、人骨の周囲からは、釘と思われる鉄製品数点が見つかっていることから、木棺を使用したと推定される。こうした鉄製品のほかに、木片が検出されているが、これは木棺の部材あるいは薪の燃え残りと考えられる^{註1)}。これらの事実は、まず墓壙内に遺体を入れた木棺を置き、そこで燃料となる薪を積んでこれを焼いた後、土をかけて埋めたという埋葬のプロセスを示している。

人骨は遺存状態が良くなく、頭骨・骨盤・肋骨・椎骨・四肢骨などの小片が少量得られたにとどまるが、後述するように、成年前半の男性であることが判明した。人骨の整理作業を行った結果、明らかとなった部位の出土位置を図に示す

と、図7の通りである^{註2)}。以下、これにもとづいて、人骨の出土状況を述べる。

部位の判明した人骨は分布上、大きく三群に分けることができる。これら三つの群を北から南に向けてⅠ群・Ⅱ群・Ⅲ群と呼ぶこととする。まず、最も北側に位置するⅠ群では、右側頭骨および右側の顔面部がまとまって出土している。また、右側頭骨の関節窩と右下顎骨の関節突起部が関節状態を保ってはいないが、近接して出土している。右頬骨や右側頭骨も近接している。このように、各部位は関節状態を保ってはいないものの、大きく動いているわけでもないことが分かる。

Ⅰ群の南側に位置するⅡ群では、右寛骨と仙骨が前面を上にした状態で出土している。右大腿骨頭は、寛骨臼から外れているが、右寛骨の大坐骨切痕付近から出土している。右踵骨・右距骨もこの付近から出土している。このように、各部位は関節状態を保ってはいないものの、大きく動いているわけでもないことが分かる。

最も南側に位置するⅢ群では、椎骨・肋骨・左上腕骨・下顎骨・頭蓋骨の小片がまとまって出土している。ここでは、頭蓋骨でも主に左側顔面部、左上腕骨が出土していることが注意される。これは、土層断面で確認されたように、墓壙の上面が後世、削平され、それに伴い、もともと北側のⅠ群辺りに位置していた頭蓋骨の左側顔面部、左上腕骨が、この地点まで動かされたと判断される。

以上の人骨各部位の出土状況から、遺体の頭位方向および埋葬姿勢は、次のように復元できる。まず、Ⅰ・Ⅱ群でみられる頭骨・骨盤・下肢骨の位置関係にもとづけば、遺体の頭位はおおむね北をとつ

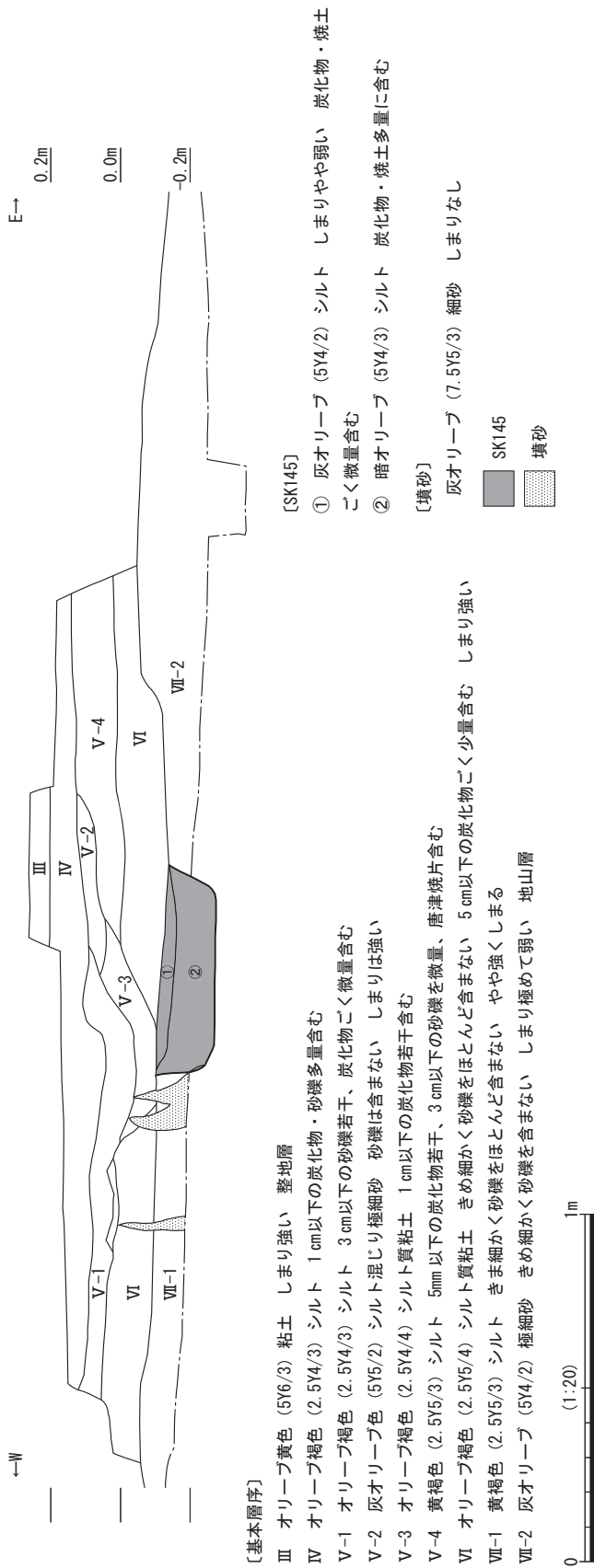


図6 火葬墓 (SK145) 付近の土層断面図



- ① 頭蓋骨
- ② 右側頭骨の乳様突起付近
- ③ 右下顎骨関節突起
- ④ 右頬骨
- ⑤ 右距骨
- ⑥ 右踵骨
- ⑦ 右大腿骨頭
- ⑧ 右寛骨
- ⑨ 仙骨
- ⑩ 肋骨
- ⑪ 椎骨・肋骨
- ⑫ 左上腕骨（西側が遠位）
- ⑬ 下顎骨（左側が右側の上に位置）
- ⑭ 下顎枝
- ⑮ 左側頭骨の乳様突起
- ⑯ 頭蓋骨（主に左側の顔面部）
- ⑰ 頭蓋骨

図7 火葬墓 (SK145) の人骨出土状況

ていたことが分かる。そして、Ⅲ群で後世の造成によって動かされた部位には、身体の左側のものがとくに含まれることから、埋葬時に遺体の右側を下にした姿勢、すなわち右側臥位であった可能性が高い。こうした姿勢は釈迦が涅槃に入った時にとったとされる「頭北面西」を想起させる。

また墓壙の長さからみて、遺体は下肢を曲げた姿勢で埋葬された可能性が高い。墓壙は、堀り込み面より下位で検出されたものであり、堀り込み面での長さはこれよりも大きくなるとはいえ、大幅に異なるとは考えにくい。江戸時代庶民の成人男子の平均身長が157cm（鈴木尚 1985）、江戸時代の成人男子の平均身長が155～156cm（鈴木隆 1996；平本 2004）であることから、被葬者が平均的な身長であった場合は、下肢を曲げた屈葬でないと、木棺に収めるのは困難である。

3. 火葬人骨に関する検討

A 人骨所見

本人骨は、硬質で主として白色の骨片からなり、黒色化した骨片がほとんど存在しないことから、600°以上の高温で焼かれたことがわかる。また、多数みられるクラックは軟部組織が付いた状態で火葬されたことを示している^{註3)}。遺存状態はあまり良好ではなく、また火葬であるためほとんどの骨片にゆがみが生じている。識別が可能であった遺存部位は図8・9に示す通りである。

頭蓋骨は、右側側頭骨の前頭頬骨縫合付近、側頭骨の一部、前頭骨の一部及び左側の眼窩上縁部の一部、左側側頭骨の一部、左側の乳様突起部、左側の頬骨弓、左側錐体、後頭骨の外後頭隆起部が遺存する。下顎骨は、右側の下顎頭、および下顎体の一部が遺存する。小臼歯の歯根が歯槽部に植立した状態であった。

残存歯牙の歯式は以下の通りである。

/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
/	/	/	△	△	/	/	/	/	/	/	/	/	×	×	○	

(○歯槽開放 ×歯槽閉鎖 /欠損 △歯根のみ)

軀幹骨は、詳細部位不明の椎骨片と肋骨片が多数遺存する。

上肢骨は、左側鎖骨の一部、上腕骨頭の一部・三角筋粗面付近骨体、右側の肩甲骨の一部が遺存する。下肢骨は、右側の寛骨の一部及び右側的大腿骨、右側の膝蓋骨の一部、右側の距骨片・踵骨片、左側的大腿骨頸部、脛骨ヒラメ筋線付近が遺存する。

B 性別・年齢

性別は、大坐骨切痕が狭く、乳様突起の基部が大きく、外後頭隆起がやや発達していることから男性と判定される。年齢は、頭蓋骨の縫合は内板・外板ともに閉鎖していないこと、第3大臼歯の歯槽が開放しており、萌出済みであることから成年前半と推定される。

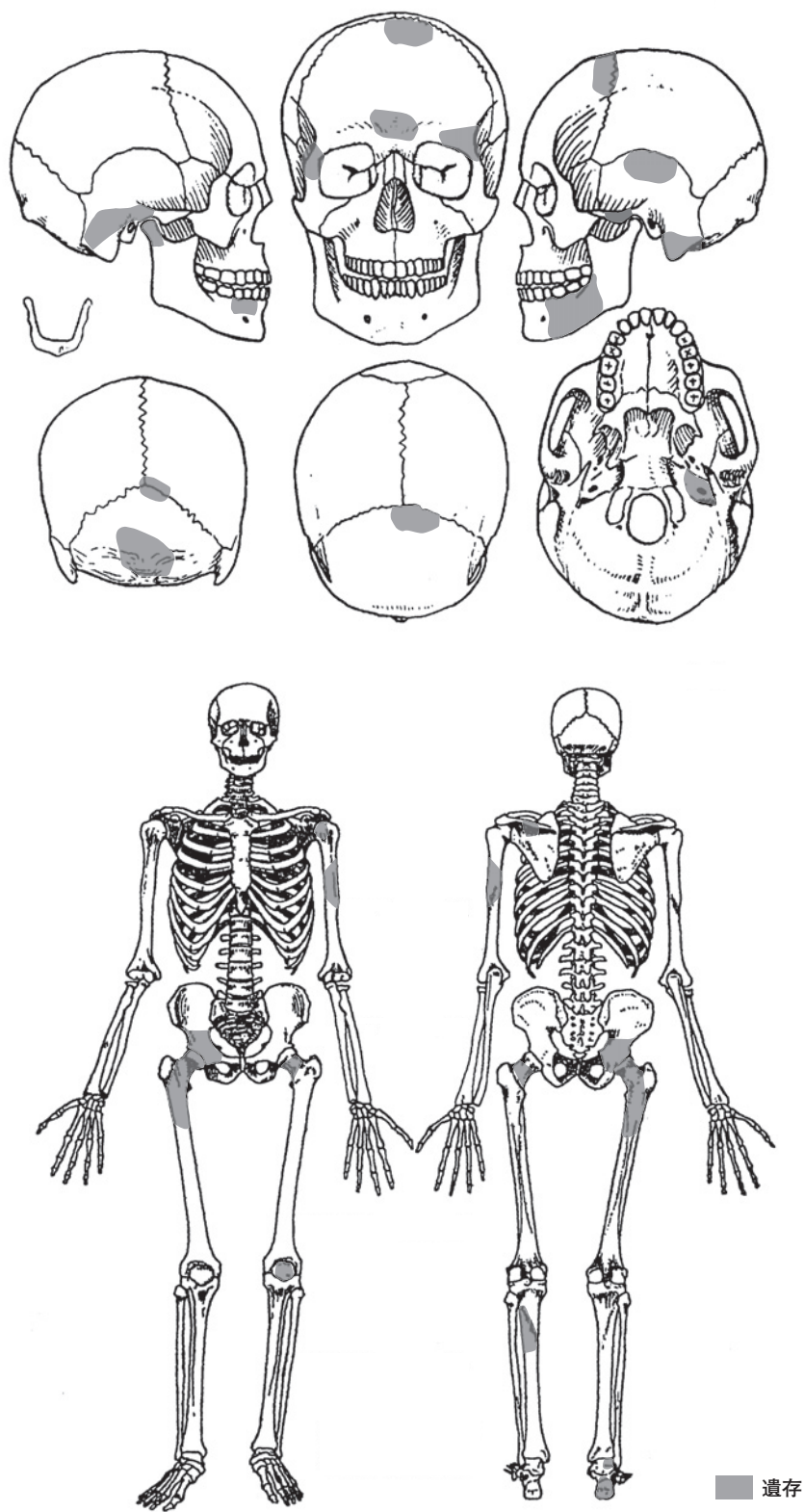


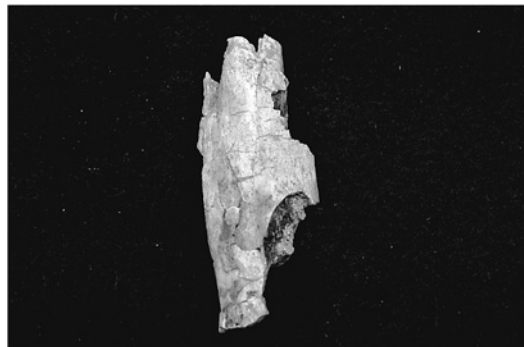
図8 人骨の遺存部位



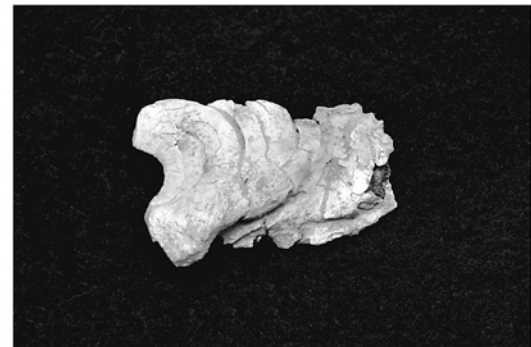
左側下顎（頬側）



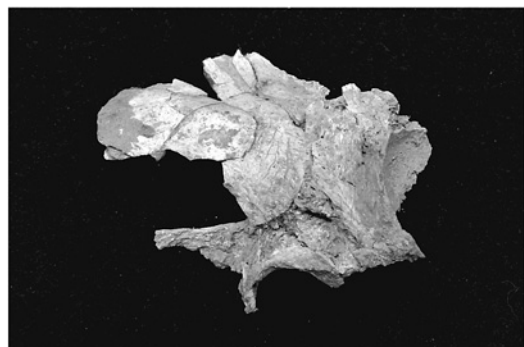
右側下顎（舌側）



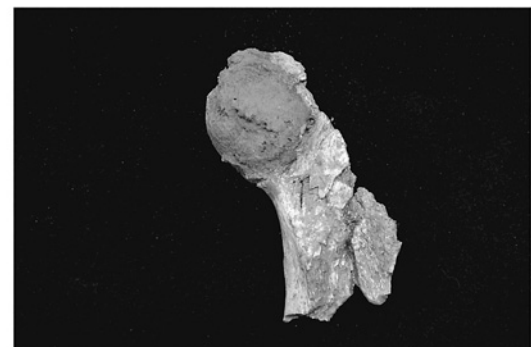
左側上腕骨骨体



左側側頭骨乳様突起部



右寛骨



右大腿骨頭



右側側頭骨乳様突起部・頬骨・下顎骨関節突起

図9 遺存した人骨

C 特記事項

左側第一大臼歯と第二大臼歯が閉鎖している。本人骨の年齢を考慮すると、う蝕などの要因で生前に歯を喪失し、歯槽骨が閉鎖したと考えられる。

4. 火葬墓の被葬者像と造墓の背景

さて、以上の検討結果をふまえ、この火葬墓の被葬者像、およびこれが造られた背景に迫ってみよう。まず目を引くのがこの墓が造られた場所である。調査所見からみて、単にこの場所を火葬場としただけでなく、火葬後にそのまま埋葬の場としたのは間違いない。先述の通り、本地点で検出された溝と絵図との対比によって、この火葬墓は屋敷地内に位置すると考えられる。これは、通常、近隣の寺院が管理する墓地に遺体が埋葬されたとみられる近世武家の葬送習俗とは明らかに異なり^{註4)}、極めて特異な「場の選定」とみなせる。

こうした「場の選定」には、積極的選定と消極的選定の二者が考えられる。まず、積極的選定の事例としては、土地開発者たる先祖を埋葬し、子孫の土地継承を守護すると信じられた中世前期以降の屋敷墓があげられる。これは現行民俗の屋敷神までつながるものとみられている(勝田1988)。しかし、常三島の屋敷地は藩主から拝領されたものであり、こうした開発先祖信仰が発生したとは考え難いため、このケースをそのまま当てはめるには疑問が残る。しかも、本火葬墓の被葬者の年齢は成年前半であり、死後に信仰対象となった先祖とみるにはやや若すぎる。

そうすると、もう一方の消極的選定に目を向けざるを得ない。すなわち、何らかの特別な事情があって、亡くなった人物を通常の墓地に埋葬できず、屋敷地を埋葬場所に選ばざるをえなかったという考え方である。それが具体的にどんな事情によるものか、言及するのは困難だが、被葬者の生前の社会的属性、あるいは死因自体の特殊性によって、埋葬の場として屋敷地が選ばれたのだろうか。本火葬墓の位置する屋敷地は、藩士譜に名を残していない人物ばかりが居住していたことも気になる点である。こうした事実と、この墓が造られた背景との間に何らかの関係があるのだろうか。

それでは、火葬の採用についてはどうであろうか。文献史学の立場からは近年、都市と農村、階層差、宗派、個人の思想といった様々な観点から、採用要因の多様性が示されており(木下2012)、遺跡から得られた情報だけで、それをしぼり込むことは困難である。ただ、これまでの考古学研究の成果をふまえれば、その系譜関係を示すことは可能であろう。

山口県吉母浜遺跡では、本火葬墓と類似するスタイルをとる中世の火葬墓19基が検出され、民俗事例の中に見いだせる火葬法が、室町時代にすでに行われていたことが指摘されている。これらを調査した田中良之は、常民の間では野天に穴を掘り(土井・佐藤1979)、薪や藁をおき、棺の上にも積み上げて火をつけ、すっかり焼けると翌朝は骨拾いをする(井之口1977)という現代に残された火葬習俗に類似性を見出し、両者が系譜関係にある可能性を示唆した。そして、現代の火葬において「のど仏」として不可欠とされる第2頸椎が、火葬墓すべてにみられなかったことを見出し、拾骨を行った可能性を認めた。さらに、西日本各地に吉母浜の火葬墓とほぼ同じスタイルの墓が造られた背景に、「政治権力の規制を受けない情報系として機能していた真宗教団」との関連性を考えた(田中1985)。

本火葬墓では、拾骨を行った積極的な証拠を見出すことはできないものの、火葬習俗としては系譜を同じくする可能性があるだろう。

そのほか大分県吉松遺跡でも、本火葬墓とよく似たスタイルをとる中世（15世紀後半～16世紀前半）の火葬墓11基が検出されている。これらは頭位が北向きで、右側臥屈葬のものがほとんどであるが、こうした特徴は本火葬墓と共通する。また、墓壇内からは火葬人骨、焼土、炭化した薪とともに、多量の藁灰が検出され、灰化したムシロ状の編み物が遺存していた例もあった。民俗事例での火葬法では、「多量の薪木と藁を必要とし、またぬれむしろをかけるのがよい」とされるので（土井・佐藤1979）、吉松例でも先述の吉母浜例と同じく、こうした方法をとって行われたとされる（佐藤1988；渋谷・佐藤1988）。本火葬墓では、藁灰やムシロなどの痕跡は確認されていないものの、調査所見からみて、やはり民俗事例に類する方法をとったと考えられ、系譜を同じくする可能性を指摘できよう。

なお、本火葬墓は出土人骨の検討により、成年（前半）・男性の埋葬例であることが明らかとなった。吉母浜例は成年、吉松例は成人もしくは成年のものであり、対象とする年齢層においても三者は共通していることを書き添えておきたい。

おわりに

以上、常三島遺跡第3・5次調査出土の火葬墓の被葬者像と造墓の背景について考察を行った。その結果、何らかの特別な事情で屋敷地内に埋葬された人物像が浮かび上がってきた。また、民俗事例として現代まで残存し、時代をさかのぼれば室町時代まで確認されている火葬習俗と系譜を同じくする可能性を指摘した。筆者の力量不足により、近世史学、近世考古学の研究蓄積を十分に活かすことができず、論じ足りない部分が多々あるものと思われる。大方のご叱正とご教示を請うものである。また、考古学的な事実については、あくまで現状の認識にしたがっており、正式報告書の刊行に際して、変更があれば、それにもとづき再考したい。なお、火葬墓から出土した人骨は九州大学大学院比較社会文化研究院基層構造講座、そのほかの遺物は徳島大学埋蔵文化財調査室で保管されている。人骨のクリーニングにあたっては、九州大学の田中良之教授、福永将大院生からのご協力を賜った。本稿の内容は2016年2月、考古フォーラム蔵本で発表した。席上で近藤玲・中村豊・三阪一徳・脇山佳奈の諸氏から有益なご教示を賜った。末筆ながら、記して感謝の意を表したい。

本稿は第3章を米元が、それ以外を端野が執筆し、全文の調整は端野が行った。

註

1. 整理作業の過程で、人骨とともに取り上げられていた墓壇埋土中から、調査時に確認されていた鉄製品とは別に、鉄製品数点と木片が検出された。また、墓壇埋土を水洗選別した結果、魚骨と思われる小片も検出された。
2. 人骨の整理作業を担当した米元が作成したメモをもとに、端野が作成した。
3. 国立科学博物館・坂上和弘研究主幹によるご教示。
4. 常三島の武士集団の墓地がどこにあったのかは未調査である。今後の課題としたい。

文献

- 勝田至, 1988. 中世の屋敷墓. 史林 71(3), 375-410.
- 木下光生, 2012. 近世の葬送と墓制. 勝田至 (編), 日本葬制史. 吉川弘文館, 東京, pp. 180-246.
- 佐藤良二郎, 1988. 宇佐の中世墓. 大分懸地方史研究会 (編), 大分懸地方史. 大分懸地方史研究会, 大分, pp. 49-64.
- 渋谷忠章・佐藤良二郎, 1988. 中世墳墓の地域的様相 九州. 考古学ジャーナル 304, 20-22.
- 鈴木隆雄, 1996. 日本人のからだー健康・身体データ集. 講談社, 東京.
- 鈴木尚, 1985. 骨は語る 徳川将軍・大名家の人びと. 東京大学出版会, 東京.
- 田中良之, 1985. 中世の遺構. 村田多津江 (編), 吉母浜遺跡. 下関市教育委員会, 下関, pp. 31-100.
- 徳島大学埋蔵文化財調査委員会・徳島大学埋蔵文化財調査室, 1997. 徳島市常三島遺跡埋蔵文化財発掘調査実績報告書 工学部光応用工学科棟. 徳島大学埋蔵文化財調査委員会・徳島大学埋蔵文化財調査室, 徳島.
- 土井卓治・佐藤米司, 1979. 総論. 土井卓治・佐藤米司 (編), 葬送墓制研究集成第1巻 葬法. 名著出版, 東京, pp. 11-35.
- 平井松午, 1995. 城下町起源の都市徳島. 寺戸恒夫 (編), 徳島の地理. 徳島地理学会, 徳島, pp. 179-181.
- 平本嘉助, 2004. 江戸時代の身長と棺の大きさ. 江戸遺跡研究会 (編), 墓と埋葬と江戸時代. 吉川弘文館, 東京, pp. 201-223.

【追記】

本稿の内容は本来、私（端野）からの依頼をお受けになった田中良之先生（九州大学）が人骨の整理作業をご担当され、その結果をもとにご発表される予定であった。しかし、先生の突然のご逝去のため、人骨の整理作業、所見の文章化については米元が引き継ぎ、それ以外については私が先生に代わって作成することとなった。博識・聡明な先生の代わりが務まったはずもないが、読者諸氏にはどうかご容赦いただきたい。

先生が旅立たれてからもう10か月が過ぎてしまった。学部から大学院に進学して以来、10数年、先生の研究室に居座った私には、厳しくも楽しかった先生との思い出は数え切れないほどあり、とてもここでは語りつくせない。授業はもちろん、研究室でのコーヒーマイクや飲み会での先生のウィットに富んだトークから、学問をするための「センス」（本来は学習して得られるものではないのだが）を学んだような気がする。私は先生のご専門とする古人骨や縄文土器を専攻する学生ではなかったが、いっしょに様々な場所に連れて行っていただいた。今日、私のフィールドの一つとなっている韓国に導いていただいたのも先生であった。大学院を出た後も私はあれこれと立場を変えつつ九大に長く在籍し、身近で先生から、学問だけでなく人として生きていくための多くのことを学ばせていただいた。

徳島大学に赴任し、しばらくして私は、長年にわたってご指導いただいた先生に少しでも恩返し

できないかと思い始めた。先生を人骨の整理作業のため、徳島にお呼びしたのもそうした思いからであった。いや、ようやく一人前になった姿を先生にお見せしたいというエゴからであったにちがいない。実際にお越しいただいたものの、こんな資料のために先生をわざわざお呼びして良かったのだろうかと内心、後悔の念でいっぱいであった。作業を終えた先生を空港までお送りして、保安検査場入口前で、あの何とも言えないご表情で「なかなか面白かったぞ」と言っていたとき、ほっと胸をなでおろしたのをおぼえている。思えば、先生からこうしたお言葉をいただくことで、これまで私は考古学を続けてこられたのかもしれない。その後も何度か徳島にお越しいただくことを考えていたが、それも叶わなくなってしまった。

先生、天国ではどうかごゆっくりお過ごしください。

(2016年1月5日、端野晋平)



2014年8月26日、徳島大学埋蔵文化財調査室にて人骨の整理作業を実施される田中良之先生。手前は福永将大院生。

南庄遺跡出土素文鏡について

脇山佳奈*

*徳島大学埋蔵文化財調査室

はじめに

徳島市南庄町南庄遺跡は、鮎喰川水系の旧河川の沖積作用によって形成された標高5～6mの微高地上に立地する弥生時代・古墳時代を中心とする集落遺跡である。周囲の遺跡としては、北に庄遺跡、東に南蔵本遺跡、西に鮎喰遺跡、名東遺跡が位置する。

南庄遺跡では、1994年のマンション建設による調査（第1図e）で、溝SD05から素文鏡1点が出土している（三宅1995）。本遺跡出土素文鏡については、これまでに論文等で取り上げられることが少なく、あまり注目されていなかった。今回、この素文鏡を実見する機会を得たため、類例との比較を行い、製作時期や出土遺跡の種類について検討を進める。最後に本遺跡出土素文鏡のもつ意義についても論じることとする。

1. 南庄遺跡の概略

南庄遺跡の調査は1981年から始まり、1985年からは4年にわたって南庄・南佐古線における調査（徳島市教育委員会編1986～1989、第1図b）が行われた。1985～1988年の調査では、総面積約6,700㎡に及ぶ調査区から、弥生時代、古墳時代、平安時代の集落跡が確認されている。最も古い時期の遺構は弥生時代前期中ごろで、土坑や堀が確認されている。弥生時代中期後半～後期前半の遺構としては、東西の微高地上に計19棟の竪穴住居跡が確認されている。微高地に挟まれた低湿地に形成された自然流路からは、弥生土器・石製品・鉄剣・銅鏃・勾玉・管玉・ガラス玉が出土している。古墳時代の遺構は西側の微高地上で確認され、竪穴住居跡7棟、堀立柱建物跡5棟、河川跡3条が検出されている。遺物は6世紀前半～7世紀前半の須恵器・土師器・鉄製小刀・轡・管玉が出土している。平安時代の遺構は東側の微高地上で確認されている。

1987年には、徳島家畜保健衛生所の建替えに伴う調査（森編1989、第1図c）が行われ、土坑や自然流路、弥生時代中期前半の溝、弥生時代中期前半～古墳時代初頭の遺物が確認されている。

1991年の住宅開発に伴う調査（勝浦1989、第1図d）では、弥生時代、中世の溝が確認されている。

1994年のマンション建設工事に伴う調査（三宅1989、第1図e）では、弥生時代前期後半の土器溜り、弥生時代中期後半の竪穴住居跡、古墳時代後期以降の溝が数条検出されている。

2007年の調査（大橋・木村編2010、第1図f）では、弥生時代後期の溝状遺構と自然流路、古墳時代後期の竪穴住居跡・土壇・溝状遺構、古代の溝・自然流路・掘立柱建物跡が確認されている。自然流路SR1004は南岸のみが調査区内で、この南岸に沿って集石遺構が検出され、その周囲には斎串・



(南庄遺跡)

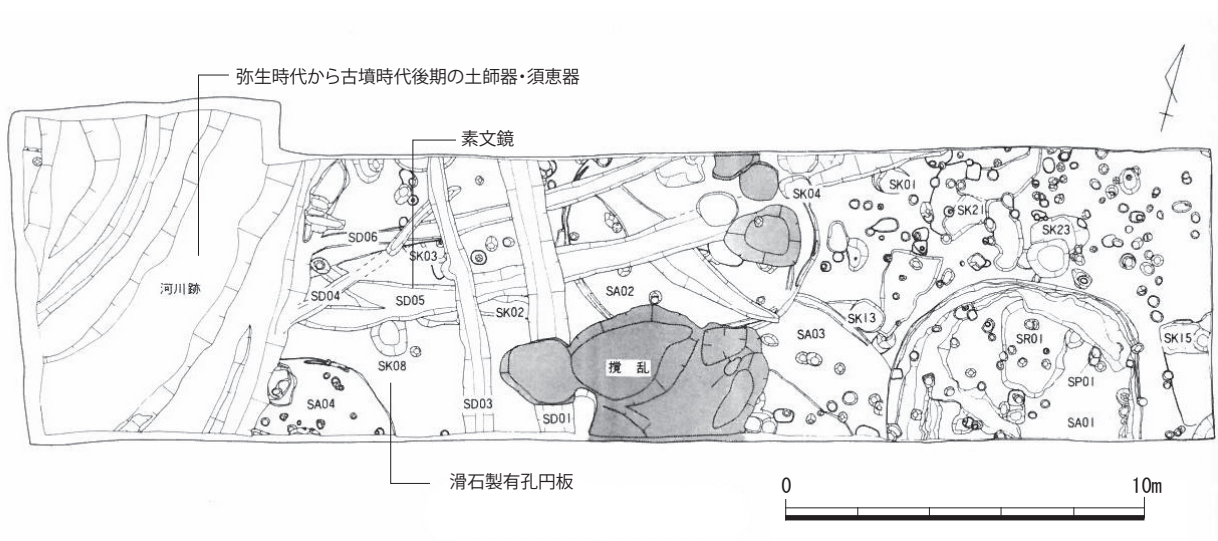
a 小川マンション地区 b 南庄・南佐古線地区 c 家畜保健衛生所地区 d 住宅地区 e マンション地区 f 庄名東線地区

第1図 南庄遺跡調査地点

徳島市全図1・2 (徳島市国際航業株式会社調整より引用・改変)

鹿骨などの有機物が残存する。集石の時期は10世紀以前と推測されている。以上が南庄遺跡の遺構・遺物の主な内容である。

素文鏡は、1994年のマンション建設工事に伴う調査にて溝SD05から単独で出土している(第2図)。SD05は河川跡と土坑SK08を切ると報告され、河川跡からは弥生時代から古墳時代後期の土師器・須恵器、SK08からは滑石製有孔円板1点が出土している。SD05の時期については古墳時代後期以降と



第2図 素文鏡出土遺構（三宅 1995 より引用・改変）

判断されている。その後の祭祀遺物を集成した図録（徳島市考古資料館編 2008）では、古墳時代の鏡として報告されており、筆者も古墳時代の鏡と考えている。

2. 素文鏡の研究史

南庄遺跡出土鏡について検討する前に、素文鏡の分類と意義に関する研究についてまとめ、その問題点を整理する。

(1) 分類に関する研究

今平利幸・今井堯・小野本敦の研究があげられる。今平利幸は栃木県茂原古墳群の報告で古墳時代から古代の素文鏡を検討している（今平 1990）。素文鏡の鈕を「A類 太い鈕（平面形が円形および長方形）、B類 扁平な鈕」とし、縁を「I類 三角縁もしくはそれに近いもの、II類 平縁もしくはそれに近いもの」とに分け、鈕と縁を組み合わせて素文鏡の分類を行った。古墳時代前期はA II類が多く、中期に全ての分類がそろい、後出するものほどB類の扁平な鈕が増えると指摘する。

今井堯は中・四国地方の古墳時代小型仿製鏡の研究を行い、その中で素文鏡の分類を行っている。完全に無文のものを素文鏡1類、内区無文のものを素文鏡2類とした（今井 1991）。

小野本敦は古代の素文鏡を中心に考察している（小野本 2013）。素縁で、鈕が板状のものをA類、三角縁で、鈕に厚みがあるものをB類としている。A類は鈕孔を穿孔し、B類は范に中子をおいて鈕孔を製作すると指摘している。さらにA類は鈕と鏡面の接合方法に基づいてA1式～A4式に細分している。A1式・A2式は鈕と鏡体を一体で製作し、A2式はA1式より反りが弱いとする。A3式・A4式は鈕と鏡体を別々に製作し、A3式は接着、A4式は挿しこみで接合させると述べる。また、古墳時代の素文鏡と古代の素文鏡の関係については、古墳時代と古代の素文鏡とは製作方法が異なることから、直接的な繋がりがないと推測している。

(2) 意義に関する研究

近藤滋・高倉洋彰・林正憲・今井堯・小野本敦による研究があげられる。高倉洋彰は弥生・古墳時代の小型仿製鏡が儀鏡化する過程について論じている。弥生時代の重圏文日光鏡系仿製鏡第Ⅲ型b類から、重圏文鏡・櫛歯文鏡・素文鏡の順で出現すると述べる。素文鏡などの4cm以下の小鏡の儀鏡的性格は弥生時代に準備され、古墳時代に入ると副葬品とは別の祭祀具としての性格をもつ鏡として定着したとする（高倉1995）。

林正憲は素文鏡・重圏文鏡・珠文鏡の検討を行い、庄内期から古墳時代前期は、これらの3鏡種は「素文鏡<重圏文鏡<珠文鏡」という関係で副葬品として選択されていたと考えている。ただし、いずれも古墳・集落・祭祀など様々な遺構から出土することから、選択の際に厳密な区分が行われていなかったと指摘する。古墳時代中期以降は、重圏文鏡が激減する一方で、珠文鏡・素文鏡の出土例が増加し、珠文鏡は古墳からの出土率が9割となり、素文鏡は集落および祭祀遺構からの出土率が著しく増加すると指摘している（林2005）。

今井堯は、素文鏡・重圏文鏡・珠文鏡は、大和・近畿部族同盟体からの配布によるものとする。副葬位置をみると頭位横をはじめとして、頭位周辺ないし胸部周辺が圧倒的多数であると指摘し、これは中国鏡や大型・中型仿製鏡とも同様の傾向であることから、小型仿製鏡の中の極小鏡もランクの低さは別として、権威のシンボルとして用いられたものであると述べている（今井1991）。

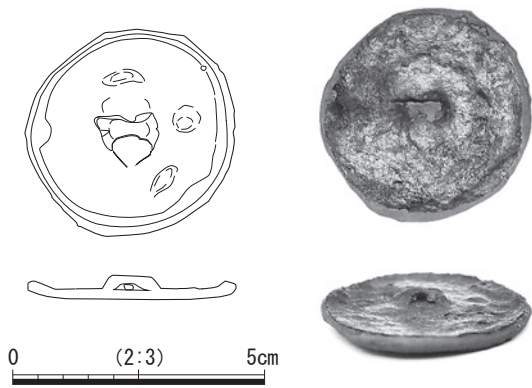
近藤滋は鳥取県長瀬高浜遺跡の報告で、素文鏡のみが単独で出土する事例には祭祀遺跡が多いと述べる。さらに奈良時代の石川県寺家遺跡や福井県松浜客館跡遺跡からも素文鏡および小型鉄鏡が出土することから、古代の素文鏡を用いた祭祀形態が古墳時代のものを引き継ぐ可能性を指摘する。また、この2遺跡は日本海沿岸の砂丘部に遺跡が立地する共通点から海への祭祀の可能性を述べている（近藤1980）。

小野本敦は古墳時代の素文鏡の特質について論じており、前期は集落内からの出土例が多く、中期以降になると集落から離れた祭祀遺跡からの出土割合が増加し、中期の遺跡には福岡県沖ノ島遺跡が含まれると述べる。中期になると素文鏡の出土する場所に変化があることから、時期差による遺跡の違いがあるのではないかと指摘する（小野本2013）。

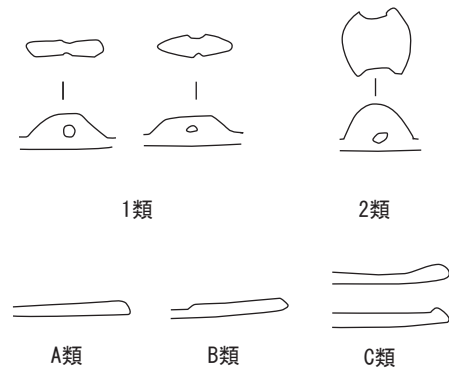
素文鏡の出土地点から儀器に特化した鏡とする意見や、古墳からの出土例を評価し、大型鏡や中国鏡と同様に権威のシンボルとして配布されたという意見もある。この点については、素文鏡の分類ごとの検討が必要であろう。また、古墳時代の素文鏡と古代の素文鏡とは関係があるのか否かという点も意見が分かれており、再検討の必要がある。

3. 南庄遺跡出土鏡の紹介

ここでは、南庄遺跡出土鏡の特徴について述べる。鏡面・鏡背面は褐色を呈する。全体的に鋳あがりはやや悪く、第3図の実測図右上では巣がみられる。鈕の周辺に直径5mm、高さ0.5mmほどの高まりが数か所みられるが、不明瞭であり文様であるのか否かを判断することはできない（第3図）。鏡面は研磨されている。文様を確認できないので、鏡式は素文鏡とする。



第3図 南庄遺跡出土素文鏡
(徳島市立考古資料館所蔵、筆者実測・写真撮影)



第4図 素文鏡の分類
(筆者作成)

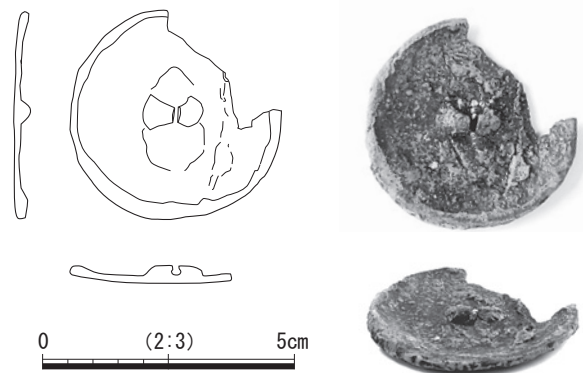
鏡の面径は 4.13 ~ 4.16 cm と正円ではない。鏡の厚みは 2 mm 弱である。反りは 2mm、重量 15g である。錆のためか縁は全体的に剥離している。縁の端部は斜縁状に突出し、縁は厚さ 2.7 ~ 3.1 mm である。鈕は鼻鈕である。鈕は長さ 1.2 cm、鈕は中央で幅約 3 mm、端で幅 5 ~ 6 mm である。鈕の高さは鏡背面から約 2 mm で、鈕の上面は扁平である。鈕孔は幅 1.5 mm、高さ 1.0 mm である。

本鏡は今平利幸による分類の B II 類である。筆者も鈕と縁によって素文鏡の分類を行った(第4図)。鈕は 2 つに分け、鼻鈕 1 類、円鈕 2 類とした。縁は 3 つに分類した。外区はなく、平縁のものを A 類、外区があり、平縁のものを B 類、外区はなく、縁が斜縁状や三角縁状に突出するものを C 類とした。鈕と縁の組み合わせのうち確認できるものは、1A 類・1C 類・2A 類・2B 類のみである。本遺跡出土例は 1C 類に相当する。なお、1C 類は 5 遺跡 7 面を確認している。

4. 類似する資料

本鏡の特徴は正円ではないこと、縁が突出すること、鏡背面が研磨されていないこと、鈕が鼻鈕となることである。筆者は 1C 類の中でも特に本鏡と類似する素文鏡として、岡山県下湯原 B 遺跡出土例、静岡県洗田遺跡出土例を提示する。大谷古墳例については平面形が正円で、縁は三角縁状に近いことから、先に提示した 3 面とはやや異なると考えている。以下、岡山県下湯原 B 遺跡、静岡県洗田遺跡とそれぞれの鏡の特徴について紹介する。

岡山県真庭市下湯原 B 遺跡 (第5図) 下湯原 B 遺跡 (内藤編 2002) からは古墳時代後期の竪穴住居跡、奈良時代・中世・近世の遺構や遺物が確認されている。素文鏡 1 面は、竪穴住居跡 9 の南西隅の覆土から出土している。ほ



第5図 下湯原 B 遺跡出土素文鏡
(岡山県古代吉備文化財センター所蔵、筆者実測・写真撮影)

かには土製模造鏡・須恵器・土師器が出土している。竪穴住居跡9の年代は出土遺物から6世紀後半と報告される。また、竪穴住居跡9は竪穴住居跡10に切られている。竪穴住居跡10からは、土師器・須恵器・手捏ね土器が出土しており、所属時期は、6世紀末～7世紀と報告される。

素文鏡の実見・観察を行っている。一部は欠損しており、一部錆におおわれている。鏡背面に研磨はみられず、わずかに凹凸がみられるが、文様か否かは判断できない。鏡の面径は4.10～4.15cmであり、正円ではない。縁の厚みは2.4～2.8mm、反りは1mm、現重量9g、鈕孔径は1mm程度である。縁は斜縁状に突出している。

静岡県下田市洗田遺跡 洗田遺跡は三倉山山麓に位置する祭祀遺跡である（大場ほか1938、堀田・川合1939）。A～C地点の調査が行われ、C地点北側斜面の地下10cmの所から単独で素文



第5図 洗田遺跡出土素文鏡 (S=2:3)
(堀田・川合1939より引用)

鏡1面が出土している。全調査地点の出土遺物としては、滑石製有孔円板・滑石製勾玉・滑石製剣形品・滑石製白玉・滑石製管玉、土製模造鏡・土製勾玉・土製丸玉・土製管玉・土製円板・手捏ね土器・須恵器・土師器・鉄器片・珠文鏡がみられる。遺跡の所属時期は5～6世紀と報告されている。

素文鏡の面径は4.3cmである。鏡の平面形は報告書等で見ると、正円ではなく、一部欠損している。鏡背面の研磨は確認できず、わずかに凹凸がみられる。縁は断面図（第5図）では斜縁状に盛り上がっている。

3遺跡の時期を比較すると、岡山県下湯原B遺跡は6世紀後半と報告され、静岡県洗田遺跡は5～6世紀と報告されている。南庄遺跡は6世紀以降であることから、これらの2遺跡の時期と近い時期と考えられる。以上のことから、縁が突出する素文鏡1C類については古墳時代中期から後期の時期に収まると判断できる。

鏡の面径を比較すると、これらの素文鏡は面径4.1～4.3cmの間に収まることに注目したい。出土地域が異なる3面ではあるものの、縁の形状と面径が類似することから、同じ工房で製作された可能性を指摘しておきたい。

ここで南庄遺跡の位置する四国地方から出土した素文鏡を紹介すると、愛媛県高橋仏師2号墳例と香川県居石遺跡例の2面を挙げることができる。前者は鼻鈕で平縁の1A類であり、後者は円鈕で平縁の2B類である。四国地方において南庄遺跡出土例と類似する資料は認められないことを指摘しておきたい。

5. 南庄遺跡出土素文鏡の意義

先述したように素文鏡の鈕は2種類に大別できる。一つは鼻鈕、一つは円鈕である。鼻鈕の素文鏡は、平縁となる1A類と、南庄遺跡のように縁が突出し、斜縁状や三角縁状となる1C類とに分かれる。1A類は13遺跡21面であり、1C類は5遺跡7面を確認している。

出土時期については素文鏡1A類は、鳥取県青谷上寺地遺跡例において弥生時代後期の出土事例がみられるのに対して、1C類は古墳時代中期～後期の洗田遺跡例が最も古い事例となる。このことから、縁の突出しない1A類の方が古くから生産されている形態であり、その後、縁が突出する1C類が派生

したと考えられる。なお、円鈕の2類は古墳時代前期から確認され、中期になると減少し、後期にはほぼ見られなくなる。

鼻鈕の素文鏡の出土遺跡の種類を確認すると、縁が突出する1C類は、5遺跡のうち1遺跡は古墳で、4遺跡は祭祀遺跡・集落遺跡である。平縁の1A類の出土遺跡については、13遺跡のうち2遺跡は古墳で、それ以外の11遺跡は祭祀遺跡・集落遺跡である。以上のことから、鼻鈕の素文鏡については、最終的にその多くは墓の副葬品とはならず、祭祀遺跡・集落遺跡において使用され、廃棄される遺物として認識されていたと判断する。

古墳時代の素文鏡の中で、縁の突出する1C類は、古代の素文鏡との形態的な類似性が認められる。古代の鏡との類似点は、鼻鈕で、縁が突出する点である。さらに、筆者は、古墳時代の南庄遺跡出土鏡・岡山県下湯原B遺跡・静岡県洗田遺跡例については中子を設置していると判断しており、この特徴は、古代の素文鏡B類（小野本 2013）である石川県寺家遺跡や福井県松浜客館跡遺跡出土鏡と共通すると考えている。これらの素文鏡が面径4.1～4.6cmである点も、1C類である南庄遺跡・下湯原B遺跡・洗田遺跡出土例と共通する点である。以上のことから、奈良時代の素文鏡の一部は、古墳時代の素文鏡が祖形となる可能性を指摘したい。ただし、これらの小型の古代の素文鏡が祭祀遺跡・寺院・工房にて出土（小野本 2013）する点からみると、古墳時代の素文鏡にみられる副葬品としての機能は失われたものと考えられる。

ま と め

今回、南庄遺跡出土素文鏡の検討を行った。本鏡と類似する洗田遺跡例と下湯原B遺跡例とを比較した結果、これら3面は、形態的特徴から同時期に同じ工房で生産された可能性を考えるにいたった。出土状況については、いずれも土壙墓や古墳から出土しておらず、集落遺跡や祭祀遺跡にて最終的に廃棄されている状況から、使用方法も共通していたと考えられる。古代の素文鏡との関係については、南庄遺跡などの古墳時代の素文鏡が、一部の古代の素文鏡の祖形となった可能性を述べた。

なお本論文は1C類を中心とした検討となっている。その他の分類や素文鏡全体の編年や意義については別稿にて述べたい。

謝辞

本稿は2014年9月に広島大学大学院文学研究科に提出した博士論文の一部に加筆したものである。論文作成においては古瀬清秀先生をはじめ、竹広文明先生、野島永先生からご高配賜りました。また本稿の内容は2012年度広島史学会考古部会にて発表した成果の一部であり、席上では多くの方々よりご助言いただきました。資料調査および論文執筆の過程におきましては、諸機関および多くの皆様からご助言いただきました。記して感謝の意に変えさせていただきます。岡山県古代吉備文化財センター、徳島市立考古資料館、一山 典、大栗美菜、實盛良彦、端野晋平、松尾佳子、村田昌也（敬称略、五十音順）。

参考文献

- 今井 堯 1991 「中・四国地方古墳出土素文・重圈文・珠文鏡—小形倭鏡の再検討 I—」『古代吉備』第13集、古代吉備研究会、1-26頁
- 今平利幸 1990 「大日塚古墳出土の小型素文鏡について」『下野茂原古墳群』宇都宮市教育委員会、177-187頁
- 小野本 敦 2013 「素文鏡考—二宮神社境内出土鏡をめぐって—」『技術と交流の考古学』（株）同成社、223-234頁
- 近藤 滋 1980 「長瀬高浜遺跡出土の小形素文鏡」『長瀬高浜遺跡Ⅲ』財団法人鳥取県教育文化財団、24-26頁
- 高倉洋彰 1995 「弥生時代小形仿製鏡の儀鏡化について」『居石遺跡』高松市教育委員会、147-163頁
- 林 正憲 2005 「小型倭鏡の系譜と社会的意義」『待兼山考古学論集—都出比呂志先生退任記念—』大阪大学考古学研究室、267-290頁

参考報告書

徳島県南庄遺跡

- 大橋育順・木村哲也編 2010 『名東遺跡・南庄遺跡』徳島県教育委員会・財団法人徳島県埋蔵文化財センター
- 勝浦康守 1995 「南庄遺跡発掘調査概要」『徳島市埋蔵文化財発掘調査概要』5、徳島市教育委員会、15-22頁
- 徳島市教育委員会編 1986 『第7回埋蔵文化財資料展 阿波を掘る』
- 徳島市教育委員会編 1987 『第8回埋蔵文化財資料展 阿波を掘る』
- 徳島市教育委員会編 1988 『第9回埋蔵文化財資料展 阿波を掘る』
- 徳島市教育委員会編 1989 『第10回埋蔵文化財資料展 阿波を掘る』
- 徳島市教育委員会編 1995 『第15回埋蔵文化財資料展 阿波を掘る』
- 徳島市立考古資料館編 2008 『古代のまつりと信仰』
- 三宅良明 1995 「南庄遺跡発掘調査概要」『徳島市埋蔵文化財発掘調査概要』5、徳島市教育委員会、1-14頁
- 森 直樹編 1989 『南庄遺跡』徳島県教育委員会

岡山県下湯原遺跡

- 内藤善史編 2002 『下湯原B遺跡 藪途山城跡』岡山県教育委員会

静岡県洗田遺跡

- 大場磐雄・佐藤民雄・江藤千萬樹 1938 「南豆洗田の祭祀遺跡」『考古学雑誌』第28巻第3号、日本考古学会、176-211頁
- 堀田美桜男・川合治栄 1939 『加茂郡朝日村吉佐美小字溝の上（洗田）原史時代祭祀遺蹟』静岡県史蹟名勝天然紀念物調査報告第13集、静岡県

第Ⅱ部

2014年度の業務・活動報告

第1章 常三島遺跡地域創生・国際センター新営に伴う 試掘調査

第1節 地理的・歴史的環境と既往の調査

常三島遺跡周辺の地理的・歴史的環境と既往の調査については、既刊の報告書等（定森編 2005、北條・定森編 2006、端野 2015 など）で詳述されているため、ここでは概要を記すこととする。

本遺跡は、徳島市南常三島町に所在し、四国東半部を紀伊水道に向けて東流する吉野川河口付近のデルタ地帯に位置する（第1図）。本遺跡の南西に隣接する城山は塩基性片岩で形成され、その麓には縄文時代の海蝕痕と、鳥居龍蔵が調査を行った縄文時代後・晩期の城山貝塚が存在する。奈良時代には、吉野川河口付近に阿波国の条里が存在したことが文献記録にみられるが、今のところこれらは発掘調査で確認されていない。

豊臣秀吉の四国平定によって、1585（天正13）年、蜂須賀家政が阿波国に入部した。これ以降、中州の埋め立てなどによって、現在の徳島城を中心とした城下町建設が開始される。絵図や文献史料から、本遺跡は中・下級武士の屋敷地であることがわかる。また、本遺跡南東部の本学工学部付近には17世紀前半から中頃にかけて、徳島藩の初期船置所「安宅島」が存在したと推定される。本調査室はこれまで20次にわたる発掘調査を実施し（第2図）、上記の絵図・文献史料による記録を実証する成果をあげている（定森編 2005、北條・定森編 2006、端野 2015 など）。なお、本試掘調査は、常三島遺跡としては第21次調査にあたる。

明治時代になると、この地一帯は、江戸時代の街路区画が残されたまま急速に水田化した後、徳島県尋常師範学校附属小学校が設置された。大正時代には徳島大学工学部の前身である徳島高等工業学校が設置されることとなる。その後、太平洋戦争を経て、戦後まもなくしてから徳島大学常三島キャンパスが設置され今日に至っている。

第2節 調査の概要

1. 調査にいたる経緯

常三島キャンパスの南西に地域創生・国際センター（現・地域創生・国際交流会館）の新営が計画された。安政年間（1854～1860年）における徳島城下町の武家屋敷地を示した『御山下島分絵図』（個人蔵、平井・根津編 2001）と現在の地図を重ね合わせると、建設予定地は「常三島」地区とその南側に流れる助任川の境界付近に位置することがわかる。今回は、居住区の南端およびこれに関連する遺構が検出される可能性があったため、試掘調査を実施した。



1. 常三島遺跡（常三島キャンパス） 2. 新蔵遺跡（新蔵キャンパス）
 ⑭. 常三島遺跡第14次調査（総合グラウンド管理舎・器具庫の配水管改修）地点
 [国際航業株式会社調製『徳島市全図2』をもとに作成]

第1図 常三島遺跡と周辺の遺跡（端野 2015 より引用・改変）

2. 調査体制

調査主体 国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室（室長・端野晋平）

調査担当 端野晋平・三阪一徳（埋蔵文化財調査室・助教）

調査補助 古川裕美（施設マネジメント部・技術補佐員（当時））

調査期間 2014年5月28日～6月2日

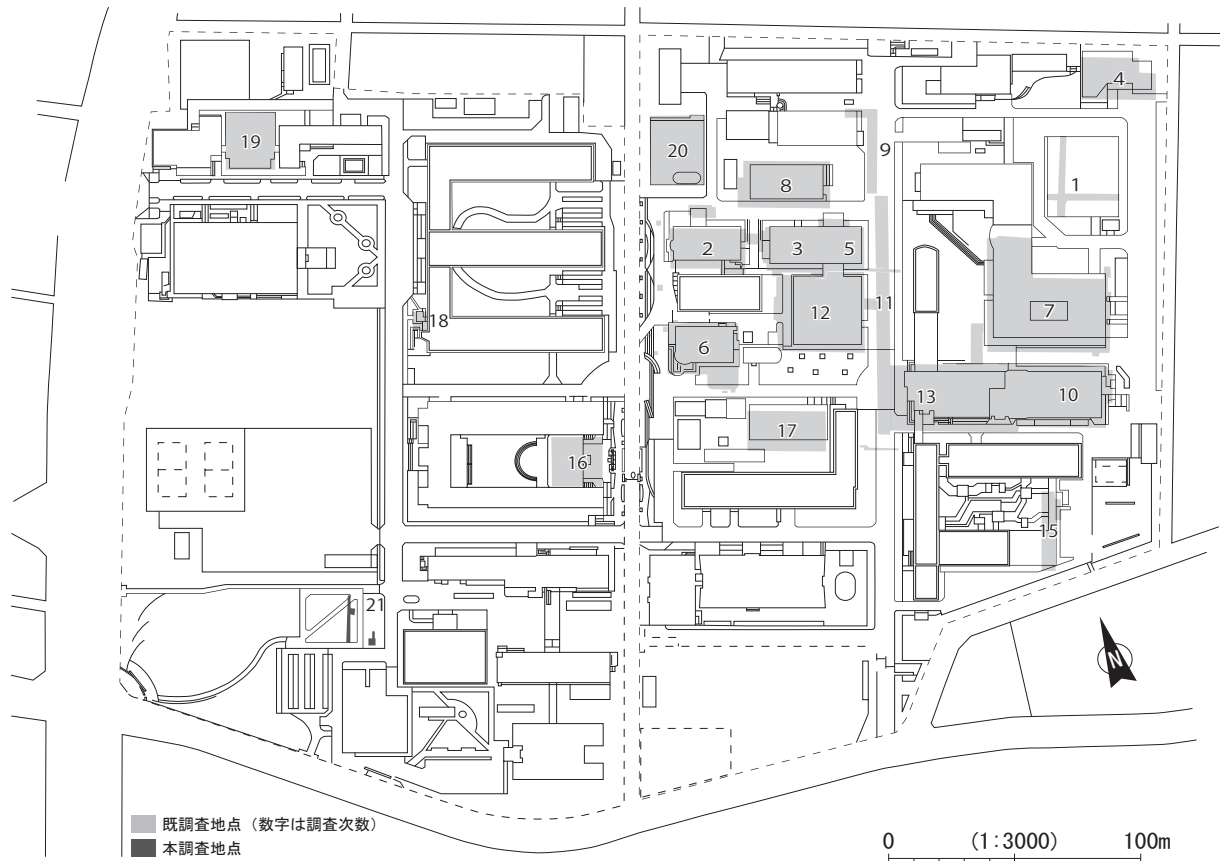
調査地点所在地 徳島県徳島市南常三島町1丁目1

調査面積 約40 m²

3. 調査の経過

地域創生・国際センター建設予定地における遺跡の広がりを確認するため、建設範囲に南北20 m、東西2 mのトレンチを東西2か所設定し、試掘調査を実施することとした。なお、東側をA区、西側をB区とした（第3図）。

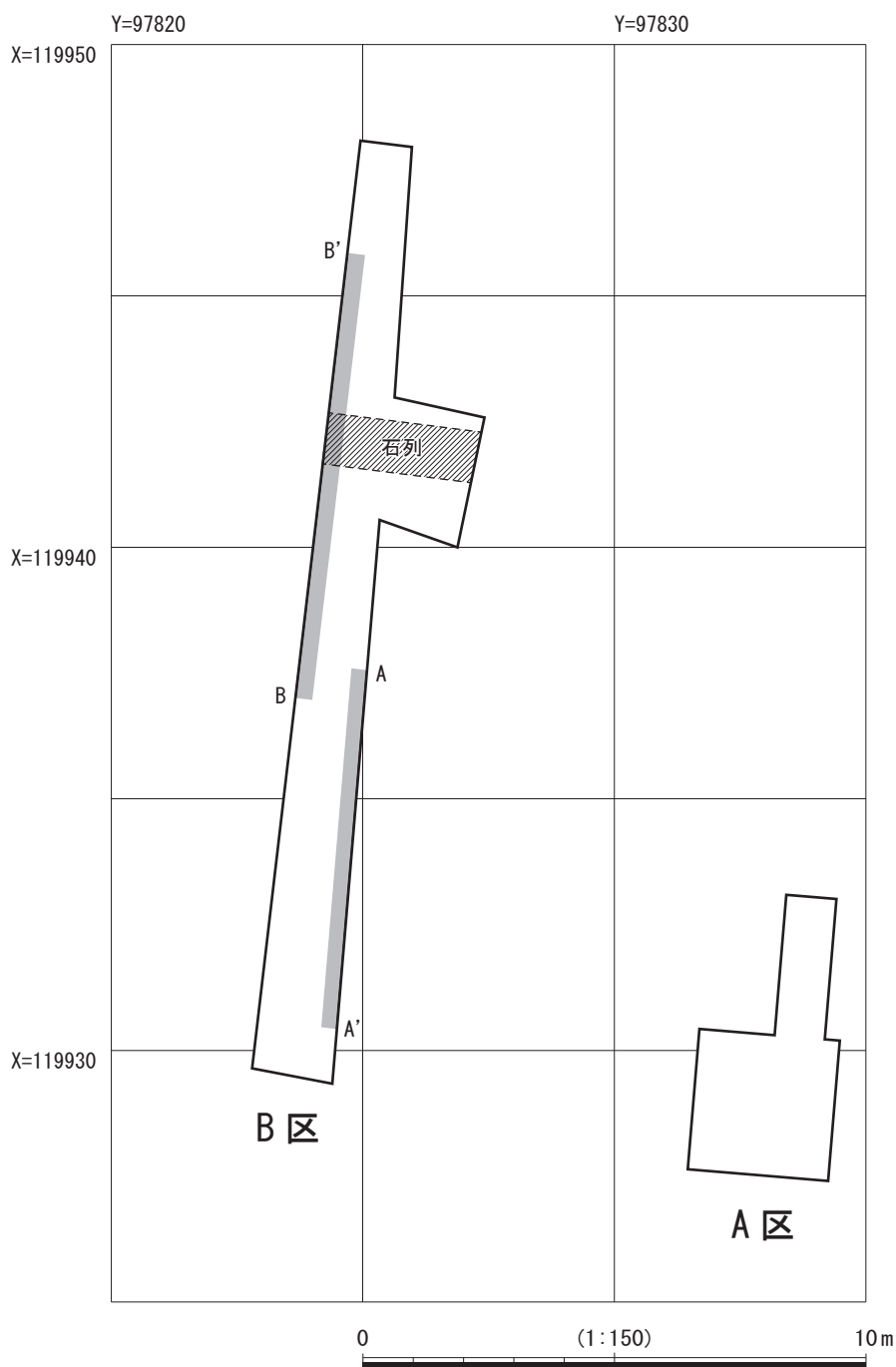
2014年5月28日に調査を開始した。まず、A区の南側から重機による掘削を行ったが、現在使用



- | | | |
|------------------------------|---|----------------------|
| 1. 工学部実習棟新営 | 9. 共同溝設置 | 17. 工学部総合研究棟改修 |
| 2. 地域共同研究センター新営 | 10. 工学部共通講義棟新営(共通講義棟Ⅰ期)、
共同溝設置(Ⅱ-4区) | 18. 総合科学部1号館エレベーター設置 |
| 3. 工学部光応用工学科棟新営 | 11. 共同溝設置(Ⅱ-1・2区) | 19. 地域連携プラザ新営 |
| 4. 工業会館新営 | 12. 工学部総合研究実験棟新営 | 20. フロンティア研究センター新営 |
| 5. 工学部光応用工学科棟新営(追加) | 13. 工学部総合教育研究棟新営(共通講義棟Ⅱ期) | 21. 地域創生・国際交流センター新営 |
| 6. サテライト・ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー新営 | 15. 工学部実験研究棟(電気電子棟)改修 | *番号は調査回数も兼ねる。 |
| 7. 工学部機械工学科棟新営 | 16. 総合科学部3号館改修 | |
| 8. 総合情報処理センター新営 | | |

第2図 既往調査地点と本調査地点の位置

されている配管が多数埋設されており、これらが北側にも延びることが判明したため、本区の調査を終了した(写真1-1)。つぎに、B区の南側から重機による掘削を開始した。翌29日も引き続きB区南半を地表から2m程度掘削したところ、砂層の堆積が確認されたが、明確な遺構は検出されなかった。また、砂層が厚く堆積し、壁面の崩落が危惧されたため、B区南半に土留の矢板を設置することとした。30日は矢板の打ち込みが終了し、B区北半の掘削を行ったところ、盛土状の土層の堆積が確認された。また、標高0m付近で、東西方向の石列が検出されたため、石列部分の東側を南北3m、東西2mにわたり拡張し、石列が東西方向にのびることを確認した。6月2日は試掘トレンチの掘削を完了した。続いて、B区の東壁・西壁の精査および土層断面の実測を行った。西壁の土層断面を記録することとしたが、南半については壁面の崩落が著しく危険が伴ったため、東壁を記録することとした。同日、調査区およびその周辺の座標を測量し、調査を終了した。



第3図 調査地点平面図と土層断面の位置

4. 調査地点の区割り

建設予定範囲に南北 20 m ・ 東西 2 m のトレンチを東西 2 か所に設定し、東側を A 区、西側を B 区とした。ただし、配管の埋設状況や土層の堆積状況により、実際には A 区は南北 5.6 m ・ 東西 1.0 ～ 2.8 m、B 区は南北 18.6 m ・ 東西 1.0 ～ 3.1 m の範囲を調査した（第 3 図）。



1 A区 (南西から)



2 B区 (南から)

写真1 調査風景

5. 調査の概要

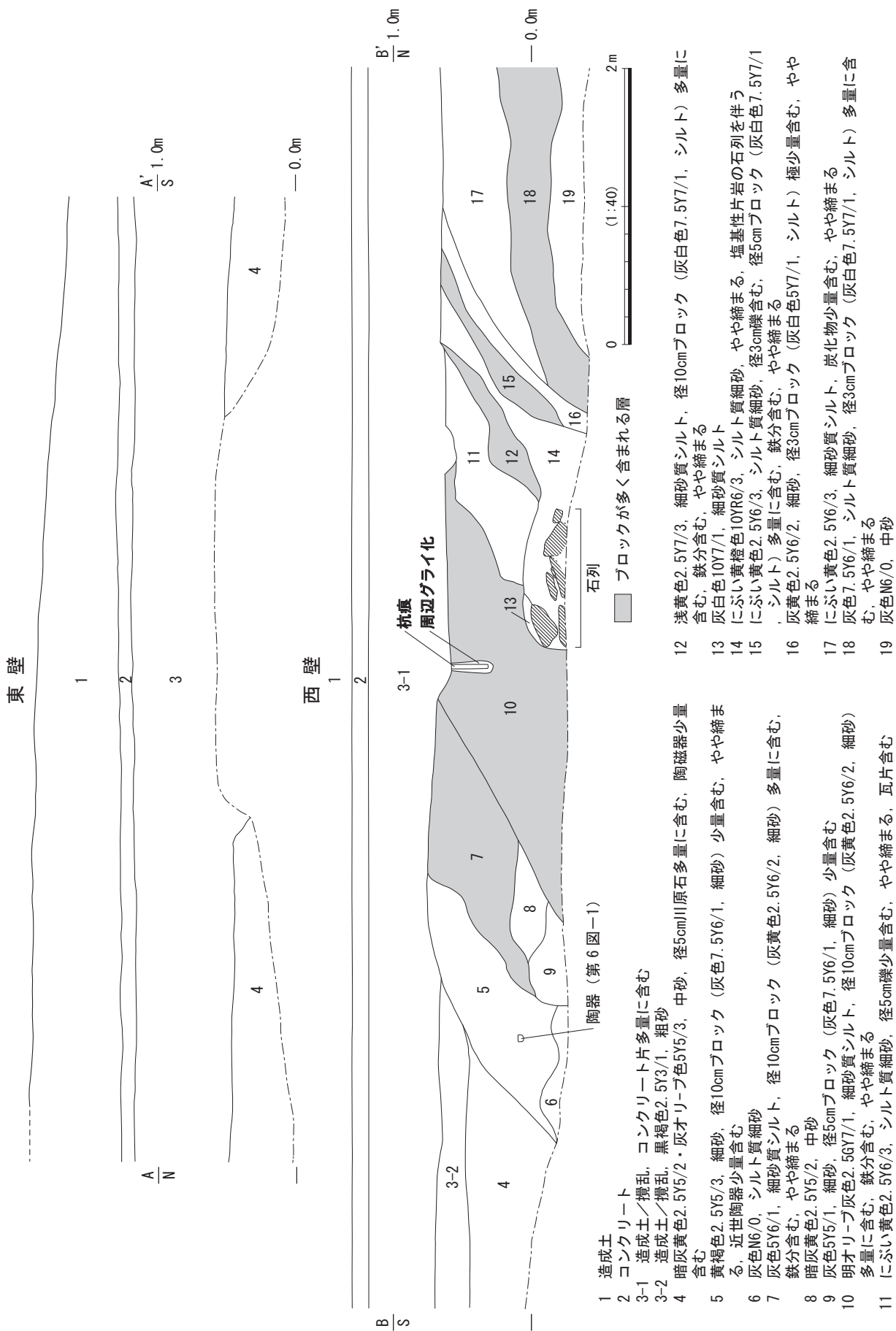
本調査室がこれまでに実施した発掘調査の成果や近世の絵図・文献史料から、現在の常三島キャンパス一帯には、近世の武家屋敷地が存在したことが明らかにされている。今回の調査では、城下町建設に伴うと考えられる盛土が確認され、これが近世「常三島」地区の南限を示している可能性が高いことがわかった。

第3節 調査成果

1. 層序

B区東壁A-A'・西壁B-B'土層断面(第3・4図、写真2)に基づき層序の説明を行う。

- 1 層：造成土である。上面の標高1.6～1.9m、厚さ30～70cmである。平成期に造られた本学「助任の丘」の盛土である。
- 2 層：コンクリートである。上面の標高1.3m、厚さ10cmである。近・現代に造成されたと考えられる。
- 3-1 層：造成土もしくは攪乱とみられる。上面の標高1.2m、厚さ40～60cmである。コンクリート片を多量に含む。近代以降に造成されたと考えられる。
- 3-2 層：造成土もしくは攪乱とみられる。黒褐色2.5Y3/1の粗砂である。上面の標高0.7m、厚さ20cmである。近代以降に造成されたと考えられる。
- 4 層：暗灰黄色2.5Y5/2・灰オリーブ色5Y5/3の中砂である。上面の標高0.4～0.5m、厚さ60cm以上である。径5cmの川原石を多量に含む。近世陶磁器を少量含む。近世以降の造成土と考えられる。
- 5 層：黄褐色2.5Y5/3の細砂である。径10cmのブロック(灰色7.5Y6/1の細砂)を少量含む。やや締まる。近世陶器を少量含む。



第4図 B区土層断面

- 1 造成土
- 2 コングリート
- 3-1 造成土/攪乱, コングリート片多量に含む
- 3-2 造成土/攪乱, 黒褐色2.5Y3/1, 粗砂
- 4 暗灰黄色2.5Y5/2・灰オリーブ色5Y5/3, 中砂, 径5cm川原石多量に含む, 陶磁器少量含む
- 5 黄褐色2.5Y5/3, 細砂, 径10cmブロック (灰色7.5Y6/1, 細砂) 少量含む, やや締まる, 近世陶器少量含む
- 6 灰色N6/0, シルト質細砂
- 7 灰色5Y6/1, 細砂質シルト, 径10cmブロック (灰黄色2.5Y6/2, 細砂) 多量に含む, 鉄分含む, やや締まる
- 8 暗灰黄色2.5Y5/2, 中砂
- 9 灰色5Y5/1, 細砂, 径5cmブロック (灰色7.5Y6/1, 細砂) 少量含む
- 10 明オリーブ灰色2.5GY7/1, 細砂質シルト, 径10cmブロック (灰黄色2.5Y6/2, 細砂) 多量に含む, 鉄分含む, やや締まる
- 11 にぶい黄色2.5Y6/3, シルト質細砂, 径5cm礫少量含む, やや締まる, 瓦片含む
- 12 浅黄色2.5Y7/3, 細砂質シルト, 径10cmブロック (灰白色7.5Y7/1, シルト) 多量に含む, 鉄分含む, やや締まる
- 13 灰白色10Y7/1, 細砂質シルト
- 14 にぶい黄橙色10YR6/3, シルト質細砂, やや締まる, 塩基性片岩の石列を伴う
- 15 にぶい黄色2.5Y6/3, シルト質細砂, 径3cm礫含む, 径5cmブロック (灰白色7.5Y7/1, シルト) 多量に含む, 鉄分含む, やや締まる
- 16 灰黄色2.5Y6/2, 細砂, 径3cmブロック (灰白色5Y7/1, シルト) 極少量含む, やや締まる
- 17 にぶい黄色2.5Y6/3, 細砂質シルト, 炭化物少量含む, やや締まる
- 18 灰色7.5Y6/1, シルト質細砂, 径3cmブロック (灰白色7.5Y7/1, シルト) 多量に含む, やや締まる
- 19 灰色N6/0, 中砂

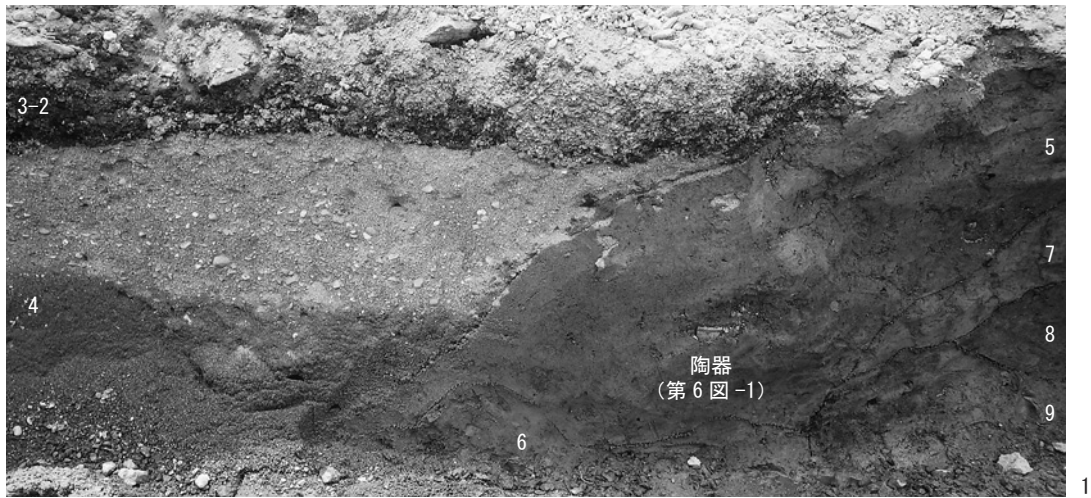


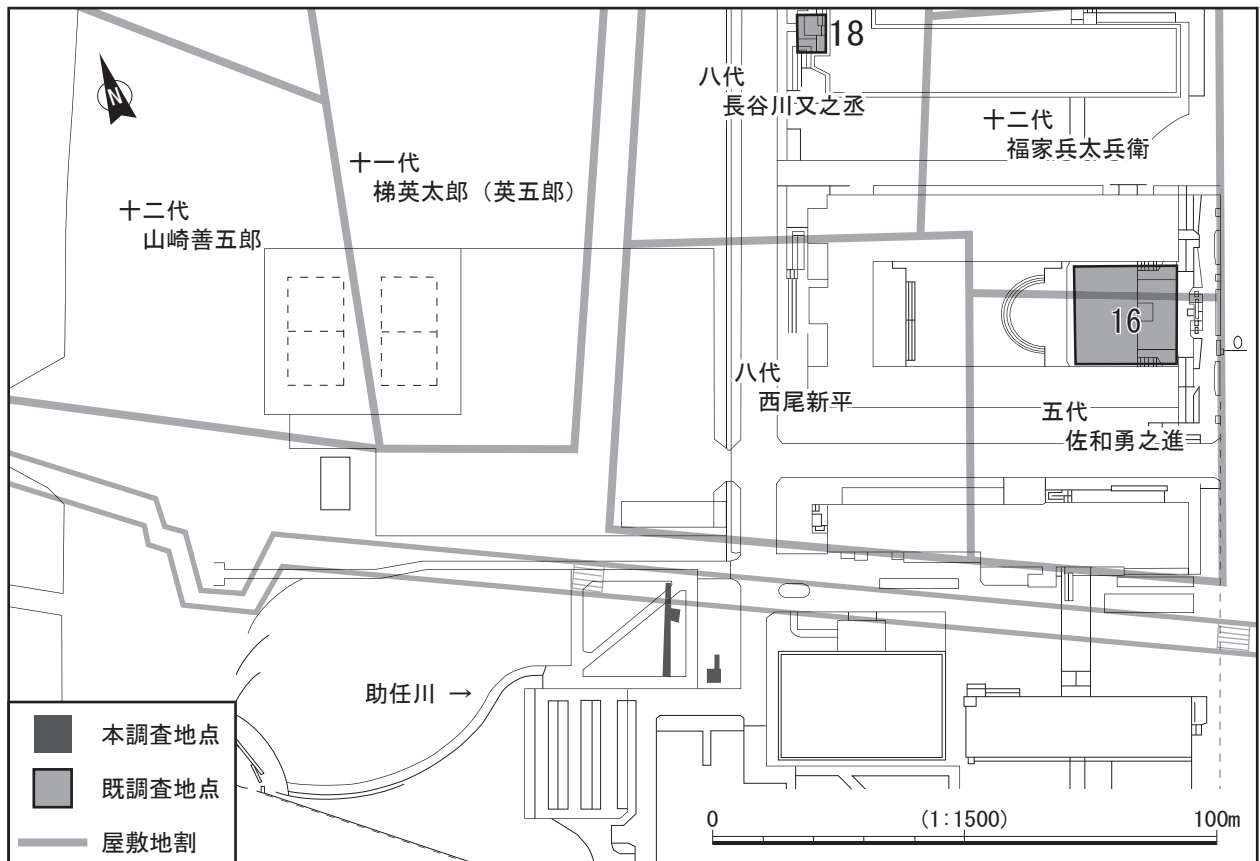
写真2 B区西壁B-B' 土層断面

- 6層：灰色 N6/0 のシルト質細砂である。
- 7層：灰色 5Y6/1 の細砂質シルトである。径 10cm のブロック（灰黄色 2.5Y6/2、細砂）を多量に含む。鉄分を含む。やや締まる。
- 8層：暗灰黄色 2.5Y5/2 の中砂である。
- 9層：灰色 5Y5/1 の細砂である。径 5cm のブロック（灰色 7.5Y6/1、細砂）を少量含む。
- 10層：明オリーブ灰色 2.5GY7/1 の細砂質シルトである。径 10cm のブロック（灰黄色 2.5Y6/2、細砂）を多量に含む。鉄分を含む。やや締まる。
- 11層：にぶい黄色 2.5Y6/3 のシルト質細砂である。径 5cm の礫を少量含む。やや締まる。瓦片を含む。
- 12層：浅黄色 2.5Y7/3 の細砂質シルトである。径 10cm のブロック（灰白色 7.5Y7/1、シルト）を多量に含む。鉄分を含む。やや締まる。
- 13層：灰白色 10Y7/1 の細砂質シルトである。
- 14層：にぶい黄橙色 10YR6/3 のシルト質細砂である。やや締まる。塩基性片岩による石列を伴う。
- 15層：にぶい黄色 2.5Y6/3 のシルト質細砂である。径 3cm の礫を含む。径 5cm のブロック（灰白色 7.5Y7/1、シルト）を多量に含む。鉄分を含む。やや締まる。
- 16層：灰黄色 2.5Y6/2 の細砂である。径 3cm のブロック（灰白色 5Y7/1、シルト）を極少量含む。やや締まる。
- 17層：にぶい黄色 2.5Y6/3 の細砂質シルトである。炭化物を少量含む。やや締まる。
- 18層：灰色 7.5Y6/1 のシルト質細砂である。径 3cm のブロック（灰白色 7.5Y7/1、シルト）を多量に含む。やや締まる。
- 19層：灰色 N6/0 の中砂である。地山であろうか。

5～18層は、斜めに堆積しブロックが多く含まれる層を伴う点から、盛土と推定される。B区北半において3・4層を除去した面から検出され、検出面の標高は-0.2～0.8mである。規模は現状で南北7.8m以上、厚さ1.0m以上が確認される。なお、調査範囲が狭く断定はできないが、19層は地山の可能性がある。

これらの層の堆積状況を見ると、大きく2つの層に分けられる。5・11・14・16・17層は黄褐色の細砂層であるのに対し、7・10・12・15・18層は黄褐色の砂層と灰色のシルト層がブロック状に混ざっている状態である。そして、両者がおおよそ交互に堆積している状況が観察された（第4図、写真2）。また、14層には最大長30～40cm程度の塩基性片岩によって形成された、幅南北1.0m程度、長さ東西3.0m以上の石列が確認された（第3図）。10層には杭痕がみられるが、本来の掘り込み面と所属時期は不明である。

後述するように、盛土と考えられる5～18層から出土した遺物はわずかであるが、18世紀後半～19世紀中頃の遺物のみみられ、近・現代のものは含まれないため、盛土の造成時期は近世である可能性が高いといえる。ここで、19世紀中頃の徳島城下町の様子が描かれた『御山下島分絵図』を現在の地図に重ね合わせたものをみると（第5図）、本調査地点は「常三島」地区とその南側を東流する助任川の境界部に位置していることがわかる。



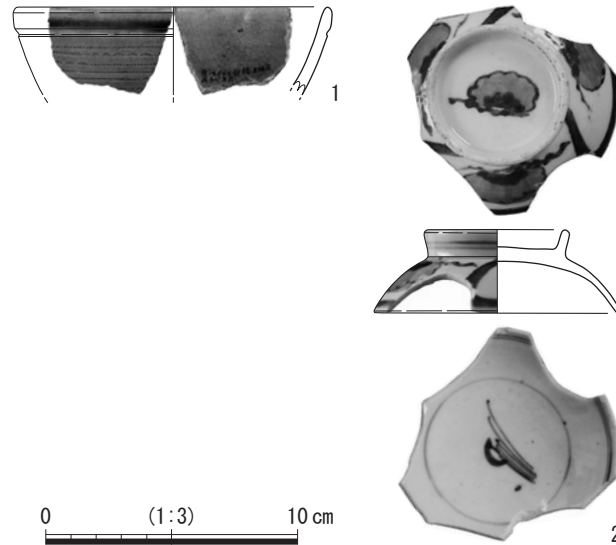
第5図 本調査地点と『御山下島分絵図』(安政年間、個人蔵)との重ね合わせ

上記の点をふまえると、盛土は武家屋敷の建設に際して造成されたものと推定される。石列の性格を特定することはできないが、土層の堆積状況からみて、盛土の土留としての機能が想定される。このほかに、盛土が複数回にわたって造成され、石列が露出していた時期があるとするれば、石列が護岸施設として機能していた可能性もあろうか。また、絵図によると、調査地点のやや西側に、助任川に降りる階段のような表現が認められる。石列が階段の一部であったことも推測されるが、現状では段状を呈しておらず、その可能性は低いといえよう。

2. 遺物 (第4・6図、写真2)

盛土と考えられる5層(第4図、写真2)から、瀬戸・美濃系陶器の鎧茶碗(第6図-1)が出土している。外面にはトビガンナの文様が施される。外面口縁部下の沈線より下には灰釉、沈線の上から内面にかけては緑釉が施されている。沈線部には釉薬はみられない。鎧茶碗は18世紀後半に出現し、19世紀中頃まで存続することが指摘されている(藤澤1998)。同じく盛土とみられる11層から平瓦片が出土しているが時期は不明である。

近世以降の造成土と考えられる4層からは、瀬戸・美濃系磁器碗の蓋(第6図-2)が出土している。形態的にみて広東形碗の蓋と考えられる。外面と摘み内に染付で松文が施されている。見込にも染付



番号	器種	法量 [cm]、() は復元径			絵付	釉薬	器面調整 (外/内)	備考	調査区	遺構	層位
		口径	底径	器高							
1	瀬戸・美濃系陶器・鎧茶碗	(12.3)	-	-	-	緑釉 灰釉	- / -	外面にトビガ シナの文様	B	-	5
2	肥前系磁器・広東形碗蓋	(9.6)	-	-	染付	透明	- / -	外面と摘み内 に松文	B	-	4

第6図 出土遺物

による文様がみられるが、モチーフは不明である。広東形碗は1780～1840年代に盛行することが指摘されている（大橋2004）。

3. ま と め

今回の調査では、近世の宅地開発に伴うと考えられる盛土の南端部が検出され、絵図から知られる「常三島」地区の南限が確認されたといえよう。ただし、この盛土が造成された細かな時期や石列の性格については、今後の検討課題となった。

（三阪一徳）

文献

藤澤良祐，1998．近世瀬戸村の窯業生産．瀬戸市史，陶磁史篇6．瀬戸市史編纂委員会，愛知，pp. 159-185．

端野晋平，2015．発掘調査の概要．国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室紀要1，121-143．

平井松午・根津寿夫（編），2001．徳島城下とその周辺，絵図図録第2集．徳島市立徳島城博物館，徳島．

北條芳隆・定森秀夫（編），2006．常三島遺跡2：工学部実習棟地点・地域共同センター地点，徳島大学埋蔵文化財調査報告書第3巻．国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室，徳島．

大橋康二，2004．世界をリードした磁器窯：肥前窯．新泉社，東京．

定森秀夫（編），2005．常三島遺跡1：工学部電気電子棟地点，徳島大学埋蔵文化財調査報告書第2巻．国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室，徳島．

第2章 石井地区生物資源産業学部豚舎新営に伴う 試掘調査

第1節 調査の概要

a. 調査地の所在地	徳島県名西郡石井町字石井 2201-1
b. 調査の目的	徳島大学生物資源産業学部豚舎新営に伴う試掘調査
c. 調査面積	5.6 m ²
d. 調査期間	2015年2月19日
e. 調査主体	国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室（室長・端野晋平）
f. 調査担当	端野晋平（調査主任） 脇山佳奈（埋蔵文化財調査室・特任助教） 三阪一徳（埋蔵文化財調査室・助教）

第2節 調査の経緯

2014年12月、国立大学法人徳島大学は、徳島県名西郡石井町所在の徳島県立農業大学校跡地（以下、石井地区と呼称する）での生物資源産業学部豚舎の新営を計画した。これまで石井地区の周辺では、南西側に高良古墳、北東側に利包古墳、山ノ神古墳、東側に弥生時代中期～後期の集落が検出された清成遺跡、北西側に古墳時代～中世の遺構が検出された井ノ元遺跡などが確認されている（第7図）。

新営予定地は石井地区の南側に位置し、「徳島県遺跡地図 石井」の遺跡番号112（弥生時代の集落）に示される埋蔵文化財包蔵地の範囲内に所在する。そこで、同地点においての埋蔵文化財の有無、包蔵層までの深度の確認を目的とした試掘調査を実施することとなった。

調査は、予定地の東寄りに試掘坑1か所（南北2.8m、東西2.0m）を設定し、調査員3名が担当した。試掘面積は掘削予定面積260m²の2.2%にあたる（第8図）。

第3節 調査の記録

1. 層序

本調査地点では、以下の5層を確認した（第9図）。

1層：黄灰色砂層。1～3mm大の石、1～10cm大の礫を多量含む。上面の標高は約11.7m、厚さは約10cmを測る。コンクリート舗装のための路盤と考えられる。

2層：青灰色粘質土層。グライ化。5mm大の石を少量含む。上面に1～3cm幅で鉄分の沈着が認められる。上面の標高は約11.6m、厚さは10～20cmを測る。近代の水田耕作土と考えられる。

3層：灰黄褐色土層。木片、木の枝を多量に含む。レンガ片1点が出土した。上面の標高は11.3～

11.5 m、厚さは40～60 cmを測る。近代の整地層と考えられる。

4層：褐灰色粘質土層。粘性が強く、木の根を多量に含む。上面の標高は約11.0 m、厚さは20～40 cmを測る。近代以前に形成された湿地環境を想定しうる。

5層：橙色土層。5～10 cm大の結晶片岩礫を多量に含む。上面の標高は10.6～10.7 mを測る。地山である。

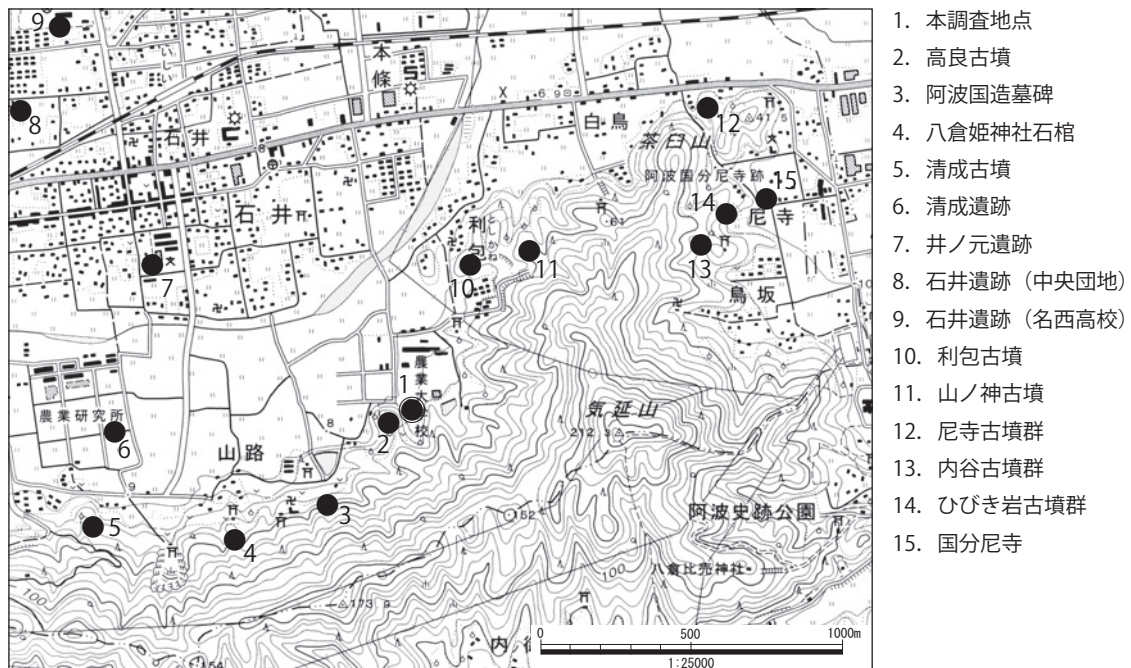
2. 遺構・遺物

本調査地点では遺構は確認されなかった。遺物は3層から近代のレンガ片1点が出土した。

第4節 ま と め

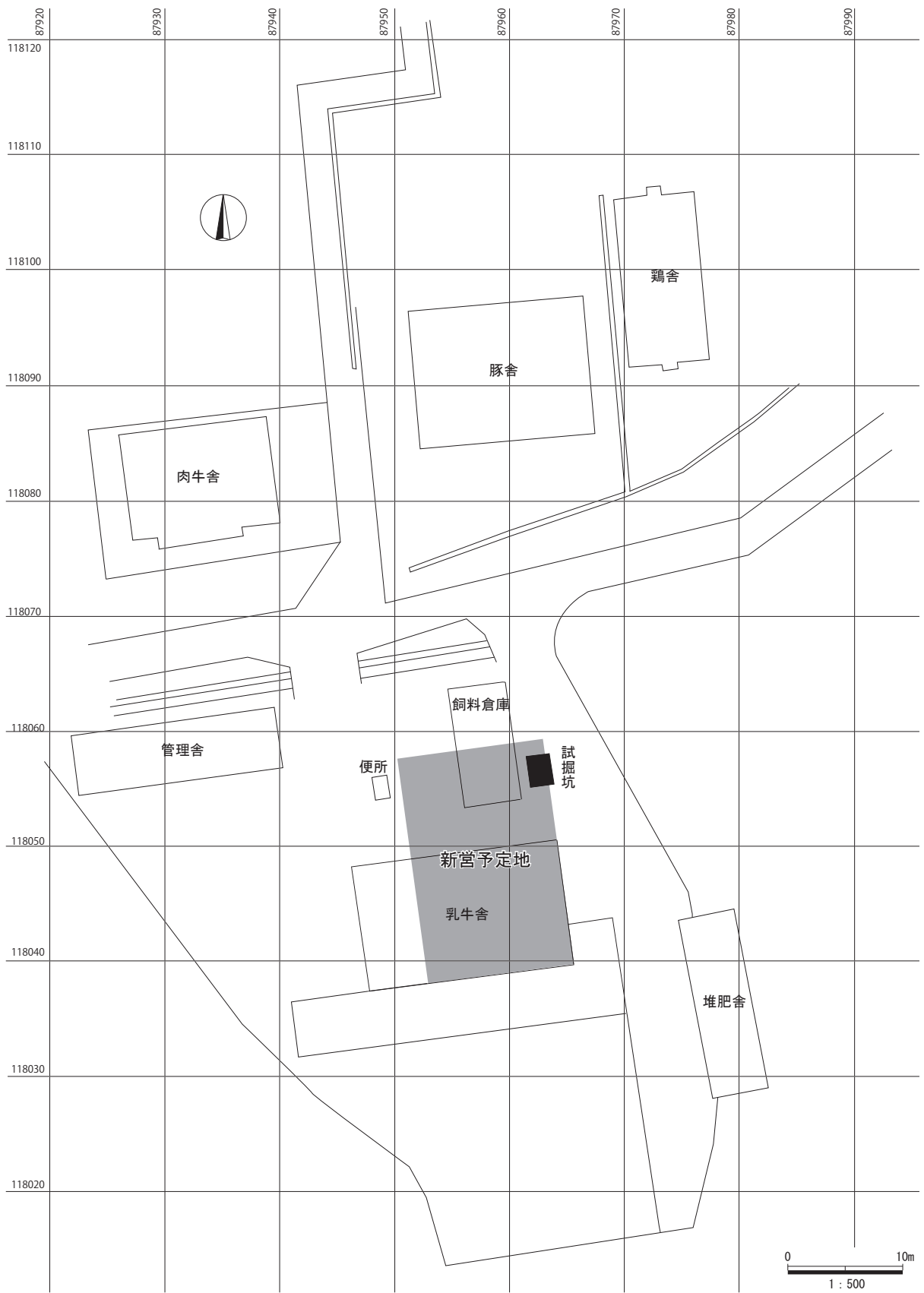
本地点では、近代になって、それまで湿地環境であったところに整地がなされ、水田として利用が始まったとみられる。「正式2万分1地形図 石井」（陸地測量部、明治29年測図）によれば、測図当時の本地点一帯は水田地帯であったことが分かり、これは調査所見と合致する（第10図）。その後、1967（昭和42）年の徳島県立農業大学校の新築移転に先立ち、さらなる土地のかさ上げと整備が行われたと考えられる。なお当初、懸念された弥生時代の遺構および包含層は検出されなかった。

（端野晋平）

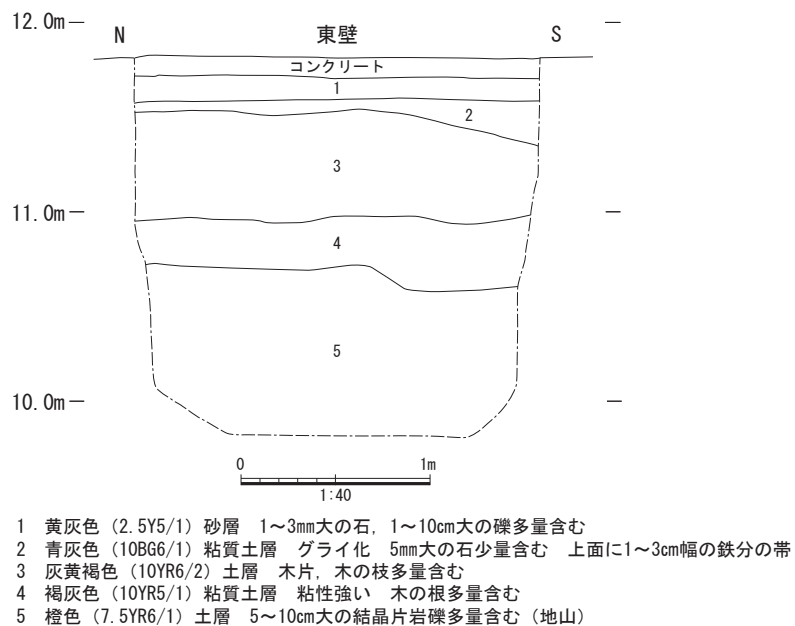


第7図 調査地点の位置

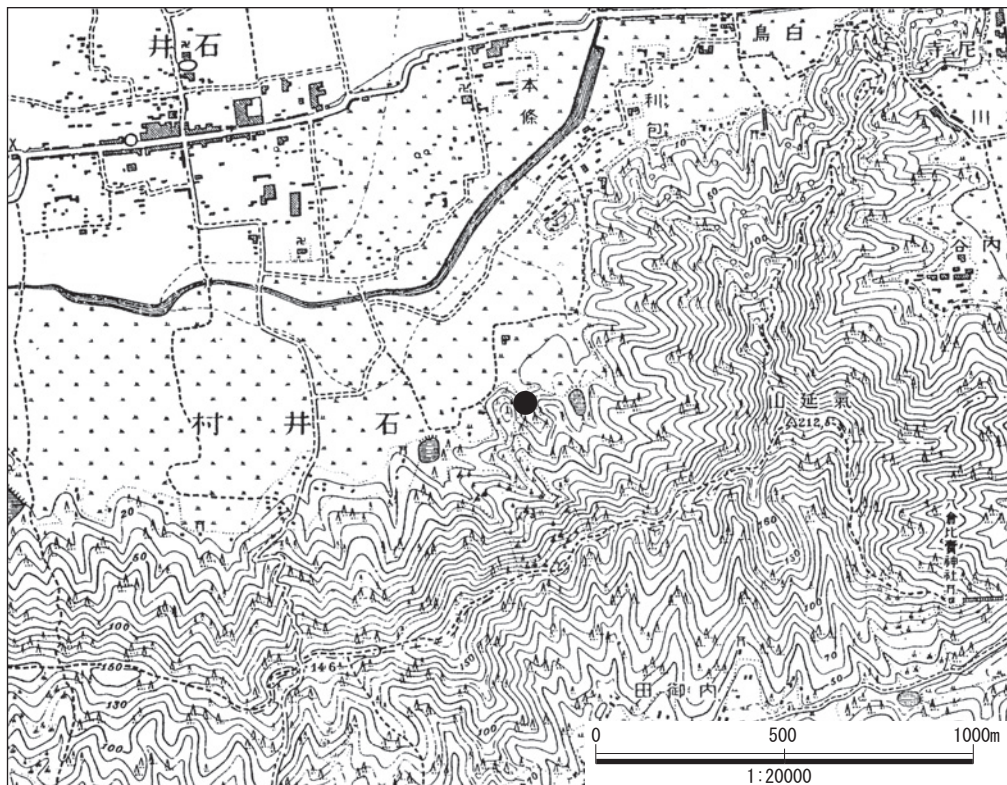
国土地理院「2万5千分1地形図・石井」より引用・改変



第8図 試掘坑の位置



第9図 土層断面図



第10図 明治29年における調査地点周辺の土地利用状況
陸地測量部「正式2万分1地形図・石井」より引用・改変

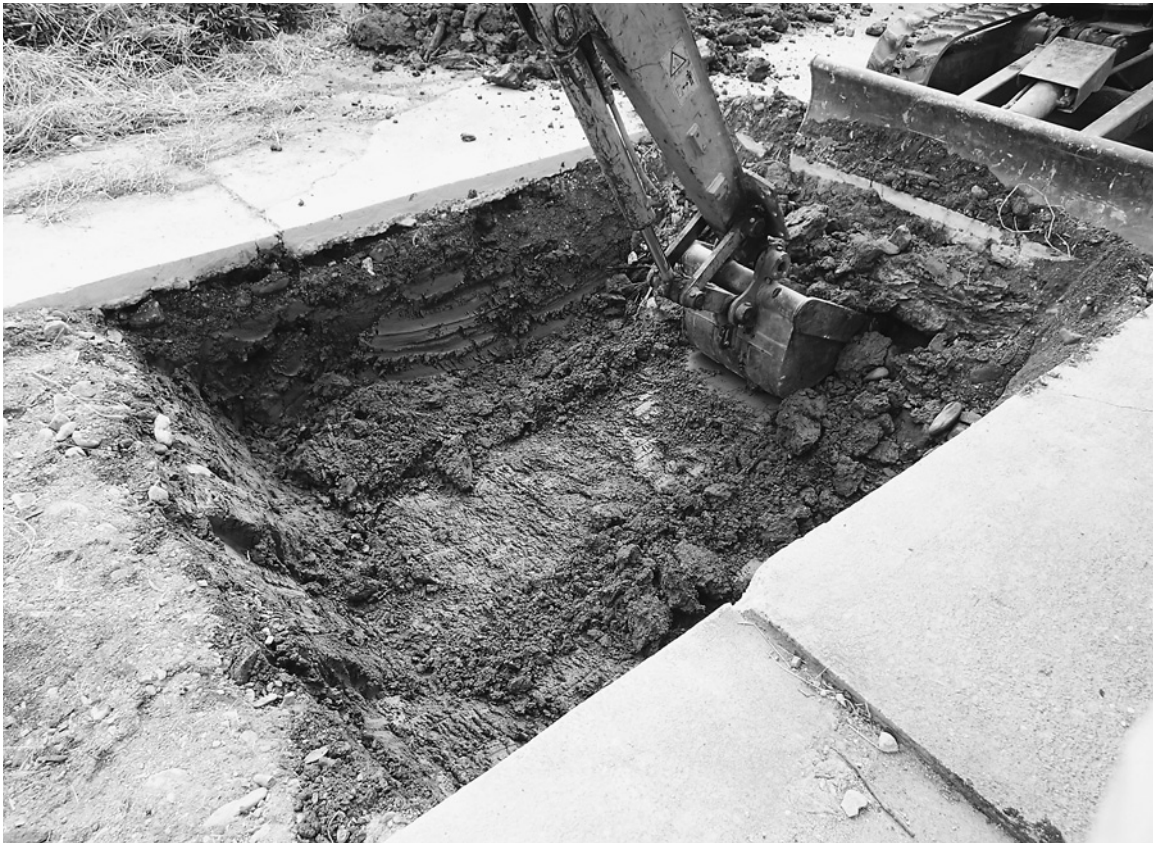


写真3 重機掘削風景

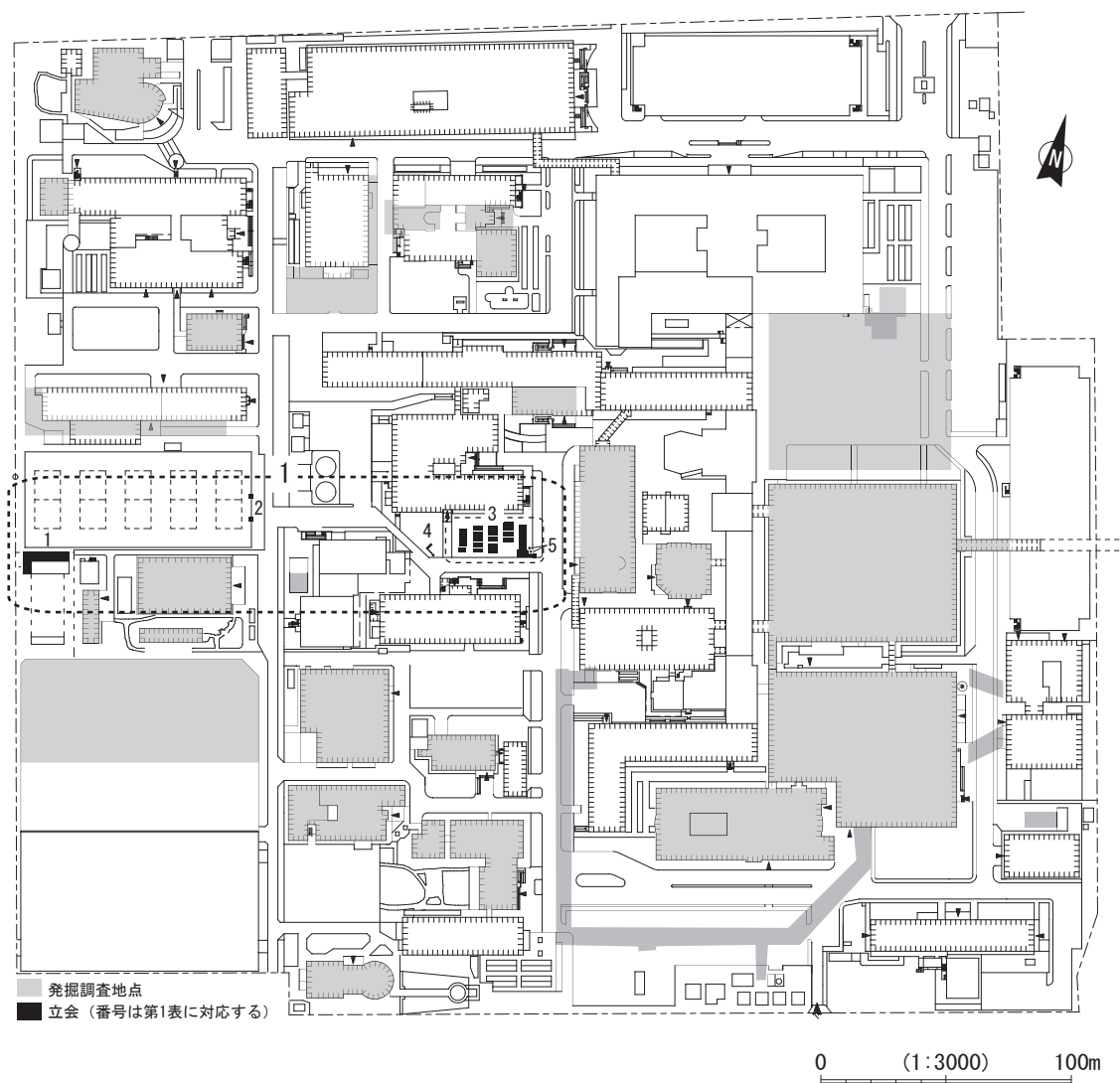


写真4 試掘坑東壁土層断面（西から）

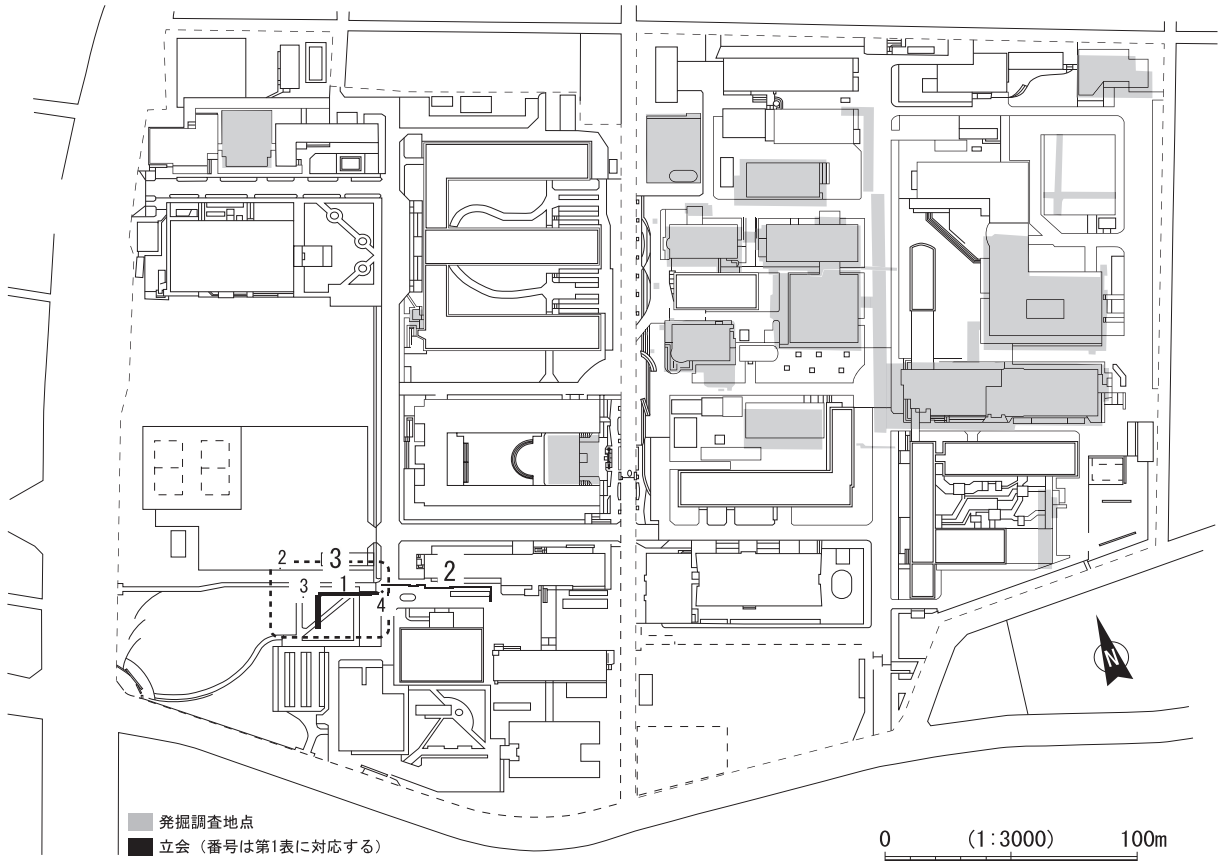
第3章 立会調査の概要

2014年度の立会調査は、蔵本地区（庄・蔵本遺跡）1件、南常三島地区（常三島遺跡）2件、計3件を実施した。調査地点と概要は第11・12図、第1表に示した通りである。

（脇山佳奈）



第11図 2014年度蔵本地区立会調査地点



第12図 2014年度南常三島地区立会調査地点

第1表 2014年度立会調査地点

地区	番号	工事名称	工事詳細	調査期間	掘削深度 (GL-m)	掘削範囲 (㎡)	造成土厚 (m)	内容	遺物	
蔵本	1	テニスコート改修その他工事	1	弓道場改修	14/11/4~6	0.7~0.8	86.8	0.70	近世水田層	陶磁器片
			2	テニスコート門扉	15/1/19	1.0	4.0	1.00	造成土内	-
			3	駐輪場基礎	15/1/27・28、2/4・9・14・20・23・24	0.5~0.6	154.6	0.50~0.60	造成土内	銃弾・煉瓦
			4	駐輪場街灯	15/2/14~15	1.3	5.6	1.10	青灰色粘土層	-
			5	駐輪場街灯	15/2/14~15	1.3	3.1	1.15	灰白色シルト層	-
南常三島	2	総合科学部地区都市ガス本管老朽化改修工事	管路	14/8/21~22、25・26	0.8	34.4	0.80	造成土内	陶磁器片	
	3	地域創生・国際センター新営その他機械工事	1	管路	14/9/1・3・5	1.2	75.9	0.90	細砂層	-
			2	外灯	14/9/8	1.0	0.2	-	造成土内?	-
			3	外灯	14/9/8	1.0	0.2	-	造成土内?	-
		地域創生・国際センター新営その他電気設備工事	管路	14/10/21	0.6	1.0	0.60	造成土内	-	



写真5 1-1 地点南壁 (北から)



写真6 1-2 地点北壁 (南から)



写真7 1-3 地点西壁 (東から)



写真8 1-5 地点東壁 (西から)



写真9 2 地点北壁 (南から)



写真10 3-1 地点南壁 (北から)



写真11 3-2 地点南壁 (北から)



写真12 3-4 地点南壁 (北から)

第4章 出土資料の整理・公開・活用

A 整理作業

- 1) 新蔵遺跡第1次調査（地域・国際交流プラザ新営地点）
- 2) 庄・蔵本遺跡第24次調査（藤井節郎記念医科学センター新営地点）
- 3) 庄・蔵本遺跡第25次調査（附属図書館蔵本分館増築Ⅱ期地点）
- 4) 庄・蔵本遺跡第26次調査（大塚講堂改修地点）
- 5) 庄・蔵本遺跡第27次調査（立体駐車場新営地点）
- 6) 庄・蔵本遺跡第28次調査（外来診療棟新営地点）
- 7) 庄・蔵本遺跡第29次調査（学生支援センター改修地点）
- 8) 常三島遺跡第3・5次調査（工学部光応用工学科棟新営地点）
- 9) 常三島遺跡第19次調査（地域連携プラザ新営地点）
- 10) 常三島遺跡第20次調査（フロンティア研究センター新営地点）

B 展示会

- 1) 平成26年度徳島大学埋蔵文化財調査室ミニ展示「江戸時代の常三島」 2014年7月1日～9月30日 徳島大学附属図書館本館3F資料展示室）

C 資料貸出

- 1) 徳島県立博物館常設展 2014年4月1日～2015年3月31日（継続） 庄・蔵本遺跡出土弥生土器・石器・玉類39点
- 2) 徳島県立博物館企画展「いただきま〜す！一食の生活史と自然誌ー」 2014年4月25日～6月8日 庄・蔵本遺跡出土炭化粃塊1点・炭化鱗茎付着土器2点
- 3) 徳島市立考古資料館春季企画展「とくしま稲作事始め」 2014年5月17日～7月13日 庄・蔵本遺跡出土石器6点・炭化粃塊1点、同遺跡写真資料6点
- 4) 国立歴史民俗博物館企画展示「弥生ってなに？！」 2014年6月16日～8月1日 庄・蔵本遺跡写真資料4点
- 5) 尼崎市立田能資料館特別展「弥生の食べもの」 2014年10月7日～12月7日 庄・蔵本遺跡写真



第13図 ミニ展示のポスター

資料 3 点

- 6) 横浜市歴史博物館企画展「大おにぎり展」2014年10月11日～11月24日 庄・蔵本遺跡写真資料 1 点
- 7) 海陽町立博物館企画展「海陽の歴史と文化～県南のあけぼのから大里古墳～」2015年2月27日～5月15日 庄・蔵本遺跡土器・石器・青銅器・玉類 28 点



写真 13 ミニ展示の開催風景

D 資料調査協力

- 1) 庄・蔵本遺跡 石庖丁未成品・弥生土器・異体字銘帯鏡片・銅鐸片：郡司早直・一山典（海陽町立博物館）2015年2月6日
- 2) 庄・蔵本遺跡第27次調査（立体駐車場新営地点）石製丸軈：藤川智之（徳島県埋蔵文化財センター）2015年2月18日
- 3) 庄・蔵本遺跡第27次調査（立体駐車場新営地点）弥生土器：永井宏幸（愛知県埋蔵文化財センター）2015年2月20日
- 4) 庄・蔵本遺跡第27次調査（立体駐車場新営地点）石器：原田幹（愛知県埋蔵文化財センター）2015年2月20日

E 出土資料の自然科学分析

- 1) 庄・蔵本遺跡第27次調査（立体駐車場新営地点）木製品保存処理：株式会社古環境研究所に依頼し、2015年3月完了。
- 2) 常三島遺跡第3・5次調査（工学部光応用工学科棟新営地点）火葬墓出土人骨クリーニング・分析：九州大学大学院比較社会文化研究院田中良之教授に依頼し、2014年8月実施。

（端野晋平）



写真 14 整理作業の風景

第5章 調査室員の研究教育実績

(1) 端野晋平 准教授

a. 論文

端野晋平、石崎曲り田遺跡住居群の系譜、国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室紀要1、国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室、徳島、3-31、2015年3月

b. 研究発表

端野晋平・三阪一徳・脇山佳奈、庄・蔵本遺跡第27次調査の成果、設楽博己教授（東京大学）科研費基盤研究(A)『植物・土器・人骨の分析を中心とした日本列島農耕文化複合の形成に関する基礎的研究』2014年度成果報告会、徳島大学蔵本会館、2015年3月23日

c. 報告書

端野晋平、平成26年度徳島県立農業大学校跡地内試掘調査概要報告書－国立大学法人徳島大学生物資源産業学部（仮称）豚舎新営地点－、国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室、徳島、2015年2月

端野晋平、基本層序、新蔵遺跡－地域・国際交流プラザ地点－、国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室、徳島、p.17、2015年3月

中原計・端野晋平、遺構、新蔵遺跡－地域・国際交流プラザ地点－、国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室、徳島、pp.17-105、2015年3月

端野晋平、銭貨、新蔵遺跡－地域・国際交流プラザ地点－、国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室、徳島、pp.535-537、2015年3月

端野晋平・三阪一徳・脇山佳奈・山口雄治、庄・蔵本遺跡第27次調査（立体駐車場地点）の成果、国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室紀要1、国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室、徳島、43-97、2015年3月

端野晋平、発掘調査の概要、国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室紀要1、国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室、徳島、121-143、2015年3月

d. 外部資金

公益財団法人高梨学術奨励基金若手研究助成「集落動態からみた無文土器人の環境適応に関する研究」2014年6月～2015年3月

科学研究費補助金基盤研究(C)「縄文／弥生移行期における農耕の実態解明に関する研究」(研究課題番号：26370897)(研究代表者：中村豊)(研究分担者：中沢道彦・端野晋平・山城孝)2014年4月～2017年3月

e. 授業

東アジア考古学概論Ⅰ（全学共通教育）

埋もれた文化遺産Ⅰ（全学共通教育）

東アジア考古学概論Ⅱ（全学共通教育）

埋もれた文化遺産Ⅱ（全学共通教育）

考古学講読Ⅲ「韓国考古学入門」2014年7月14～18日（九州大学文学部・集中講義）

f. その他

端野晋平、〔教員の寄贈著書コーナー〕古代学協会編『列島初期稲作の担い手は誰か』（端野晋平執筆）、

国立大学法人徳島大学附属図書館報メールマガジン「すだち」、No. 113、2014年6月18日

端野晋平、徳大構内遺跡を掘る！、徳島大学埋蔵文化財調査室ニュースレター、No. 1、徳島大学埋蔵文化財調査室、徳島、2014年8月

端野晋平、出土資料の整理・公開・活用、国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室紀要1、国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室、徳島、155-156、2015年3月

端野晋平、調査室員の研究教育実績、国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室紀要1、国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室、徳島、157-159、2015年3月

端野晋平、業務・活動報告のまとめ、国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室紀要1、国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室、徳島、p. 161、2015年3月

(2) 三阪一徳 助教

a. 論文

三阪一徳、土器からみた北部九州弥生時代開始期の地域差、森浩一先生に学ぶー森浩一先生追悼論集ー（同志社大学考古学シリーズXI）、同志社大学考古学シリーズ刊行会、京都、pp. 245-260、2015年1月

三阪一徳、遼東半島先史時代の土器製作技術ー上馬石貝塚を中心としてー、遼東半島上馬石貝塚の研究、九州大学出版会、福岡、pp. 179-202、2015年3月

b. 研究発表

三阪一徳、朝鮮半島／韓半島青銅器時代土器の日本列島における受容と変容、平成26年度瀬戸内海考古学研究会第4回公開大会、pp. 1-10、2014年5月

端野晋平・三阪一徳・脇山佳奈、庄・蔵本遺跡第27次調査の成果、設楽博己教授（東京大学）科研費基盤研究（A）『植物・土器・人骨の分析を中心とした日本列島農耕文化複合の形成に関する基礎的研究』2014年度成果報告会、2015年3月

c. 報告書

端野晋平・三阪一徳・脇山佳奈・山口雄治、庄・蔵本遺跡第27次調査（立体駐車場地点）の成果、国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室紀要1、国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室、徳島、43-97、2015年

三阪一徳、立会調査の概要、国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室紀要1、国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室、徳島、145-154、2015年

d. 外部資金

公益財団法人高梨学術奨励基金若手研究助成「朝鮮半島南部における青銅器時代開始過程に関する研究ー遼東地域からの影響を対象にー」2014年6月～2015年3月

e. その他

朴鎮国（三阪一徳・訳）、春川中島青銅器時代集落遺跡、九州考古学会・嶺南考古学会第11回合同考古学大会、pp. 244-247、2015年1月

(3) 脇山佳奈 特任助教（2014年10月着任）**a. 論文**

脇山佳奈、庄・蔵本遺跡出土銅鐸破片の意義、国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室紀要1、国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室、徳島、33-42、2015年3月

b. 研究発表

端野晋平・三阪一徳・脇山佳奈、庄・蔵本遺跡第27次調査の成果、設楽博己教授（東京大学）科研費基盤研究(A)『植物・土器・人骨の分析を中心とした日本列島農耕文化複合の形成に関する基礎的研究』2014年度成果報告会、2014年3月

c. 報告書

脇山佳奈、四川省・重慶市における漢代俑の研究、高梨学術奨励基金年報 平成25年度研究成果概要報告、公益財団法人高梨学術奨励基金、283-289、2014年11月

端野晋平・三阪一徳・脇山佳奈・山口雄治、庄・蔵本遺跡第27次調査（立体駐車場地点）の成果、国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室紀要1、国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室、徳島、43-97、2015年3月

（端野晋平）

第6章 業務・活動報告のまとめ

2014年度は、構内遺跡の試掘・立会調査、出土資料の整理作業、展示会、資料貸出、資料調査協力、出土資料の保存処理といった業務を実施した。それに加え、各調査員が個別に研究調査活動を行った。それぞれについてまとめると、以下の通りである。

【構内遺跡の試掘・立会調査】

試掘調査は南常三島地区で1件、石井地区で1件を実施した。南常三島地区地域創生・国際センター新営地点では、近世の宅地開発に伴う盛土が検出され、絵画でしられる「常三島」地区の南限を確認した。石井地区生物資源産業学部豚舎新営地点では、近代の水田層が確認されたが、当初、予想された弥生時代の遺構および包含層は検出されなかった。立会調査は、蔵本地区で1件、南常三島地区で2件、合計3件を実施した。

【出土遺物の整理・公開・活用】

整理作業は、新蔵遺跡（第1次調査）、庄・蔵本遺跡（第24～29次調査）、常三島遺跡（第3・5・19・20次調査）出土資料（合計10地点分）について実施した。そのうち、新蔵遺跡については、『新蔵遺跡ー地域・国際交流プラザ地点ー』（徳島大学埋蔵文化財調査報告書 第4巻）を刊行した。また、『国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室紀要』創刊号を刊行し、調査室の業務・活動報告、ならびに調査・研究成果を掲載した。他にも『徳島大学埋蔵文化財調査室ニュースレター』No.1を作成し、調査室の活動や大学構内遺跡の紹介を行った。

展示会は、本学附属図書館本館3階資料展示室にて、ミニ展示「江戸時代の常三島」を開催し、829名の来場があった。また、徳島県立博物館常設展、同館企画展、徳島市立考古資料館企画展、国立歴史民俗博物館企画展示、尼崎市立田能資料館特別展、横浜市歴史博物館企画展、海陽町立博物館企画展の7件について、庄・蔵本遺跡出土の遺物と写真の貸し出しを行った。そして、庄・蔵本遺跡第27次調査旧河道出土の木製品の保存処理、常三島遺跡第3・5次調査火葬墓出土人骨のクリーニング・分析を外部機関に依頼し、実施した。

【調査室員の研究教育活動】

本年度は3名の室員によって研究教育活動を実施した。研究業績は、論文等4件、研究発表4件、外部資金3件を数える。また教育では、授業4件（全学共通教育4件、非常勤1件）を担当した。

（脇山佳奈）

付 編

1. 沿 革

(1) 埋蔵文化財調査室設置以前

1982年（昭和57年）11月 徳島大学構内における発掘調査の嚆矢は、蔵本地区での体育館器具庫地点の調査であり、本学からの委嘱を受けた徳島県教育委員会がこれを実施する。その後、庄・蔵本遺跡第5次調査（動物実験施設新営地点）までの調査は、引き続き徳島県教育委員会が担当する。

1986年（昭和61年）庄・蔵本遺跡第6次調査（青藍会館新営地点）から、本学の責任において発掘調査を実施する方向が初めて模索される。医学部内に同窓会館建設予定地埋蔵文化財保護対策検討委員会が設置され、専門職員を医学部付の非常勤職員枠で採用し、調査員に任ずる措置が講じられる。

1987年（昭和62年）庄・蔵本遺跡第7次調査（医療技術短期大学校舎新営地点）に際して、再度、県教育委員会に発掘調査を委嘱することになる。ただし、このような変則的な対応を問題視する学内世論を受けることとなる。

1990年（平成2年）庄・蔵本遺跡第8次調査（長井記念ホール新営地点・薬学部実験研究棟新営地点）において、薬学部内に調査主体および責任母体組織としての文化財保護対策委員会を応急的処置として設置する。岡内三眞総合科学部教授が調査を担当し、その際に調査員として桑原久男が採用される。

1992年（平成4年）医学部および同附属病院の老朽化に伴う再開発の必要性が現実化しつつあったことや、蔵本地区が弥生時代を中心とした第1級の遺跡であり、埋蔵文化財の取り扱いに関する抜本的な体制整備の必要性が周知され始めたことから、徳島大学埋蔵文化財調査委員会および埋蔵文化財調査室が設置される方向へと向かう。

(2) 徳島大学埋蔵文化財調査委員会・同調査室設置以降

1992年（平成4年）3月17日 徳島大学埋蔵文化財調査委員会の第1回会議が武田克之委員長（学長）を議長として開催され、委員会規則が策定される。

1992年（平成4年）4月 埋蔵文化財調査室要項が制定される。室長には東潮総合科学部助教授が任命される。埋蔵文化財調査室は、蔵本地区の看護婦宿舎1階に設けられる。また調査員としては1名を教官身分で措置することが決定され、医学部第1解剖学講座助手をあてることになる。

1992年（平成4年）7月 埋蔵文化財調査室によって、庄・蔵本遺跡第9次調査（医療技術短期大学校舎増築地点）が開始される。調査員が採用されるまでは東潮室長が担当し、8月に北條芳隆が調査員として助手に採用され調査を引き継ぐ。

1992年（平成4年）9月 常三島遺跡第1次調査（工学部実習棟新営地点）が、徳島県教育委員会や徳島市教育

委員会との協議を経たうえで、埋蔵文化財調査室によって実施される。

1995年（平成7年）4月 橋本達也が総合科学部助手に着任する。

1995年（平成7年）12月 常三島遺跡第4次調査（工業会館新宮地点）が徳島市教育委員会によって実施される。それ以外は本学の埋蔵文化財調査室が担当している。

1996年（平成8年）8月 中村豊が大学開放実践センター助手に着任する。

1996年（平成8年）11月 北條芳隆助手が埋蔵文化財調査室室長に任じられる。

1997年（平成9年）4月 北條芳隆助手が総合科学部助教授に任じられる。

1997年～2000年（平成9年～12年） 徳島県教育委員会と過去の庄・蔵本遺跡出土資料の整理体制について協議を重ねる。

2000年（平成12年） 埋蔵文化財調査委員会が徳島大学施設委員会へ統合される。

2001年（平成13年）2月 徳島県と徳島大学の共同研究として、過去の庄・蔵本遺跡出土資料の問題解決に当てることで合意を得られ、7月に埋蔵文化財調査室に新たに整理室を設置し、同遺跡出土資料の整理および報告書作成を10か年計画で行うことが決まる。

2001年（平成13年）3月 橋本達也助手が鹿児島大学総合研究博物館へ転出する。

2002年（平成14年）3月 北條芳隆室長・助教授が東海大学文学部へ転出する。

2002年（平成14年）4月 定森秀夫が総合科学部助教授・埋蔵文化財調査室室長に着任する。

2004年（平成16年）2月 中原計が総合科学部助手に着任する。

2004年（平成16年）4月 地域・国際交流プラザ（日亜会館）建設に伴い、新蔵遺跡第1次調査が行われる。

2007年（平成19年）4月 定森秀夫助教授が総合科学部准教授に任じられる。
中村豊助手が大学開放実践センター助教に任じられる。
中原計助手が総合科学部助教に任じられる。

2008年（平成20年）3月 定森秀夫室長・准教授が滋賀県立大学へ転出する。

2008年（平成20年）4月 中村豊助教が埋蔵文化財調査室室長・准教授に任じられる。

2010年（平成22年）3月 中原計助教が鳥取大学地域学部へ転出する。

- 2010年（平成22年）9月 遠部慎が埋蔵文化財調査室助教に着任する。
- 2012年（平成24年）4月 山口雄治が埋蔵文化財調査室特任助教に着任する。
- 2012年（平成24年）9月 中村豊准教授が総合科学部准教授を併任する。
- 2013年（平成25年）3月 中村豊准教授が総合科学部へ転出する。
- 2013年（平成25年）4月 端野晋平が埋蔵文化財調査室室長・准教授に着任する。
- 2013年（平成25年）7月 山口雄治特任助教が岡山大学埋蔵文化財調査研究センターへ転出する。
- 2013年（平成25年）8月 遠部慎助教が北海道大学埋蔵文化財調査室へ転出する。
- 2013年（平成25年）10月 三阪一徳が埋蔵文化財調査室特任助教に着任する。
- 2013年（平成25年）12月 石丸恵利子が埋蔵文化財調査室特任助教に着任する。
- 2014年（平成26年）3月 石丸恵利子特任助教が広島大学総合博物館へ転出する。
- 2014年（平成26年）10月 三阪一徳特任助教が助教に任じられる。
脇山佳奈が埋蔵文化財調査室特任助教に着任する。
- 2015年（平成27年）2月 石井地区（徳島県立農業大学校跡地）にて、生物資源産業学部豚舎新営に伴う試掘調査が行われる。

2014年度までに蔵本地区では29次、常三島地区では21次、新蔵地区では1次、石井地区では1次の発掘調査が実施されている。2015年3月時点で、組織は調査員3名、調査補助員7名体制である。

2. 2014 年度徳島大学埋蔵文化財調査室組織

室長（調査員）	端野晋平	埋蔵文化財調査室准教授
調査員	三坂一徳	埋蔵文化財調査室特任助教（2014年9月まで） 埋蔵文化財調査室助教（2014年10月から）
調査員	脇山佳奈	埋蔵文化財調査室特任助教（2014年10月から）
調査補助職員	岸本多美子	施設マネジメント部技術補佐員
同	久米淑子	同 補佐員（2014年10月から）
同	中原尚子	同 補佐員
同	板東美幸	同 補佐員
同	前田千夏	同 補佐員
同	安山かおり	同 補佐員
同	山本愛子	同 補佐員

3. 徳島大学埋蔵文化財調査室規則

平成 11 年 1 月 29 日

規則第 1368 号制定

（趣旨）

第 1 条 この規則は、徳島大学学則第 4 条第 2 項の規定に基づき、埋蔵文化財調査室（以下「調査室」という。）について必要な事項を定めるものとする。

（業務）

第 2 条 調査室は、本学の施設整備に伴う埋蔵文化財の発掘調査に関する次の業務を行う。

- (1) 実施計画の立案及び実施に関すること。
- (2) 出土した埋蔵文化財の整理、保管及び保存に関すること。
- (3) 報告書の作成に関すること。
- (4) その他埋蔵文化財の発掘調査に関し必要な事項

（組織）

第 3 条 調査室に、室長を置く。

2 室長は、調査室に関する業務を掌理する。

3 調査室に、教員その他必要な職員を置くことができる。

（室長等の任命及び任期）

第 4 条 室長は、徳島大学施設委員会（以下「施設委員会」という。）の議を経て学長が任命する。

2 室長の任期は、2 年とし、再任されることができる。

（運営委員会）

第 5 条 調査室に、調査室の管理運営に関する重要事項を審議するため、徳島大学埋蔵文化財調査室運営委員会（以下「運営委員会」という。）を置く。

第 6 条 運営委員会は、次の各号に掲げる事項を審議する。

- (1) 管理運営の基本方針に関すること。
- (2) 教員の採用及び昇任に係る候補者の選考に関すること。
- (3) 調査室の業務に関する重要事項

- (4) 予算概算の方針に関すること。
- (5) その他管理運営に関する重要事項

第7条 運営委員会は、次の各号に掲げる委員をもって組織する。

- (1) 室長
- (2) 施設委員会委員長
- (3) 総合科学部長
- (4) 埋蔵文化財に関する専門教員
- (5) 施設マネジメント部長
- (6) その他運営委員会が必要と認める者

2 前項第4号の委員は、学長が命ずる。

3 第1項第5号の委員は、前条第2号に定める事項の審議には加わることができない。

第8条 前条第1項第4号の委員の任期は、2年とし、再任されることができる。ただし、委員が任期の途中で欠員となった場合の補欠の委員の任期は、前任者の残任期間とする。

第9条 運営委員会に委員長を置き、室長をもって充てる。

2 委員長は運営委員会を招集し、その議長となる。

3 委員長に事故があるときは、委員長があらかじめ指名する委員が、その職務を代理する。

第10条 運営委員会は、委員の過半数の出席がなければ会議を開くことができない。

2 議事は、出席した委員の過半数をもって決し、可否同数のときは、議長の決するところによる。

第11条 運営委員会が必要と認めるときは、会議に委員以外の者の出席を求めて意見を聴くことができる。

第12条 前7条に定めるもののほか、運営委員会について必要な事項は、運営委員会が別に定める。

(事務)

第13条 調査室に関する事務は、関係部局の協力を得て、施設マネジメント部施設企画課において処理する。

(雑則)

第14条 この規則に定めるもののほか、調査室について必要な事項は、施設委員会が別に定める。

附 則

1 この規則は、平成11年4月1日から施行する。

2 徳島大学埋蔵文化財調査室要項(平成4年4月27日制定)は、廃止する。

附 則(平成15年3月28日規則第1769号改正)

この規則は、平成15年4月1日から施行する。

附 則(平成16年10月1日規則第103号改正)

この規則は、平成16年10月1日から施行する。

附 則(平成20年3月31日規則第112号改正)

この規則は、平成20年4月1日から施行する。

附 則(平成22年2月10日規則第23号改正)

この規則は、平成22年2月10日から施行する。

付 表

第2表 発掘調査 (2014年度まで)

(蔵本地区:庄・蔵本遺跡)

年度	調査名称: 工事名称	調査期間	調査主体	担当者 (○は調査主任)	面積 (㎡)	概要 (主要遺構ほか)	文献
昭和57年度	庄・蔵本遺跡第1次調査: 体育館器具庫新営	1982年11月30日～ 1983年2月5日 (2か月)	徳島県教育委員会	島巡賢二 秋山浩一 ほか	147	弥生前期: 土器溜り、近世～近代: 溝	7
昭和57・58年度	庄・蔵本遺跡第2次調査: 体育館新営	1983年1月中旬～ 1983年11月30日 (10か月)	徳島県教育委員会	福家清司 久保脇美朗 ほか	1160	弥生前期後葉～中期初頭: 土坑・土 器溜り、弥生中期後葉: 方形周溝 墓、庄内式新相: 竪穴住居、古墳前 期: 井戸、古代: 須恵器溜り・木棺 墓・大溝・水路、古代～中世: 掘立 柱建物、近世～近代: 大溝・溝・石 敷暗渠・井戸	3・7
昭和59年度	庄・蔵本遺跡第3次調査: 課外活動共用施設新営	1984年7月3日～ 1984年8月10日 (1か月)	徳島県教育委員会	福家清司 久保脇美朗 ほか	157	弥生前期中葉～前期末・中期初頭: 不明遺構、弥生後期: 溝、弥生終末 期: 竪穴住居、古代: 溝、近世～近 代: 溝	9
昭和60年度	庄・蔵本遺跡第4次調査: 医学部臨床講義棟新営	1985年4月25日～ 1985年7月14日 (3か月)	徳島県教育委員会	松永住美 大谷泰久 ほか	655	近代: 暗渠・性格不明ピット・土坑	7
昭和60年度	庄・蔵本遺跡第5次調査: 動物実験施設新営	1985年9月2日～ 1985年12月28日 (4か月)	徳島県教育委員会	松永住美 大谷泰久 ほか	1321	弥生前期末～中期: 用水路、弥生後 期: 土器棺墓、弥生後期後葉～終末 期: 流路	5
昭和61年度	庄・蔵本遺跡第6次調査: 青藍会館 (同窓会館) 新営	1986年12月11日～ 1987年3月20日 (3か月)	徳島大学	岡内三眞 河野雄次 ほか	540	弥生時代前期: 石棺墓・配石墓・土 壇墓・甕棺墓・土坑、弥生中期末～ 後期: 溝、後期: 土坑、古墳: 埋 葬、奈良: 掘立柱建物、鎌倉: 土壇 墓	1
昭和62年度	庄・蔵本遺跡第7次調査: 医療技術短期大学校舎新営	1987年4月1日～ 1987年8月31日 (4か月)	徳島県教育委員会	羽山久男 久保脇美朗 ほか	870	弥生前期末～中期初頭: 溝・土坑・ 土坑 (井戸か)、弥生前期中葉～中 期・弥生後期前葉～前期中葉・古墳 後期: 溝、弥生終末: 竪穴住居、近 世: 溝	9
平成元年度	庄・蔵本遺跡第8次調査: 長井記念ホール・薬学部実 験研究棟新営	1990年1月11日～ 1990年2月28日 (1か月)	徳島大学	岡内三眞 桑原久男	1430	近世: 水田耕土	1
平成4年度	庄・蔵本遺跡第9次調査: 医療技術短期大学校舎増築	1992年7月11日～ 1992年9月4日 (3か月)	徳島大学	東 潮 北條芳隆	310	弥生前期前葉: 河道、弥生前期後 葉: 土坑、弥生終末期: 竪穴住居、 古墳中期: 井戸・溝、中世・近世: 溝	1
平成5年度	庄・蔵本遺跡第10次調査: 酵素科学研究センター新営	1993年5月26日～ 1993年9月30日 (4か月)	徳島大学	東 潮 北條芳隆	623	弥生前期前葉: 溝、弥生前期後葉: 立石、弥生中期後半: 溝・土坑、古 墳中期: 竪穴住居・井戸、近世: 木 棺墓・溝	1
平成5年度	庄・蔵本遺跡第11次調査: MRI・CT装置棟新営	1994年2月18日～ 1994年3月17日 (1か月)	徳島大学	東 潮 北條芳隆	224	弥生終末期: 洪水砂層、古墳時代初 頭: 溝、近世: 「めぐら暗渠」状遺 構	HPに概要報 告書を掲載
平成5年度	庄・蔵本遺跡第12次調査: 附属図書館蔵本分館増築	1994年2月25日～ 1994年3月24日 (1か月)	徳島大学	東 潮 北條芳隆	288	弥生: 自然流路、近世: 溝	HPに概要報 告書を掲載
平成6～8年度	庄・蔵本遺跡第13次調査: 東病棟新営 (病棟 I 期)	1995年3月27日～ 1996年3月31日 (12か月) 1996年4月1日～ 1996年7月31日 (4か月)	徳島大学	東 潮 北條芳隆	5000	弥生前期: 竪穴住居・用水路、株 痕、土坑、弥生中期後半: 方形周溝 墓、弥生後期: 甕棺墓・竪穴式竪穴 住居、古墳時代中期: 溝、中・近 世: 水田・用水路・道路・井戸	8・HPに概要 報告書を掲 載
平成7年度	庄・蔵本遺跡第14次調査: 医薬資源教育研究センター 新営	1995年6月21日～ 1995年9月5日 (3か月)	徳島大学	東 潮 橋本達也	300	弥生～古墳: 掘立柱建物、古墳: 溝、古代: 溝、中世～近世: 耕作痕 跡、近世: 道・溝・暗渠・耕作痕 跡、近代: 畠状小区画・柵跡・杭列 跡	HPに概要報 告書を掲載

年度	調査名称：工事名称	調査期間	調査主体	担当者 (○は調査 主任)	面積 (㎡)	概要（主要遺構ほか）	文献
平成8・9年度	庄・蔵本遺跡第15次調査： 共同溝設置	1996年11月1日～ 1997年3月31日 (5か月) 1997年4月1日～ 1997年6月7日 (2か月)	徳島大学	北條芳隆 橋本達也 中村 豊	1754	弥生前期初頭：溝、弥生前期前半： 大溝（環濠集落）、弥生前期前半～ 後半：土坑、弥生中期前半：流水、 弥生中期末～後期：集落、弥生後 期：堅穴住居、古墳前・中期：溝・ 井戸、古代：掘立柱建物	HPに概要報 告書を掲載
平成10年度	庄・蔵本遺跡第16次調査： ゲノム機能研究センター棟 建設	1998年9月1日～ 1999年2月2日 (5か月)	徳島大学	北條芳隆 橋本達也 中村 豊	1000	弥生中期前半：大溝・集石・土坑、 弥生中期～後期：方形周溝墓、弥生 後期：堅穴住居・大溝、古墳前期・ 中期：溝、古墳中期：井戸、古墳後 期・古代前半：掘立柱建物、古代～ 中世：溝、江戸：溝・井戸・大型水 路・耕作痕跡	HPに概要報 告書を掲載
平成11年度	庄・蔵本遺跡第17次調査： 中央診療棟新営	1999年8月1日～ 1999年3月 (8か月)	徳島大学	北條芳隆 中村 豊	5000	弥生前期中頃：水田の畦、弥生後 期・終末：溝、庄内式期：堅穴住 居・掘立柱建物、中・近世：条里制 地割に伴う溝	HPに概要報 告書を掲載
平成13・14年度	庄・蔵本遺跡第18次調査： ゲノム機能研究センター棟 増築	2002年3月11日～ 2002年6月10日 (3か月)	徳島大学	北條芳隆 中村 豊	311	弥生後期：大溝、古墳前期初頭～中 期：堅穴住居、近世：条里制に伴う 溝	HPに概要報 告書を掲載
平成18年度	庄・蔵本遺跡第19次調査： 医学系実験研究棟Ⅱ期改修	2006年4月17日～ 2006年7月25日 (3か月)	徳島大学	定森秀夫 中村 豊 中原 計	324	弥生前期：河道、弥生前期中葉：用 水路、小区画水田、弥生中期末～後 期：方形周溝墓、弥生中期前半：集 石・土坑、弥生終末：土坑、古代： 掘立柱建物、平安・江戸：溝	6
平成18年度	庄・蔵本遺跡第20次調査： 西病棟新営	2006年6月27日～ 2007年3月15日 (9か月)	徳島大学	定森秀夫 中村 豊 中原 計	2645	弥生前期中葉：灌漑用水路・旧河 道・畠遺構・焼土・炭化物（イネ・ 雑穀類など）の詰まった土坑、弥生 中期後葉：方形周溝墓・土坑・溝・ 柱穴、江戸：溝・井戸	6
平成19年度	庄・蔵本遺跡第21次調査： 医学系実験研究棟Ⅲ期改修 （RI棟排水処理設備）	2007年10月22日～ 2007年11月7日 (2週間)	徳島大学	定森秀夫 中村 豊 中原 計	45	弥生後期後葉～終末期：開析流路 （第5・18次調査で検出）、中近 世：溝	8
平成19年度	庄・蔵本遺跡第22次調査： 西病棟新営その他電気設備	2008年1月9日～ 2007年2月14日 (1か月)	徳島大学	定森秀夫 中村 豊	103	縄文晩期末～弥生前期：土坑、古墳 中期：溝、近世：溝	8
平成23年度	庄・蔵本遺跡第23次調査： 連絡橋建設	2011年4月4日～ 2011年4月18日 (2週間)	徳島大学	中村 豊 遠部 慎	100	近現代：溝	HPに概要報 告書を掲載
平成23年度	庄・蔵本遺跡第24次調査： 藤井節郎記念医学セン ター新営	2011年10月7日～ 2012年3月14日 (5か月)	徳島大学	中村 豊 遠部 慎	1800	弥生前期中葉：水田遺構、弥生時代 前期末～古墳：小規模な河道	HPに概要報 告書を掲載
平成23年度	庄・蔵本遺跡第25次調査： 附属図書館蔵本分館増築Ⅱ 期	2011年10月6日～ 2011年10月26日 (2週間)	徳島大学	中村 豊 遠部 慎	430	時期不明：旧河道	HPに概要報 告書を掲載
平成24年度	庄・蔵本遺跡第26次調査： 大塚講堂改修	2012年4月9日～ 2012年6月1日 (2か月)	徳島大学	中村 豊 遠部 慎 山口雄治	1030	弥生前期中葉：用水路列、弥生前期 末・中期初頭以降：旧河道、古墳前 期（布留0～1式）；井戸	HPに概要報 告書を掲載
平成24・25年度	庄・蔵本遺跡第27次調査： 立体駐車場新営	2012年5月1日～ 2013年4月19日 (11か月半)	徳島大学	中村 豊 遠部 慎 ○山口雄治	3610	弥生前期中葉：畝状遺構（用水路取 水口）、弥生前期～終末期：溝、弥 生前期末～中期初頭：集落遺構、弥 生中期：方形周溝墓、弥生後期後葉 ～末：堅穴住居・土器棺墓、古墳中 期～後期：堅穴住居・井戸、古代： 堅穴住居・井戸・耕作痕（畠）	12
平成24年度	庄・蔵本遺跡第28次調査： 外来診療棟新営	2012年7月2日～ 2013年1月9日 (6か月半)	徳島大学	中村 豊 遠部 慎 山口雄治	3688	弥生前期：水田跡、中世以前：溝状 遺構、近世：河道	HPに概要報 告書を掲載
平成24年度	庄・蔵本遺跡第29次調査： 学生支援センター改修	2012年10月31日～ 2013年2月5日 (3か月)	徳島大学	中村 豊 遠部 慎 山口雄治	555	弥生前期中葉～末：用水路列、古 代：掘立柱建物跡、近世：溝	HPに概要報 告書を掲載

※文献の番号は、第5表に対応する。

〈常三島地区：常三島遺跡〉

年度	調査名称：工事名称	調査期間	調査主体	担当者 (○は調査主任)	面積 (㎡)	概要（主要遺構他）	文献
平成4年度	常三島遺跡第1次調査： 工学部実習棟新営	1992年9月10日～ 1992年9月20日 (11日間)	徳島大学	東 潮 ○北條芳隆	180	江戸：屋敷区画溝・排水溝・建物跡	4
平成5年度	常三島遺跡第2次調査： 地域共同研究センター新営	1993年10月1日～ 1993年10月30日 (1か月)	徳島大学	東 潮 ○北條芳隆	576	江戸（17世紀～18世紀中ごろ）：柱穴・溝・土坑、江戸～明治（18世紀後半～19世紀代）：井戸・方形水溜り遺構・埋甕(便所)遺構・溝・土坑	4
平成7年度	常三島遺跡第3次調査： 工学部光応用工学科棟新営	1995年8月22日～ 1996年3月25日 (7か月)	徳島大学	東 潮 ○橋本達也	783	江戸前期（17世紀）：溝・土坑・火葬墓、江戸中期（18世紀）：貝塚状土坑、江戸（18世紀後半）～幕末：屋敷裏境界部	HPに概要報告書を掲載
平成7年度	常三島遺跡第4次調査： 工業会館建設	1995年12月1日～ 1996年1月31日 (2か月)	徳島市教育委員会	○勝浦康守	400	幕末～明治初頭：畝跡・溝（屋敷境溝や境界物に伴う落溝）・土坑・建物跡・石組み遺構	勝浦康守「常三島遺跡（徳島大学工業会館建設工事）『徳島市埋蔵文化財発掘調査概要』7、徳島市教育委員会、1997、15-31頁
平成8年度	常三島遺跡第5次調査： 工学部光応用工学科棟新営（追加）	1996年4月17日～ 1996年5月30日 (1か月半)	徳島大学	東 潮 ○橋本達也	165	第3次調査と同様	HPに概要報告書を掲載
平成8年度	常三島遺跡第6次調査： サテライト・ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー新営	1996年6月6日～ 1996年8月10日 (2か月)	徳島大学	北條芳隆 ○橋本達也	619	江戸：屋敷境溝・土坑・井戸、明治中期～大正：池・井戸・暗渠	HPに概要報告書を掲載
平成9年度	常三島遺跡第7次調査： 工学部機械工学科棟新営	1997年7月24日～ 1997年11月8日 (3か月半)	徳島大学	北條芳隆 ○橋本達也 中村 豊	1800	江戸（18世紀後半以降）：屋敷境溝・土手・屋敷跡にともなう土坑・溝・井戸	HPに概要報告書を掲載
平成8・9年度	常三島遺跡第8次調査： 総合情報処理センター新営	1997年3月28日～ 1997年6月10日 (2か月半)	徳島大学	北條芳隆	687	江戸：武家屋敷裏庭の畑地・井戸、幕末：建物跡・ゴミ穴（蒔絵漆椀出土）、明治：井戸	HPに概要報告書を掲載
平成10年度	常三島遺跡第9次調査： 共同溝設置	1998年7月22日～ 1998年9月4日 (1か月半)	徳島大学	北條芳隆 中村 豊	178	江戸（18～19世紀）：屋敷境溝	HPに概要報告書を掲載
平成11年度	常三島遺跡第10次調査： 工学部共通講義棟新営（共通講義棟Ⅰ期）	1999年5月10日～ 1999年6月7日 (1か月)	徳島大学	北條芳隆 中村 豊	900	江戸：武家屋敷造成土・大規模区画溝（水路か）	HPに概要報告書を掲載
平成11年度	常三島遺跡第10次調査： 共同溝設置（Ⅱ-4区）	1999年6月28日～ 1999年8月11日 (1か月半)	徳島大学	○北條芳隆 中村 豊	200	江戸（18世紀前半～幕末）：溝・橋脚遺構	HPに概要報告書を掲載
平成11・12年度	常三島遺跡第11次調査： 共同溝設置（Ⅱ-1・2区）	1999年7月15日～ 2000年5月26日 (10か月)	徳島大学	北條芳隆 ○橋本達也	171 300	江戸（17～18世紀前半）：井戸かゴミ穴・溝、江戸（18世紀代）：屋敷境溝、江戸（18世紀後半～19世紀）：大型溝・石組み溝・建物跡（門）・柱列（柵）	HPに概要報告書を掲載
平成12年度	常三島遺跡第12次調査： 総合研究実験棟	2000年7月24日～ 2000年11月27日 (4か月)	徳島大学	北條芳隆	1000		
平成12・13年度	常三島遺跡第13次調査： 工学部総合教育研究棟新営（共通講義棟Ⅱ期）	2001年3月15日～ 2001年6月8日 (3か月)	徳島大学	北條芳隆 ○中村 豊	1110.6	江戸（18世紀～幕末）：「T」字状を呈する大溝・道路・井戸・掘立柱建物	HPに概要報告書を掲載
平成13年度	常三島遺跡第14次調査： 総合グラウンド管理舎・器具庫の配水管改修	2002年2月21～ 2002年3月1日 (2週間)	徳島大学	北條芳隆	100	江戸（18世紀以降）：土手、近代：溝	HPに概要報告書を掲載
平成14年度	常三島遺跡第15次調査： 工学部実験研究棟（電気電子棟）改修	2002年5月20日～ 2002年8月5日 (2か月半)	徳島大学	○定森秀夫 中村 豊	253	江戸（17世紀前半～中葉）：素掘り船入状遺構、江戸（17世紀後半～18世紀）石組み船入状遺構、江戸（18世紀後半～19世紀）：土坑・溝・井戸・曲物理設遺構、明治：水田・揚水施設・溝・土坑	2

年度	調査名称：工事名称	調査期間	調査主体	担当者 (○は調査主任)	面積 (㎡)	概要（主要遺構他）	文献
平成14年度	常三島遺跡第16次調査： 総合科学部3号棟改修	2002年7月29日～ 2002年10月31日 (3か月)	徳島大学	○定森秀夫 中村 豊	532	江戸：屋敷境溝・溝・建物跡・井戸・土坑、明治以降：建物基礎	HPに概要報告書を掲載
平成15年度	常三島遺跡第17次調査： 工学部総合研究棟改修	2003年5月1日～ 2003年7月17日 (2か月半)	徳島大学	○定森秀夫 中村 豊	381	江戸：屋敷境溝・建物跡・井戸・土坑・造成盛土、明治以降：水田跡・暗渠・池	HPに概要報告書を掲載
平成19年度	常三島遺跡第18次調査： 総合科学部1号館エレベーター新設	2008年1月16日～ 2008年1月21日 (6日間)	徳島大学	中原 計	35	古墳初頭：攪乱中より土師器	8
平成25年度	常三島遺跡第19次調査： 地域連携プラザ新営	2013年6月6日～ 2013年7月1日 (1か月)	徳島大学	○端野晋平 遠部 慎 山口雄治	458	江戸（17世紀後半以降～19世紀末）：溝（屋敷境溝）	HPに概要報告書を掲載
平成25年度	常三島遺跡第20次調査： フロンティア研究センター新営	2013年6月27日～ 2013年9月11日 (2か月半)	徳島大学	○端野晋平 遠部 慎 山口雄治	756	江戸（17世紀中ごろ以降）：石組遺構（水場利用施設）・溝・土坑	HPに概要報告書を掲載
平成26年度	常三島遺跡第21次調査： 地域創生・国際センター新営	2014年5月28日・ 30日・6月2日	徳島大学	○端野晋平 三阪一徳	40	近世：盛土・石列	本書第1章参照

※文献の番号は、第5表に対応する。

〈新蔵地区：新蔵遺跡〉

年度	調査名称：工事名称	調査期間	調査主体	担当者 (○は調査主任)	面積 (㎡)	概要（主要遺構他）	文献
平成16年度	新蔵遺跡第1次調査： 地域・国際交流プラザ（日 恵会館）新営	2004年4月21日～ 2004年11月8日 (7か月)	徳島大学	定森秀夫 中村 豊 中原 計	1000	江戸（17世紀後半～18世紀前葉）：屋敷境溝・竹列、江戸（18世紀中葉～19世紀初）：井戸・溝・土坑、江戸（19世紀前半～後半）：池状遺構・瓦転用暗渠・溝・井戸・土坑	11

※文献の番号は、第5表に対応する。

〈石井地区〉

年度	調査名称：工事名称	調査期間	調査主体	担当者 (○は調査主任)	面積 (㎡)	概要（主要遺構他）	文献
平成26年度	生物資源産業学部豚舎新営	2014年2月19日	徳島大学	○端野晋平 脇山佳奈 三阪一徳	5.6	近代：水田耕作土	本書第2章参照

第3表 立会調査 (2013～2014年度)

〈蔵本地区：庄・蔵本遺跡〉

番号	年度	年度 番号	工事名称	工事詳細	調査期間	掘削深度 (GL-m)	掘削面積 (㎡)	造成土厚 (m)	内容	遺物	文献	
1	2013	1	立体駐車場新営その他電気設備工事	1	ハンドホール	13/6/4・5	1.5	1.0	0.40	弥生・中世・近世	弥生土器	12
				2	ハンドホール	13/6/4・5	1.5	1.0	0.40	弥生・中世・近世	弥生土器、石器	
				3	管路	13/6/4・5	1.0	7.0	0.40	弥生・中世・近世	弥生土器	
				4	ハンドホール	13/6/7～10	1.5	1.0	0.40	弥生・中世・近世	弥生土器	
				5	ハンドホール、管路	13/6/7～10	1.4	43.0	0.40	弥生・中世・近世	-	
				6	ハンドホール、管路	13/6/18～28	1.3	30.0	0.40	弥生・中世・近世	-	
2	2013	2	地盤改良工事のための試掘		13/6/5	1.5	2.3	-	既設内	-	12	
3	2013	3	支線埋設工事		13/9/8	2.2	1.5	0.90	黄褐色砂質土まで、近代層	-	12	
4	2013	4	総合研究棟 (医学系) 新営工事		13/9/10	3.0	3.0	-	青灰色粘土まで	-	12	
5	2013	5	立体駐車場新営その他工事	1・2	電柱	13/11/26	2.6	0.3	-	弥生・中世	-	12
				3	電柱	13/11/26	2.6	0.3	-	弥生・中世	須恵器、土師器?、弥生土器?	
				4	電柱	13/11/26	2.6	1.5	-	弥生・中世	-	
				5	電柱	13/11/26	2.6	1.5	-	弥生・中世	陶磁器、ガラス瓶、「徳島大学」ロゴマーク入硬質陶器	
						13/11/26	0.7	4.8	1.00	弥生・中世	入硬質陶器	
				6・7	電柱	13/11/26	2.6	1.5	1.00	弥生・中世	陶磁器	
				8	電柱	13/12/9	2.8	1.1	1.00	弥生・中世	「徳島大学」ロゴマーク入硬質陶器、煉瓦	
				9～12	電柱	13/12/9	2.8	1.1	0.90	弥生・中世	-	
				13	防球ネット	13/12/2	12.0	2.5	-	弥生・中世	「厚仁(会)」ロゴマーク入硬質陶器	
				14～17	防球ネット	13/11/30	12.0	2.5	-	弥生・中世	-	
				18	防球ネット	13/11/29	12.0	2.5	-	弥生・中世	煉瓦	
				19・20	防球ネット	13/11/27	4.5	0.3	-	弥生・中世	-	
				21	防球ネット	13/11/27	4.5	0.3	-	弥生・中世	陶磁器	
				22・25・27	防球ネット	13/12/4	3.0	0.8	-	弥生・中世	弥生土器、土師器、陶磁器、ガラス瓶など	
13/12/4	0.5	6.2	-			弥生・中世						
23・24・26・28	防球ネット	13/12/4	3.0	0.8	-	弥生・中世	陶磁器、瓦、ガラス瓶など					
		13/12/4	0.5	6.2	-	弥生・中世						
6	2014	1	テニスコート改修その他工事	1	弓道場改修	14/11/4～6	0.7～0.8	86.8	0.70	近世水田層	陶磁器片・ガラス瓶片	本書
				2	テニスコート門扉	15/1/19	1.0	4.0	1.00	造成土内	-	
							1.0	4.0	1.00	造成土内	-	
				3	駐輪場基礎	15/1/27・28、2/4・9・14・20・23・24	0.5～0.6	154.6	0.50～0.60	造成土内	青銅製釘・ガラス瓶・銃弾・煉瓦	
				4	駐輪場街灯	15/2/14～15	1.3	5.6	1.10	青灰色粘土層	-	
	1.3	3.1	1.15	灰白色シルト層		-						

〈南常三島地区：常三島遺跡〉

番号	年度	年度 番号	工事名称	工事詳細	調査期間	掘削深度 (GL-m)	掘削面積 (㎡)	造成土厚 (m)	内容	遺物	文献	
1	2013	6	地域連携プラザ新営その他工事		13/5/23	1.6	16.0	-	既設内	-	12	
2	2013	7	フロンティア研究センター新 営電気設備工事	コンクリート 柱	13/11/11	2.0	0.8	-	既設内	陶磁器	12	
3	2013	8	地域連携プラザ新 営その他工事	1	雨水樹	14/1/7	1.0~1.1	3.8	0.45	GL-0.45mで近世 整地層？	陶磁器	12
				2	雨水樹	14/1/7	0.7~0.8	3.1	0.45	GL-0.45mで近世 整地層？	-	
				3	雨水樹	14/1/7・ 10	0.8	3.2	0.45	GL-0.45mで近世 整地層？	-	
				4	雨水樹	14/1/10	0.9	3.2	-	既設内	-	
				5	雨水樹	14/1/10	0.9	4.0	0.45	GL-0.45mで近世 整地層？	陶磁器	
4	2013	9	課外活動施設新営 工事	1	外灯	14/1/30	1.9	1.0	-	造成土	陶磁器、瓦	12
				2	外灯	14/1/30	1.6	1.0	0.50	近世の溝？杭？	陶磁器、瓦	
				3	外灯	14/1/30	1.5	1.0	0.60	近世層	-	
				4	外灯	14/1/31	1.6	2.2	0.70	近世の石組？	-	
5	2013	10	学生支援センター 改修機械設備工事	1	管路	14/2/22	0.8~1.5	9.7	-	既設内	陶磁器、瓦、基 石	12
				2	管路	14/2/22、 3/1・2	0.9~1.2	31.9	0.55	近世の石組？	陶磁器、瓦	
				3	避雷針	14/2/22	0.80	1.8	-	既設内	-	
				4	管路	14/2/28、 3/4	0.80	34.1	0.20	近世の整地層？	陶磁器、瓦	
				5	管路	14/2/17	0.5	10.0	-	既設内	陶磁器、瓦、鉄 釘	
6	2014	2	総合科学部地区都市ガス本管 老朽化改修工事	管路	14/8/21 ~22、 25・26	0.8	34.4	0.80	造成土内	陶磁器		
7	2014	3	地域創生・国際セ ンター新営その他 機械工事	1	管路	14/9/1・ 3・5	1.2	75.9	0.90	細砂層	-	本書
				2	外灯	14/9/8	1.0	0.2	-	造成土内？	-	
				3	外灯	14/9/8	1.0	0.2	-	造成土内？	-	
				4	管路	14/10/21	0.6	1.0	0.60	造成土内	-	

第4表 埋蔵文化財調査室収蔵遺物概要（2014年度現在）

種類	遺跡名	調査名称・工事名称	箱数							特殊遺物ほか	特記事項	文献	
			総数	土器	石器	木器・漆器類	種子	瓦	その他				サンプル
発掘	庄・蔵本(蔵本)	庄・蔵本遺跡第1次調査： 体育館器具庫新営	-								弥生前期土器・磨製石器	徳島県教育委員会所蔵	7
		庄・蔵本遺跡第2次調査： 体育館新営	-								縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・黒色土器・製塩土器・白玉・ガラス製小玉・管玉・勾玉・破鏡・袴帯巡方・銅銭・磨製石器・打製石器・土人形・泥面子・斎串・鳥形木製品・武器形木製品・漆椀・曲物・下駄・弓・扇子・横櫛・杓子・木槌・ヒョウタン製容器	徳島県教育委員会所蔵	3・7
		庄・蔵本遺跡第3次調査： 課外活動共用施設新営	-								弥生土器・土師器・須恵器・瓦器・陶器・磁器・磨石・土鍾・土人形	徳島県教育委員会所蔵	9
		庄・蔵本遺跡第4次調査： 医学部臨床講義棟新営	-								弥生土器・須恵器・土師器・土鍾	徳島県教育委員会所蔵	7
		庄・蔵本遺跡第5次調査： 動物実験施設新営	-								弥生土器・ミニチュア土器・紡錘車・土鍾・打製石器・磨製石器・柄振・木鍬・堀り棒・木槌・白・堅杵・盾・弓・剣形木製品・容器・建築部材	徳島県教育委員会所蔵	5
		庄・蔵本遺跡第6次調査： 青藍会館（同窓会館）新営	47	45	1	1					弥生土器・土師器・須恵器・土鍾・碧玉製管玉・ガラス製小玉・滑石製小玉・打製石器・鉄鍾		1
		庄・蔵本遺跡第7次調査： 医療技術短期大学校舎新営	-								弥生土器・土師器・須恵器・瓦・陶磁器・土鍾・土人形・滑石製勾玉・鉄器・和鏡・銅銭	徳島県教育委員会所蔵	9
		庄・蔵本遺跡第8次調査： 長井記念ホール・薬学部実験研究棟新営	1	1							陶磁器・火鉢・土師器		1
		庄・蔵本遺跡第9次調査： 医療技術短期大学校舎増築	34	24		10					弥生土器・土師器・須恵器・瓦・陶磁器・木製腰掛・管玉・鉄器・磨石・土鍾・銅銭		1
		庄・蔵本遺跡第10次調査： 酵素科学研究センター新営	47	45		1			1		弥生土器・土師器・須恵器・漆椀・銅銭・小刀		1
		庄・蔵本遺跡第11次調査： MRI・CT装置棟新営	2	2							弥生土器・土師器・須恵器片・陶器・土師器壺（二重口縁壺）		HPに概要報告書を掲載
		庄・蔵本遺跡第12次調査： 附属図書館蔵本分館増築	6								土師器（二重口縁壺）・須恵器・陶磁器・打製石器		HPに概要報告書を掲載
		庄・蔵本遺跡第13次調査： 東病棟新営（病棟Ⅰ期）	736	662	24	50					東日本系弥生土器・木器（鋤・広鍬・木包丁？・弓・機織り具の部材・棒・建築材）・磨製石器・滑石製小玉・滑石製白玉・炭化米塊		8・HPに概要報告書を掲載
		庄・蔵本遺跡第14次調査： 医薬資源教育研究センター新営	13								弥生土器・土師器・須恵器・鉄器・石鍬		HPに概要報告書を掲載
		庄・蔵本遺跡第15次調査： 共同溝設置	280	260	10	10					弥生土器・磨製石器・石斧の柄・土鍾・紡錘車		HPに概要報告書を掲載
庄・蔵本遺跡第16次調査： ゲノム機能研究センター棟建設	300	270	3	25			2		弥生土器・ミニチュア土器・土師器・須恵器・鉄斧・鉄鎌・鉄鍾・鉄片・鉄滓		HPに概要報告書を掲載		

種類	遺跡名	調査名称・工事名称	箱数							特殊遺物ほか	特記事項	文献	
			総数	土器	石器	木器・漆器類	種子	瓦	その他				サンプル
発掘	庄・蔵本	庄・蔵本遺跡第17次調査：中央診療棟新営	53	49	2	1			1		弥生土器・瓦器・異体字銘帯鏡の破鏡・鉄器		HPに概要報告書を掲載
		庄・蔵本遺跡第18次調査：ゲノム機能研究センター棟増築	45	30	5	9			1		石鏃・鉄鏃・鉄製品・滑石製白玉		HPに概要報告書を掲載
		庄・蔵本遺跡第19次調査：医学系実験研究棟Ⅱ期改修	16			8					弥生土器・須恵器・陸軍関係の木札		6
		庄・蔵本遺跡第20次調査：西病棟新営	260	220	20	20					弥生前期土器・丸木弓・木鏃・打製石器・磨製石器		6
		庄・蔵本遺跡第21次調査：医学系実験研究棟Ⅲ期改修（RI棟排水処理設備）	13								弥生前期土器・弥生中期土器・土師器・須恵器・蔽石・台石・木鏃・堰構築材・種子・食糧残滓		8
		庄・蔵本遺跡第22次調査：西病棟新営その他電気設備	5								縄文晩期土器・弥生前期土器・食糧残滓		8
		庄・蔵本遺跡第23次調査：連絡橋建設	1	1							弥生土器・旧陸軍自動小銃の弾丸		HPに概要報告書を掲載
		庄・蔵本遺跡第24次調査：藤井節郎記念医科学センター新営	3	3							弥生前期土器・穂積具の礫石器		HPに概要報告書を掲載
		庄・蔵本遺跡第25次調査：附属図書館蔵本分館増築Ⅱ期	2	2							土師器・須恵器		HPに概要報告書を掲載
		庄・蔵本遺跡第26次調査：大塚講堂改修	7	3	1				2	1	弥生土器・土師器・布留0～1式の甕・須恵器・陶器		HPに概要報告書を掲載
		庄・蔵本遺跡第27次調査：立体駐車場新営	694	459	141	80	3			11	弥生土器・銅鐸破片・青銅器破片・こぶし大の炭化籾米・木器（竪杵・鏃・鋤・弓・木戈）・石器（石臼・石杵・石包丁・打製石斧・磨製石斧・石鏃）		12
		庄・蔵本遺跡第28次調査：外来診療棟新営	5	4	1						弥生前期土器・陶器・磁器・「厚仁会」銘硬質陶器・打製石斧・木製品・種子		HPに概要報告書を掲載
庄・蔵本遺跡第29次調査：学生支援センター改修	1	1							弥生前期中葉～末の弥生土器・土師器・須恵器・暗文土器・砥石・刀子？・鉄釘		HPに概要報告書を掲載		
立会	庄・蔵本	昭和58年度：立会	1	1							弥生土器		
		平成6年度：立会	1										
		平成7年度：立会	1										
		平成7年度：貯水槽地点	18										
		平成8年度：立会	1										
		平成8年度：立会	2										
		平成10年度：病院南側溝	57	3							54		
		平成10年度：病院南側溝2	16	2							14		
		平成10年度：立会	15										
		平成11年度：ゲノム東	8										
		平成11年度：ゲノム東・北排水管・給水管	75										
		平成13年度：南西駐車場	2										
		平成15年度：消防用水	10	9	1								
		平成18年度：実験研究棟	6										
		平成18年度：栄養科学南貯水槽	1										
		平成19年度：非常用発電	5										
		平成19年度：立会	4										
平成25年度：立体駐車場	1	1	1							「徳島大学」・「厚仁会」ロゴマーク入硬質土器		12	
平成26年度：テニスコート	1	1						1				本書第3章参照	

種類	遺跡名	調査名称・工事名称	箱数							特殊遺物ほか	特記事項	文献	
			総数	土器	石器	木器・漆器類	種子	瓦	その他				サンプル
発掘	常三島	常三島遺跡第1次調査： 工学部実習棟新営	30	23	1	4			2		土師器・焙烙・陶器・磁器・泥面子・土人形・瓦・銅銭・キセル・砥石		4
		常三島遺跡第2次調査： 地域共同研究センター新営	64	56	2				4	2	土師器・焙烙・陶器・磁器・陶器・泥面子・土人形・瓦・銅銭・キセル・砥石・石臼・火入れ・鑿鉄製品		4
		常三島遺跡第3次調査： 工学部光応用工学科棟新営	306	280		26					土師器・陶器・磁器・瓦		HPに概要報告書を掲載
		常三島遺跡第4次調査： 工業会館建設	-								土師器・陶器・磁器・土人形	徳島市教育委員会所蔵	勝浦康守「常三島遺跡（徳島大学工業会館建設工事）『徳島市埋蔵文化財発掘調査概要』7、徳島市教育委員会、1997、15-31頁
		常三島遺跡第5次調査： 工学部光応用工学科棟新営（追加）	-								-	第3次調査で一括して報告	HPに概要報告書を掲載
		常三島遺跡第6次調査： サテライト・ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー新営	191	182		9					陶器・磁器・「一分金」金貨・鏝		HPに概要報告書を掲載
		常三島遺跡第7次調査： 工学部機械工学科棟新営	1598	696	30	360			512		陶器・磁器・土人形・青銅製品		HPに概要報告書を掲載
		常三島遺跡第8次調査： 総合情報処理センター新営	160	107	1	10			42		陶器・磁器・漆椀・投網用錘の鋳型・青銅製品・「一分金」金貨		HPに概要報告書を掲載
		常三島遺跡第9次調査： 共同溝設置	37	17	1	5			14		陶器・磁器・瓦・車輪（機織り用？）・木枠・貝・獣骨類・金属		HPに概要報告書を掲載
		常三島遺跡第10次調査： 工学部共通講義棟新営（共通講義棟Ⅰ期）	30	30							陶器・磁器・漆椀蓋・下駄・櫛・鉄製品		HPに概要報告書を掲載
		常三島遺跡第10次調査： 共同溝設置（Ⅱ-4区）	207	73		5			127	2	陶器・磁器・ガラス・食糧残滓		HPに概要報告書を掲載
		常三島遺跡第11次調査： 共同溝設置（Ⅱ-1・2区）	397	140		70			175	12	陶器・磁器・ガラス・食糧残滓		HPに概要報告書を掲載
		常三島遺跡第12次調査： 総合研究実験棟	135	72		36			25	2	陶器・磁器・瓦・食糧残滓		
		常三島遺跡第13次調査： 工学部総合教育研究棟新営（共通講義棟Ⅱ期）	64	32		21			5	6	陶器・磁器・瓦・食糧残滓・木椀		HPに概要報告書を掲載
		常三島遺跡第14次調査： 総合グラウンド管理舎・器具庫の配水管改修	1	1							陶器・磁器		HPに概要報告書を掲載
		常三島遺跡第15次調査： 工学部実験研究棟（電気電子棟）改修	28	15		5			5	3	土師器・陶器・磁器・瓦・火鉢・焔炉・土人形・下駄・銅銭・キセル・食糧残滓・自然遺物		2
		常三島遺跡第16次調査： 総合科学部3号館改修	115	58		7			39	11	陶器・磁器・瓦・曲物・食糧残滓		HPに概要報告書を掲載
		常三島遺跡第17次調査： 工学部総合研究棟改修	84	80		1				3	「高二 中西薫 筆洗」の墨書のある磁器・食糧残滓・自然遺物		HPに概要報告書を掲載
		常三島遺跡第18次調査： 総合科学部1号館エレベーター設置	1	1							古墳時代の土師器		8
		常三島遺跡第19次調査： 地域連携プラザ新営	11								土師器・陶器・磁器・瓦・動物骨		HPに概要報告書を掲載
		常三島遺跡第20次調査： フロンティア研究センター新営	16								土師器・陶器・磁器・瓦・貝類		HPに概要報告書を掲載
常三島遺跡第21次調査： 地域創生・国際センター新営	1	1							陶磁器		本書第1章参照		

種類	遺跡名	調査名称・工事名称	箱数							特殊遺物ほか	特記事項	文献	
			総数	土器	石器	木器・漆器類	種子	瓦	その他				サンプル
立会	常三島	平成11年度：下水管	1										
		平成13年度：体育館北電水	1										
		平成14年度：電気電子	7	2		5							
		平成15年度：建築	138					55	83				
		平成19年度：総合教育研究棟B棟改修	3										
		平成20年度：土木工学科実験研究棟	1										
		平成22年度：体育館電水	2										
		平成25年度：フロンティア研究センター	1								陶磁器・瓦		12
		平成25年度：地域連携プラザ			1			1		陶磁器・瓦		12	
		平成25年度：課外活動施設								陶磁器・瓦		12	
平成25年度：学生支援センター								陶磁器・瓦・基石・鉄釘		12			
		平成26年度：総合科学部	1	1					陶磁器		本書第3章参照		
発掘	新蔵	新蔵遺跡第1次調査： 地域・国際交流プラザ（日亜会館）新営	728	500		140		80	8	土師器・陶器・磁器・注連縄文椀・瓦・キセル・元文一分判金・銅銭・ミニチュア製品・土人形・下駄・漆椀・木蓋・骨製品・繊維製品・動植物依存体		11	
発掘	石井	平成26年度：生物資源産業学部豚舎新営	1					1		レンガ		本書第2章参照	

第5表 埋蔵文化財調査室刊行物（2014年度まで）

番号	名 称	編集機関	編集者名	発行年月日
1	庄・蔵本遺跡1-徳島大学蔵本キャンパスにおける発掘調査- (徳島大学埋蔵文化財調査報告書 第1巻)	徳島大学埋蔵文化財調査室	北條芳隆	1998年3月31日
2	常三島遺跡1-工学部電気電子棟地点- (徳島大学埋蔵文化財調査報告書 第2巻)	国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室	定森秀夫	2005年3月31日
3	庄(庄・蔵本)遺跡-徳島大学蔵本団地体育館建設に伴う発掘調査報告書-	徳島県教育委員会・国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室	定森秀夫 中村 豊	2005年3月31日
4	常三島遺跡2-工学部実習棟地点・地域共同研究センター棟地点- (徳島大学埋蔵文化財調査報告書 第3巻)	国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室	北條芳隆 定森秀夫	2006年3月31日
5	庄(庄・蔵本)遺跡-徳島大学蔵本団地動物実験施設建設に伴う発掘調査報告書-	徳島県教育委員会・国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室	中村 豊	2008年3月31日
6	国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室年報1	国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室	中村 豊	2009年3月31日
7	庄(庄・蔵本)遺跡-徳島大学蔵本団地体育館器具庫・医学部臨床講義棟建設に伴う発掘調査報告書、体育館建設に伴う発掘調査報告書補遺-	徳島県教育委員会・国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室	中村 豊	2010年3月19日
8	国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室年報2	国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室	中村 豊	2010年3月31日
9	庄(庄・蔵本)遺跡-徳島大学蔵本団地課外活動共用施設・医療技術短期大学建設に伴う発掘調査報告書、弓道場建設に伴う立会調査報告書-	徳島県教育委員会・国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室	中村 豊	2011年3月18日
10	徳島大学埋蔵文化財調査室ニュースレターNo. 1	国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室	端野晋平	2014年8月31日
11	新蔵遺跡-地域・国際交流プラザ地点- (徳島大学埋蔵文化財調査報告書 第4巻)	国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室	端野晋平	2015年3月31日
12	国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室紀要1	国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室	端野晋平	2015年3月31日

第6表 埋蔵文化財調査室刊行物正誤表一覧

『新蔵遺跡-地域・国際交流プラザ地点-』(2015年3月31日刊行) 正誤表

頁	行	誤	正
序文	7	薬学部・医療技術短期大学部・大学病院	薬学部・大学病院
8	第6図下図キャプション	安政年間(1854-1890)	安政年間(1854-1860)
44	第38図中	SK156本来の上端	SK156本来の上端
537	第2表中	68 攪乱 寛永通寶(新)	68 攪乱 寛永通寶(新・マ頭通)

『国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室紀要1』(2015年3月31日刊行) 正誤表

頁	行	誤	正
93	33	耳飾は	飾耳は
122	5	第20次調査にあたる(第1図・第1表)	第20次調査にあたる(第2図・第1表)
166	9	坂東美幸	板東美幸

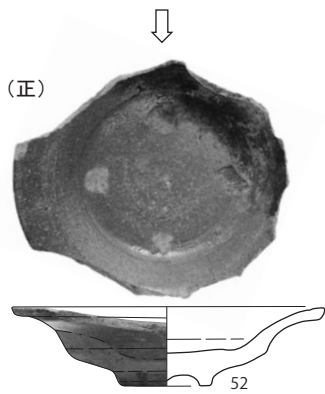
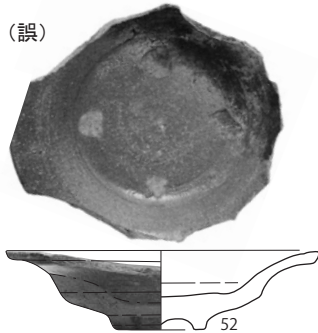
『徳島大学埋蔵文化財調査室ニュースレターNo. 1』(2014年8月31日刊行) 正誤表

頁	行	誤	正
1	15~16	薬学部・歯学部・医療技術短期大学部・大学病院	薬学部・歯学部・大学病院

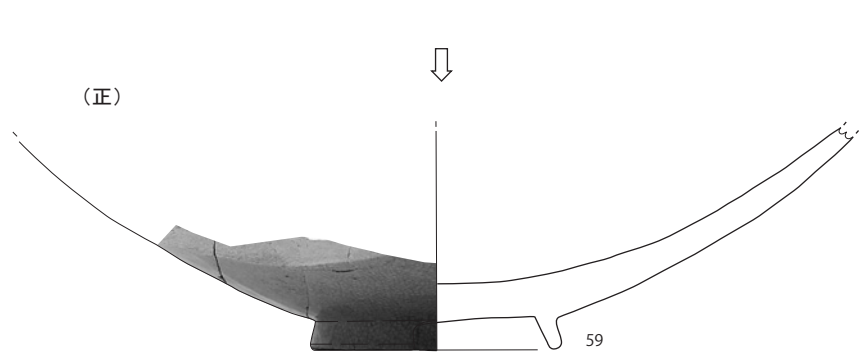
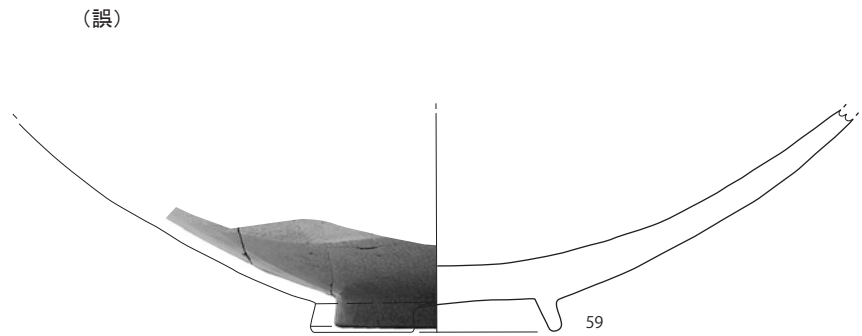
報告書掲載図面の訂正

『新蔵遺跡—地域・国際交流プラザ地点—』（2015年3月31日刊行）掲載の図に誤りがございました。以下のように訂正いたします。

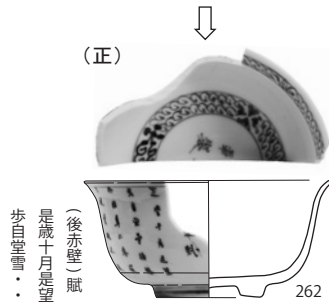
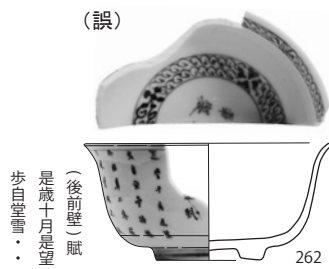
111頁第155図



112頁第156図



133頁第176図

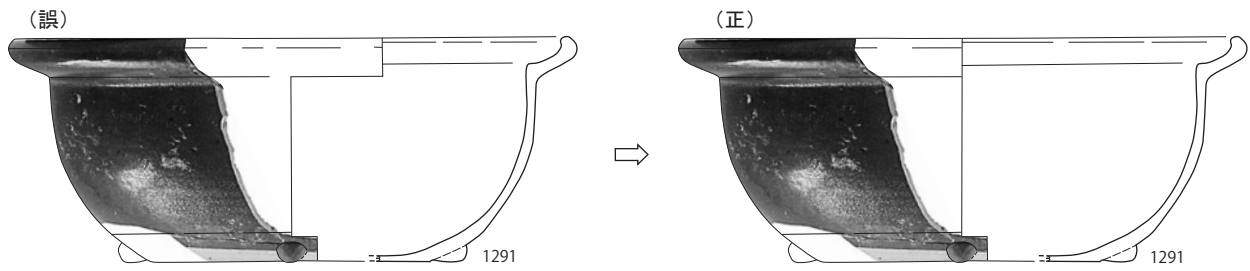


150頁第193図

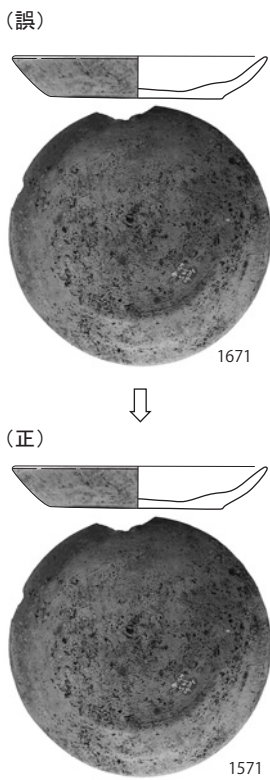


第 14 図 『新蔵遺跡—地域・国際交流プラザ地点—』 正誤対応図 1（縮尺：1/3）

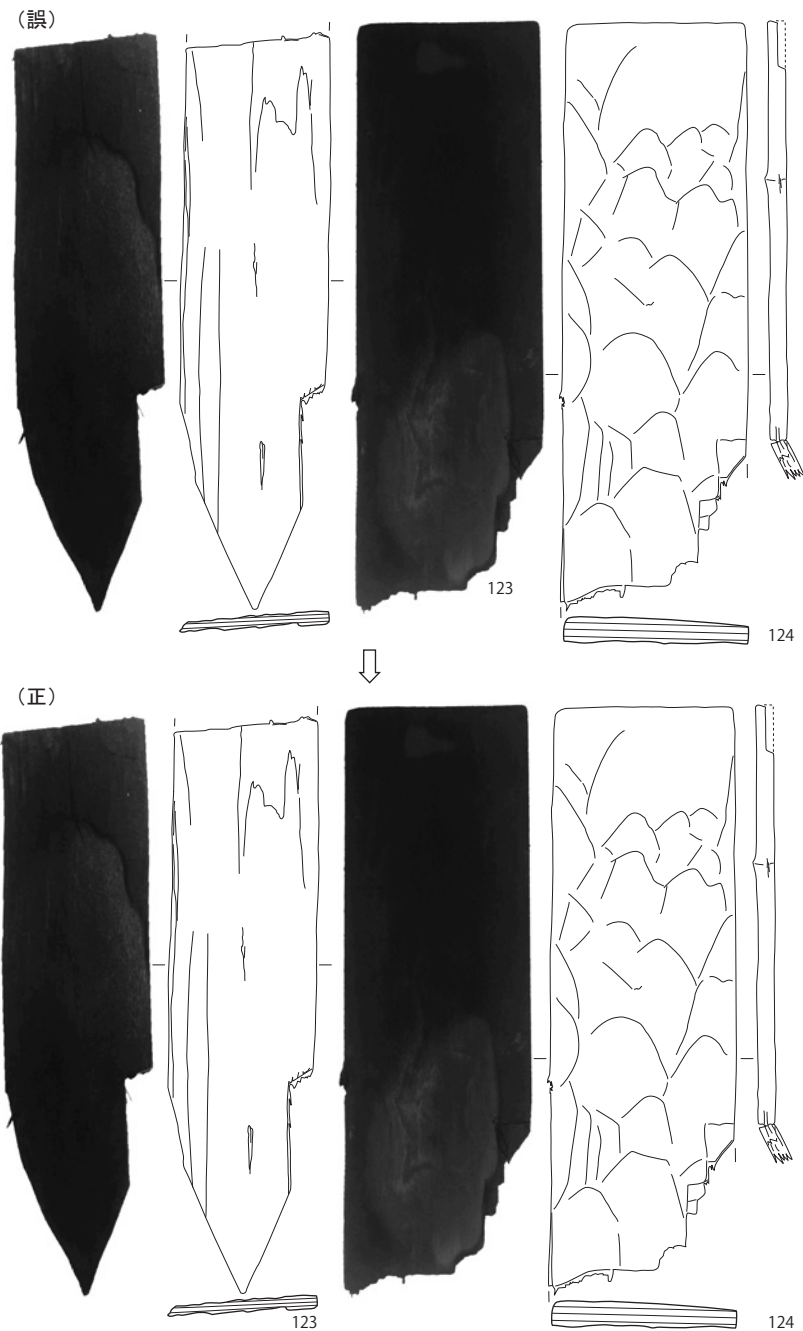
256頁第281図



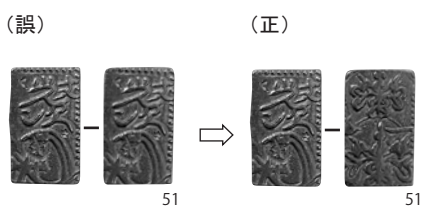
284頁第302図



438頁第524図



図版52銭貨 (3)



第 15 図 『新蔵遺跡—地域・国際交流プラザ地点—』 正誤対応図 2 (縮尺 : 1/3)

2016年3月31日発行

国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室

紀 要 2

編集・発行 国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室
徳島市蔵本町2丁目50-1 (088)633-7236
【ホームページ】 <http://tokudaimaibun.jp/>
【Facebook】 <https://www.facebook.com/tokudaimaibun>
【Twitter】 https://twitter.com/tokudai_maibun

印 刷 徳島県教育印刷株式会社
徳島市東沖洲2丁目1-13 (088)664-6776